

### 西洋哲学伝来小史

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

57

(号 / Number)

1・2

(開始ページ / Start Page)

214

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

2010-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021108>

# 西洋哲学伝来小史

宮 永 孝

はじめに

一 西洋哲学（スコラ神学）の伝来

二 宇田川榕庵の写本「西学凡」

三 江戸時代の思想家にみられる哲学的思想

——安藤昌益、三浦梅園、皆川洪園のばあい

四 西洋哲学の発見者 西周

五 明治期の哲学の傾向

西洋哲学を教えた機関

——東京大学、哲学館、伝通院、護国寺

ドイツ哲学の移入

六 大正期の哲学——専門的・学術的研究の深化

はじめに

こんにちほど「哲学」の語が広い意味で用いられている時代はない。哲学（西洋哲学）は、本来ものの原理を究める学問の意であるが、哲学のあたまたに修飾語をつけ、「恋愛哲学」「洒落哲学」「雲助哲学」「処世哲学」「戦争哲学」「愚物哲学」「狂哲学」といった語まで聞かれることがある。が、これはじぶんの経験からつくりあげた見方や世界観と哲学とを同一視したものであろう。

七

昭和期（戦前・戦中）の哲学  
日本哲学（皇道哲学）の勃興

京都学派の戦争賛美

戦時下における各大学の哲学講義題目・講義評判記

戦時下の哲学教師

戦時下の学生らのくらしぶり

八 戦後日本の哲学界

九 むすび

ヨーロッパの中でもとりわけイギリスは、*Philosophy* という語をもっとも広義に用いることで知られ、同国においては「大工哲学」という語句すら聞くことも珍しくなかった「哲学といふ語に就きて」（『早稲田文学』明治二十八年五月）。一方、わが国ではどうか。明治期の敬蒙的官僚学者・加藤弘之（一八三六～一九一六）は、「哲学会」（明治十七年一月創設）の会員・易学者の高島嘉右衛門（二八三二～一九一四）の哲学会での講演をからかい、『八百屋哲学』（よろず屋の意）と陰口をいった。

\*

わが国にまだかつて固有の哲学は存在し、成立したことがあるのだろうか。日本には古来、仏教や儒教（孔子の思想にもとづく教え）や道教（中国に起った民族的宗教）などが知られていた。<sup>(1)</sup> それらは一種の哲学的性質を帯びていたが、必ずしも哲学的に攻究せられたことはなかった。しかしながら、この三つを一種の宗教思想——広義の東洋哲学もしくは日本哲学として捉えることは可能であろう。

日本は哲学と有縁の地であったのか、それとも無縁の地であったのか。日本人の国民性や気質からいって、日本人は哲学を研究するに適しているのか否かは、いまは問題としない。

日本人のなかには、幕末・明治の西洋哲学の移入まで、いわゆる西洋流の「*Philosophy*」に相当する考え、それに似た思想をもつ者はなきにしもあらずだった。わが国の近代的学術のほとんどは、外国から輸入したものである。とくに西洋哲学は舶来の哲学であり、換言すれば「伝受的哲学」<sup>(2)</sup> にほかならなかった。

### 一 西洋哲学（スコラ神学）の伝来。

いまわたしは本稿において、『西洋哲学』（フロソフィア）がどのように日本に渡来し、それがどのようにわが国において発達し、こんにちに至ったのか、その歴史的発展の軌跡をたどってみたい。西洋哲学がわが国に伝わった正確な時期についてのべることはできないが、およその時期は判明している。西洋哲学の日本伝来は、天文十八年（一五四九）八月二十日——スペインのヤソ会宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六～一五五二）が、修道者コスメ・デ・トルレス、ジョアン・フェルナンデスのほか、日本人（パウロ、アントニオ、ジョアン）などを伴ない、鹿児島に上陸した以後のことであることだけはたしかである。

ザビエルは、布教の主要手段として、キリスト教の教理（おしえ）を個人教授するよりも学校を建て、そこで教育することに大きな意義を置いていた。<sup>(4)</sup> ヤソ会の伝道の興隆は、その教育機関の興亡の歴史でもある。当初の布教活動は、ザビエルがゴアから連れてきた日本人の親戚のものをたをまずあつめ、かれらに創造主、天地創造などについて、日本語で説明してやることから始まった。<sup>(5)</sup>

その後、宣教師は日本各地に信徒の子弟をあつめてキリスト教の教義や日本語の読み書きなどを教える寺子屋教育をはじめ、ついで伝道師や神学生を養成するためのコレジョ（学林）・セミナリオ（修業所）・ノビシャド（修練所）などを設立した。<sup>(6)</sup>

注目すべきは、後年府内（大分市の旧称）のコレジョにおいて、ラテン語文法・日本語・民族学・宗教学について、天正十一、二年（一五八三、四年）ごろに「哲学」の講義がはじまり、天正十三年（一五八五）にはスコラ神学の研究がはじまったことである。このころアリストテレスの論理学やプラトンの哲学などの講義を聴いた日本人もいたはずである。西洋哲学の片りんが神学を通じてわが国に伝わったのは、安土桃山時代であるが、そのくわしい内容については明らかでない。

しかし、長崎や天草で布教用の教義書として刊行された、いわゆる「キリシタン版」のなかに、

フィロソフィア……Philosophia（「哲学」の意のラテン語）

ヒロゾフォ……Philosopho（「哲学者」の意のポルトガル語）

の語が散見する。

キリシタンの諸学校で教えられた「フィロソフィア」は、ヨーロッパ中世の哲学（宗教哲学、神学）——いわゆるスコラ哲学であった。それが一部のキリシタン信徒に教授されたとしても、一般大衆とは無縁であった。日本におけるキリスト教は、寛永の初年（一六二〇年代）より漸次迫害の度をふかめ、またわが国には哲学的思弁的思索の伝統が<sup>(8)</sup>なかったために、この渡来のフィロソフィアは、わが国に根づくことなくそのまま絶滅した。

しかし、江戸時代の末期に、ある信徒がじぶんの告白、さんげ文を政府に提出したさいに、その文章の中に、すこし変な発音であるが、プラトンとかアリストテレスの名称が書かれていた。このことから哲学者の名や学説が多少伝わっていたと考えられるという。<sup>(9)</sup> 室町時代に南蛮人が、日



『サントスの御作業』(1591年刊)肥前国高来郡加津佐学院で刊行された文語体ローマ字綴本。

本人にまず伝えたものは鉄砲であり、ついでキリスト教であった。そのほか天文学・航海術や語学なども伝授した。

いまわれわれは「フィロソフィア」とか「ヒロゾフォ」や「テオロギア」といった語をキリシタン文献のなかに見いだすことができる。

「フィロソフィア (Philosophia)」の語が出てくるキリシタン版は――

『サントスの御作業』(ローマ字本。一五九一年「天正十九年」肥前国高来郡加津佐学院で刊行)

『ヒイデスの導師』(信心録、ローマ字本。一五九二年「文禄元年」天草の学院で刊行)

『コンテンツス・ムンヂ』(信心書、ローマ字本。一五九六年「慶長元年」天草の学院で刊行)

などであり、「ヒロゾフォ」(Philosopho)の語は、『サントスの御作業』や『ヒイデスの導師』に、また「テオロギア」(Theologia)は前者に見いだすことができる。

ところでキリシタン版において、「フィロソフィア」の名称はどのように説明されているのか。その最も要領をえた説明はつぎのようなものである。

ヒロゾホの話にも、人は新しき事を見て驚き、その由緒を知らんと歎くこと常の法なりと云へり。譬へば日月の蝕するを見てはその謂はれを知らんと歎くより、ヒロゾハルといふ事は出て来たる也。此を以てその根元を知るもの也(姉崎正治『切支丹宗教学』所収、七〇〇頁、第二十五章、「サントスの御作業」)。

右の文を三枝博音(二八九二―一九六三、昭和期の哲学者・科学史家)は、左記のようにやさしく訳した。



『こんでむつすむん地』(慶長15年〔1610〕4月、京都・原田アントニヲ印刷所刊)。漢字ひらがな交り文。

ヒロゾホ「哲学」ということばの意味は、人間というものは新しいことを見て驚嘆し、そしてそのわけを知りたいとおもうものである。たとえば、日蝕や月蝕を見ると、そのわけを知りたいものと切におもう。そういうところから、ヒロゾハル「哲学すること」ということはおこったのである。これで見ると、ヒロゾホということは根元を知ることなのである。<sup>(10)</sup>

二 宇田川榕庵の写本「西学凡」。

わが国に西洋哲学(スコラ神学)の断片が伝わったのは十六世紀(安土桃山時代)であるが、十七世紀(江戸時代)に入ると、中国在住のイタリアのヤソ会士ジウリオ・アレニが編んだ漢訳(籍)『西学凡』(シシユエファン)によって、西洋の学術の体系が日本にも伝えられたと考えられる。その中には、フィロソフィアを音訳した「斐録所費亞」の語がみられた。

中国においてヨーロッパの学術が伝わったのはマテオ・リッチ(一五五二〜一六一〇)、イタリアの宣教師、「漢名」利瑪竇(リマタウ)以後のこととされている。ジウリオ・アレニ(一五八二〜一六四九、イタリアのイエズス会士、上海・揚州・山西・福建などで布教活動した。「漢名」艾儒略)が著わした『西学凡』(杭州で刊行された)は、明末の天啓三年(一六一三)——徳川家光が将軍となるわが元和九年の刊行である。

わが国においては、翌寛永元年(一六二四)に禁教策が強化され、同七年(一六三〇)にはキリスト教関係の書物の輸入が禁止された。『西学凡』もその附録「景教碑」が原因となり、禁書となった。『西学凡』はヨーロッパの学術を大観した書物であるが、わが国に言うに足るほどの影響をあたえなかったようだ。

宇田川榕庵(一七九八〜一八四六、江戸後期の蘭学者、幕府天文翻訳方)は、この



宇田川裕庵

『西学凡』の写本（和とじ 23.8 cm × 16.5 cm、厚さ 0.6 cm、三〇葉 二六〇頁、題簽の一部を欠く）を所持していた（現在・早稲田大学中央図書館の貴重本）。が、写本年は不明である。十三頁の欄外に緑色で「裕庵按本邦寛永三年蘭千六百二十六年」といった書き入れがある。この文章はどう解すべきか。

『西学凡』の刊行年は、わが元和九年（一六二二）にあたるが、宇田川は刊行年をわが寛永三年——洋暦の一六二六年と考えたものであろう。かれはいいたいところこの写本を入手したものか明らかでないが、この写本によってヨーロッパの学問が六科に分けられ、かつその教授の順序はどのようなものか識っていたようである。すなわち——、

- 文科……勒鐸理加 (rhetorica)
- 理科……斐録所費亞または斐録所 (philosophia)
- 医科……默第濟納 (medicina)
- 法科……勒義斯 (leges)
- 教科……加諾擲斯 (canones)
- 道科……
  - 陸祿日亞 (theologia)
  - 落日加 (logica)
  - 費西加 (physica)
  - 默達費西加 (metaphysica)
  - 馬得馬弟加 (mathematica)

注・各科目のよみ方は、原文に付けられているルビの通りにした。

六科（雄弁術「修辞学」・哲学・医术・立法・規範・神学）などの語が出てくる原文は、つぎのようになっている。

重刻西学凡

大西艾儒略答述 閩中欽一堂梓

極西諸國、總名歐羅巴者、隔於中華九百里、文字語言、經傳書集自有本國聖賢所紀、其科目考取、雖國各有法、小異大同、要之盡於六科、一爲文科、謂之勒鐸理加一謂理科、謂之斐錄所費亞、一爲醫科、謂之默第濟納、一爲法科、謂之勒義斯、一爲教科、謂之加諾揚斯、一爲道科、謂之陡錄日亞……(十三頁)

榕庵按本邦  
寬永三年和  
蘭千六百二  
十六年(注)

(注) 欄外に綠色による、このような書き入れがみられる。

極西(欧州)の諸國、總じて歐羅巴と名づける者は、中華(中国)を隔たること九万里なり。文字語言(ことば)、經伝書集(中国の書物)、みずから本國聖賢(聖人と賢人)の紀すところあり、その科目を考取する(調べる)に、國にそれぞれ法ありといえども、小異大同にして、これを要すれば六科に尽く。一に文科に為り。これをレトリカという。一に理科(ものの筋道)といい、これをヒロソヒアという。一に医科たり、これをメデシナという。一に法科たり、これをレギスという。一に教科たり、これをカノネスという。一に道科たり、これをテオロジアという。……

哲学や自然哲学(物理学)や形而上学などについて説明した文章は、つぎのようなものである。

理學者、義理之大學也、人以義理超於萬物而爲萬物之靈、格物窮理、則於人全而於天近、然物之理、藏<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>物中、如<sub>二</sub>金<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>砂<sub>一</sub>如<sub>二</sub>玉<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>璞<sub>一</sub>須<sub>レ</sub>淘<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>割<sub>レ</sub>之、以<sub>二</sub>斐錄所費亞<sub>一</sub>之學、此斐錄所者、立<sub>テ</sub>爲<sub>二</sub>五家<sub>一</sub>分<sub>テ</sub>有<sub>二</sub>門類<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>支節、大都學之專者、則三四年可<sub>レ</sub>成、初一年學落日加夫落日黑者、譯言明辨之道……

(十六頁)

理学（自然科学）とは義理の大学（正しいすじみちを究める大きな学問）なり。人は義理をもって万物に超え、しかして万物の霊（本質）たり。格物（窮理）（物事の道理をきわめて、知識をふかめる）は、すなわち人において全く、天においては（意味不明）う。しからば物の理は蔵して、物中にあり。金の砂に在るごとく、玉の璞（みがかない玉）に在るが如し。すべからくこれを淘し（えらび分ける）、これを刮する（判断する）には、ヒソロピアの学をもってす。ヒソロピアは立てて五家（五つの学科）をなし、分つて門類（派）あり、支節あり。大都（おおむね）これを学ぶこともっぱらなる者は、三、四年にして成るべし。

はじめ一年はロジカなるものを学ぶ。訳して明弁（明らかにわきまえる）の道という。

第二年專學費西加、爲斐錄所（注）之第一家、費西加譯言察性理之道以剖判萬物之理、……（十九頁）

（注）榕庵は『斐錄所』の語に、綠色で『ヒソソ』とルビをふっている。

第二年にはもっぱらヒシカを学ぶ。ヒソソ（ヒア）これを第二家（第二番目の科目）となす。ヒシカは、訳して性理（本性）を察するの道をいい、もつて万物の理を剖判（分析して判断）するなり。

第三年進斐錄所第三家之學、所謂達達費西加者、譯言察性以上之理也（二十一頁）

第三年はヒソソピア、第三家（第三番目の科目）の学にすすむ。いわゆるメタヒシカなる者は、訳して察性以上之理といふなり。

文中の六科は、西洋における学問の体系を紹介しているが、あまりにも説明が簡単であるため、読者にその意がじゅうぶんに通じたかどうか疑問である。が、宇田川は『斐錄所』には、綠色で「ヒソソ」とルビをふり、またつぎに引用する文中にみられる『斐錄所費亞』においては、朱色で「ヒソソピア」とルビをふっていることから、『哲学』（フィロソフィア）に相当関心をもっていただようにも想像される。

各於斐録之學、互相闡發、而加之以天主超性之確理人學愈爲透露也、斐録所費亞之學既畢、則考取之、……（二十七頁）

それぞれ斐録ヒロソピアの学においては、（意味不明） 発し、これに加えるに天主超性の確理をもってすれば、人の学はいよいよ透露とならん。ヒロソピアの学、す  
でにおわりなば、すなわちこれを考取し……

なおジウリオ・アレーニの漢訳『西学凡』は、禁書として容易に見ることのできぬ書であったが、渡辺華山（一七九三〜一八四一、江戸後期の画家・思想家）は、同書を所蔵していたようだ（高槻未知生「我が蘭学者と科学的思想の発達」『東洋哲学』第二五篇第二号所収、東洋哲学発行所、大正七年二月）。

また中国における西洋哲学についていえば、それを初めて伝えたのはカトリック教の宣教師・傅汎済（F. Furrado）であり、明末（十七世紀）のこととされている。傅フは李リ之藻ツツとともにギリシャの哲学者アリストテレスの實有詮六卷と名理探十二卷を中国語に訳したが、實有詮六卷は世に出ず、名理探は民国十五年（一九二六）になって、北京の私立大学・輔仁大学フアレンヂヤンから出版された。

西洋思想文明の哲学は、義和団の乱（一八九九〜一九〇〇、清末の反キリスト教的排外運動）の前後にいたって、敵復イエンフツによって再び輸入された。敵復はミルやスペンサーのものを訳したが抄訳であり、どれも概論のたぐいであった。したがって、清朝末期ごろに中国に入ってきた西洋哲学は、断章不全の学説であったようだ（張星娘著 実藤忠秀訳 『西洋文化の支那への影響』日本青年外交協会出版部、昭和十六年四月、二一八〜二一九頁）。

キリシタンにたいする弾圧は、寛永十四年（一六三七）の島原の乱をピークとし、以後禁教はさらに強化され、幕末までつづくのだが、この間西洋哲学思想の移入も展開もほとんどなされなかった。享保元年（一七一六）徳川吉宗（一六八四〜一七五二）が宗家をついたのち、洋学奨励期をむかえるのである。その約二十年後の天保六年（一八三五）秋ごろ——蘭学者・高野長英（一八〇四〜一八五〇）は、「聞見漫語」と題す一文を草した。これはオランダ文の学術書の序のようなものを訳した印象をあたえるが、西洋哲学史を略記したものであり、いまに遺る最古の文献である。古代から十七世紀あたりまでの有名な哲学者や自然科学者が登場する。

高野はこの中で、哲学者のことを「学師」と呼んでいる。ともあれ、幕末ちかくなつて、西洋学術の本源である哲学に注意をむけたものが現

れたことは注目に値する。

高野は西洋の学術を研究することによって、政治的社会的関心をふかめ、晩年には幕府の対外政策を批判してその忌いふれ、永牢の処分をうけた。が、やがて放火脱獄し、変名をもちい逃亡生活を送るうちに、ついに幕吏に襲われ、自殺するといった数奇な運命をたどった。西洋の哲学に注目した点では、宇田川榕庵に共通するものがある。当時、一世に傑出した学才にめぐまれながら、みずから命を絶たざるえなかったことは惜みてあまりある。

\*

帆足万里（一七七八〜一八五二、江戸後期の儒学者・理学者）は、オランダ語の科学書をよんで西洋の自然科学に通じ、「窮理通」（未定稿、八巻）を著わしたことでその名は知られている。「窮理通」の資料となったものの原書（十数冊）の書名は、だいたい判明している。「窮理通」の引用書目のなかに、

『繆仙武羅骨窮理説』（一七三九）

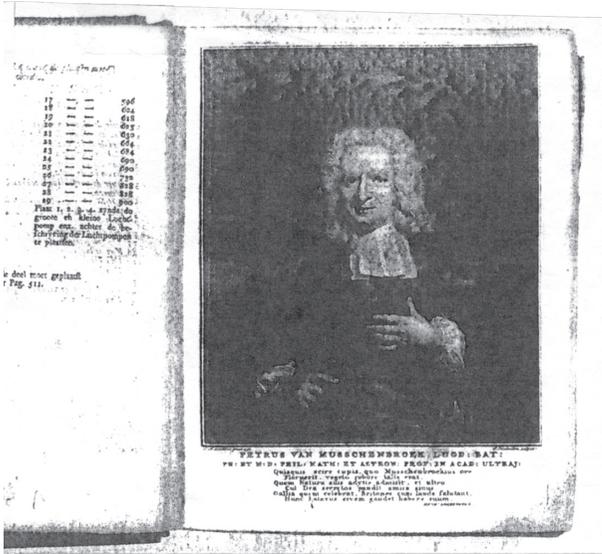
という蘭書名がみられる。

著者は、ピーテル・ファン・ミュセンブルック（二六九二〜一七六二）という、オランダの数学者兼物理学者である。ミュセンブルックはドイツのデュースブルック、オランダのユトレヒト、レイデン大学教授を歴任した。帆足が所持していたと同じ版本が、いま大分県立大分図書館の佐伯文庫に架蔵されており、その書名（邦訳）には――

ミュセンブルック、ペトルス ファン

「自然学原理―国民のための」

第一部 第二部



ペトルス・ファン・ムゼンブルックの肖像。



大分県立大分図書館蔵

ライデン サムエル ルヒトマンズ 一七三九  
 九〇〇P 図表 26 cm × 20 cm

とある。さらに見開きに「国民用理学初歩（蘭書）一冊 蘭人ペトロス ファン・ミュセンブルック著 サムエル ルヒツマン社発行 西暦一七三九年版」とある。原書名は上記（写真）のようになっている。

書名の意は、左記のようなものである。

『物理学の原理—同国人のために書かれたもの』。最近刊行されたルフトボムベンの多くの実験を利用した記述によって補足した書。

一七三九年 レイデンのサムエル・ルフトマンズ社刊。第一巻 第二版。

じつはこの本の「序文」(Voorreden)に、有名なところではアリストテレスやデカルト、ニュートンといった名前が出てくるし、「第一章 哲学および推論のやり方について」(I. Hoofdstuk. Over de Wysbegeerte, en Regels van redeneren)に「われわれはそれをウェイスベヘルテもしくはフィロソフィと呼ぶ。すなわち、それら(哲学)は万物についての学問である(welke wy noemen Wysbegeerte of Philosophie: deze is eene weetenenschap van alle zaaken,)」といった文章が見られる(二頁)。

また哲学の語源についての記述に、つぎのようなものがある。

Het woord *Philosophie* is van Grieksche afkomst, en saamgesteld uit twee worden *φιλο σοφια*, dat is *Beminnar van Wysheid*: het is uitgevonden van Pythagoras: (p.2)

〔訳〕

フィロソフィという語は、ギリシャ語から来ている。ピロ（愛している）とソピア（知恵）の二語が一つになったもので、知恵を愛する人、といった意である。それはピタゴラスが考案した語である。

帆足万里は、この *Philosophie* といった語に注目しただろうか。それともそれを読みとばしたであろうか。これらの点については、何ともいえない。が、江戸後期に *Philosophie* の語が、帆足という日本の科学者の目にふれたことだけはたしかである。

本来、学問はひとが世間でくらすうえで役に立つものでなければならぬもの、とわたしなどは常々考えている。世間一般のひとは、哲学ということばを耳にすると、あたかもそれがむずかしくて、とんと意味のわからぬものと決め込んでしまう。

哲学のことを、「浮世に利益を為さぬ無用の長言と為すものは哲学なり」と、ユーモラスに茶化したのは、白眼道人戯著『処世哲学 一名紳士の綱渡り』（博文堂、明治二十年十二月）である。かつて「哲学」とはどのようなものと考えられていたのか。いま明治期の識者が考えていた語義のいくつかを引いて参考に供してみよう。

「哲学」はインドや中国やヨーロッパ各国でおこったものであるが、わが国には久しく「日本哲学」の名実（名称とじっさい）あるを聞かなかつた。哲学の「実」（本質）とはなにか。それは物質や精神、神についての事理について究めることである（筒井明俊「日本哲学」『明治会叢誌』第九号所収、明治二十二年八月）。

また井上円了（二八五八〜一九一九、明治期の仏教哲学者）によると、「哲学」とは何かといえは、「無形ノ心（核心）ヲ相手ニシテ研究スル学問」であるという。哲学と宗教のちがいはどうか。神を相手にして組立てた教えが宗教であるという（井上円了「哲学総論（接第七号）」『日本大家論集』第二巻第十号所収、明治二十三年十月）。

ほかに哲学の字義について解した古い例として、「事物本原の理を推究するの学」といったものがある（九鼻老逸「哲学」『陽明学』第一号所収、



『日本大家論集』(明治23・10)の扉。

明治四十一年十一月)。

三 江戸時代の思想家にみられる哲学的思想——安藤昌益、三浦梅園、皆川淇園のばあい。

江戸時代のわが国の思想家のなかに、「フィロソフィア」に相当する学問や哲学的思想をもつものがいたのであろうか。その先蹤(せんしやう) (先例) なきにしもあらずである。

漢語の「哲」は、物事の道理にあかるい、才知にすぐれた人、哲学の略などを意味する。西洋思想がわが国に移入される前の哲学を考えると、<sup>12)</sup>「哲」ということばを用いて知識上のまたは思想上のひとつの組織を試みた日本人の有無をさぐったのは、三枝博音であった。

安藤昌益(しやうえき) (一七〇三〜六二、江戸中期の思想家・医者) の著述『自然真営道』の第二十五巻は、「真道哲論」の巻である。これは別名「良演哲論」である。——良とは良中(昌益)の名前であり、演とは昌益の説、哲とはかれの門人のうち、その意をほんとうに知ることの意である。論は門人らが師の意を弁論する意味である。

仙曰良乃確龍堂良中之名也矣。演先生自演也。哲群門人知先生言也。論乃門人辯論師意也。

仙曰く、良はすなわち確龍堂良中の名なり。演とは先生みずから演ずるなり。哲群の門人先生の言を知るなり。論とはすなわち門人師意を弁論するなり。

安藤がいう「哲論」とは、ひとつの思想体系、ひとつの世界観的立場、ひとつの思想組織であった。かれは「哲論を明らかにする」とか、「此の哲論は、無始無終なる活真自感互性の妙道なり」といった使い方をしている。安藤は『自然真営道』において、いわゆる世界観を構成的にのべているから、それは日本人がつくったひとつの哲学だといふ。<sup>(12)</sup>

三枝によると、三浦梅園(一七二三〜八九、江戸の中・後期の思想家)の『玄語』も日本に



阿弥陀寺 [京都上京区] にある皆川淇園の墓 [筆者撮影]

おける「フィロソフィア」の一つの実例であるという。

三浦のおもな著述といえは、『玄語』『贅語』『敢語』の三つであり、これを俗に「梅園三語」という。『玄語』は、人間をふくむ全自然界のなかに働いている条理（法則）を見いだそうとしたものである。『贅語』は、天地間のいっさいの事象の實質的な知識を含んでいる。『敢語』は、かくかくあるべきである、と説いた倫理書である。

『玄語』（宝暦三年「一七五三」起筆、安永四年「一七七五」脱稿）は、学問的知識の原理的な問題だけを扱っているから論理学書とみなすことができるという。三浦は「哲」という語を用いず、『玄』といった。漢語の「玄」は、奥深い道理とか天地万象の根本の道を意味している。三浦のいう「玄」とは、知的追求のことではなく、条理を追求して出くわしたものの意のようだ。

皆川淇園（一七三四〜一八〇七、江戸後期の儒学者）には多くの著述があるが、かれは自著『名疇』（天明八年「一七八八」刊行。儒学における孝・悌・忠・信・恕などを解釈したもの。原文は漢文）において、「学」と「哲」の概念を規定している。漢語の「学」は、知るとか習う、研究するのほか、学者や学舎、体系的な知識など、じつに多くの意味をもつ語である。「哲」は、あきらかなること、物事の道理に明るいこと、またその人。哲学の略として用いられている。

皆川は「哲」ということばの学問的意味をさぐった思想家であった。『哲学』という訳語をつくったのは西周であったが、西は皆川淇園のそういった試みに気づいていたとおもえぬという（三枝博音）。

皆川は『名疇』（第五卷）において、「詩経や書経のなかに哲のことはずいぶん出ている」といい、多くの引用をおこなっている。<sup>(13)</sup>

詩書の中に、哲を言ふもの甚だ多し、書（経）の阜陶謨に云ふ、人を知れば則ち哲、能く人を官にす、と。洪範に云ふ、明哲を作す、と。……

皆川が「哲」ということばにおいて汲みとろうとしたのは、ただ単に知るといふのでなく、深い意味を実践的に知ることであったのではないか<sup>(14)</sup>



西の二度目の下宿。  
レイデン市 Nieuwryn 94 番地。〔筆者撮影〕



鳥取県津和野のある西周の旧宅。〔筆者撮影〕

という。

安藤昌益や三浦梅園や皆川淇園にしても皆、物事の道理をたどって考えようとした思索者であった。このほかにも西洋思想伝来の前史に登場するわが国の思想家に海保青陵（一七五五～一八一七、江戸後期の経世家、浪人儒者）や富士谷御杖（一七六八～一八二三、江戸後期の国学者）などがいる。<sup>(15)</sup>

#### 四 西洋哲学の発見者 西周<sup>あまね</sup>

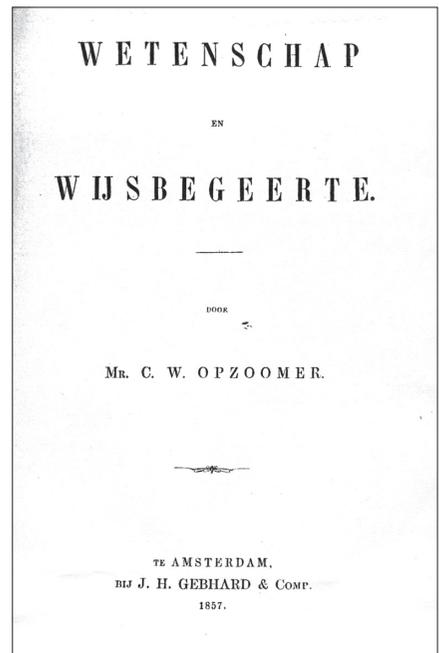
西周<sup>あまね</sup>（一八二九～一八九八、明治期の啓蒙的官僚学者）は、わが国に西洋哲学を移入した最初の哲学者である。かれは「哲学」の訳語や哲学的述語をつくったことで知られ、日本における近代哲学の父とも呼ばれている。かれはまず津和野において藩学である朱子学をまなび、ついで徂<sup>そ</sup>徠<sup>らい</sup>学を攻究し、さいごに洋学に傾倒するにいたった。が、西洋哲学にはじめて関心を寄せた時期は、幕命によりオランダ留学の途にあがるまえ——文久二年（一八六二）以前のことである。当時は、幕命によりオランダ留学の手伝並であり、英書によって西洋哲学をまなんでいた。

留学先のオランダでは、政治学・法学・経済学などを学ぶのがおもな目的であった<sup>(16)</sup>が、それらを学ぶにしても根本である哲学を学習する必要性を悟るにいたった。当時オランダにおいて勢力があったのはコントの実証哲学であった。西にとって哲学とは、すべての経験的科学的統一する学であり、「百学の学」であった。<sup>(17)</sup>

西と津田はレイデン大学のフィッセルグ教授の私宅において個人授業をうけるかわら、哲学や語学や文学の研鑽につとめた。西が留学した当時、オランダで盛名があったのは経験論を唱道したユトレヒト大学教授のコルネリウス・ウィレム・オプゾーマー（一八二二～九二）である。オプゾーマーには、



コルネリス・ウィレム・オブゾマーの肖像



オブゾマー著『科学と哲学』(1857年)。  
[筆者蔵]

『哲学…』 (一八四三年)

『信仰の成果』 (一八四八年)

『科学の方法』 (一八五一年)

『国内法研究』 (一八五四年)

『科学と哲学』 (一八五七年)

『真理とその根源等』 (一八五九年)

『知識の本質—論理学読本』 (一八六三年)

などの著書<sup>(18)</sup>があった。

帰国後、西はイギリスのベンサム(一七四八—一八三二)やミル(一八〇六—七三)の功利主義に傾倒し、その著書を訳したり紹介したりした。<sup>(19)</sup>西の哲学的思想の淵源は、コントとミルの実証主義であり、儒学や仏教は虚学であり、かれにとって「遠西の学」こそが実学<sup>(20)</sup>であった。

いずれにせよ西周こそ、日本に西洋哲学を移入した最初の哲学者<sup>(21)</sup>であったことはたしかであり、明治十年(一八七七)以前のわが国の哲学的啓蒙活動は、ほとんど西周のひとり舞台の観<sup>(22)</sup>があった。

尊王攘夷といった思想は、日本の開国とともに一変し、“西洋崇拜”の思想を呼びおこしたのである。とくに明治初年における人心は、風俗習慣までも西洋風に変えることを欲した時代であった。<sup>(23)</sup> 西南戦争がおこったのは明治十年（一八七七）二月のことだが、この戦役の前後から一般国民はヨーロッパの文物をまじめに研究するようになった。それ以前の国民は、ただ漠然と西洋熱に浮かされていたのであるが、このころになると維新の改革熱がようやく鎮静化にむかいつつあったという。<sup>(24)</sup>

戊辰戦争の結果、幕府勢力が一掃され、天皇親政による新政府が樹立されると、新政の基本方針（「五箇条の御誓文」）が発せられた。旧幕時代においては、攘夷というものが幕府を倒すための標語であったが、新政府は旧来の陋習（わるいならわし）を破り、知識を世界にもとめ、皇基（天皇の天下統一の基礎）を盛んにすることを新政の方針のひとつとした。

悪しき習慣を一洗とするといいても何をすればよいのか。それに代るべきものを求めねばならないが、知識を世界にもとめることがこれであった。それは換言すれば“西洋文化を輸入”することであった。日本人が西洋文明に接したとき、驚嘆しかつ渴仰したのはその物質的文明であり、その輸入に努力したのは英米の実利的文明であった。

明治五、六年（一八七二、三年）ごろまで、西洋の学術や思想が輸入されたが、それらはただ直訳的に移入しただけであり、<sup>(25)</sup> じゅうぶんに消化したとはいえなかった。同十年代に入ると、いわゆる“西洋心酔時代”となった。それは自覚と理解と必要からおこったものでなく、浅薄な模倣にすぎなかった。<sup>(26)</sup>

明治期の哲学思潮の特徴といえば、一種の啓蒙思潮にほかならず、“外国哲学の輸入”が、明治時代の哲学の特徴といえた。<sup>(27)</sup> 外国哲学の輸入は、明治時代だけにとどまらず、大正・昭和へとつづくのである。

## 五 明治期の哲学の傾向。

いま明治期の哲学界の大勢を歴史的に区分すると、つぎの四つに分けることができる。いうまでもなく明治哲学の主要勢力は、社会学がそうであったように、外国からの“移入哲学”<sup>(28)</sup>であった。

第一期……明治初年（準備または発生時代）から同二十年ごろまで（一八六八―一八九五）。この時期は、明治哲学の創業時代もしくは啓蒙時代と呼

ばれうる。

第二期……明治二十年から同三十年ごろまで（一八八七〜一八九七）。

第三期……明治三十年ごろから同四十年ごろまで（一八九七〜一九〇七）。

第四期……明治四十年（一九〇七）前後から末期（一九二二）までを指す。明治の約四十年間は、およそ十年ごとに哲学的にも思想的にも、かなり顕著な変遷があったように思えるという（金子筑水「明治大正の哲学」『太陽 明治大正の文化』所収、博文館、昭和二年六月）。

維新の革命がなるや、本邦古来の諸制度はほとんど破壊せられ、<sup>(29)</sup> 固陋は根底よりくつがえった。新政府のもと一連の改革がかなりのスピードをもっておこなわれ、明治十年（一八七七）の西南戦争までの大きな政治的改革としては、廃藩置県（明治四年）、学制の発布（明治五年）、徴兵令の布告（明治六年）、地租改正の布告（明治六年）などがおこなわれ、とくに政府の諸政策を不満とする不平士族の反抗は、西南の役を頂点として爆発した。しかし、その後の士族の反政府運動の中心は、自由民権運動へと移っていった。

明治五年（一八七二）三月——政府は国学者や平田派の復古神道家の主張を容れて、天皇人格化と国民教化をはかるために教部省を設けたが、同十年（一八七七）廃された。他方では、明治の哲学は福沢諭吉（一八三四〜一九〇二）のイギリス流の実利主義（現実の利益を重視する精神的傾向）や実利主義をもってはじまり、人生をよりよくするための手段としての学問（実学）や独立自尊（ひとりて事をおこない、自己の尊厳と人格をたもつ）を鼓吹した。福沢の主張は、『学問ノス、メ』（明治五年（一八七二）から同九年（一八七六）まで間に十七編著わした）や『文明論之概略』（明治八年刊）などによく現われている。

福沢の見識の基礎になったものは、幕末において三たび欧米視察をしたときにえた見聞や知識である。かれはそのときの体験から独得の経済的文明観を構築したといえる。一方、明六社（明治初期の思想団体）の同人は、機関誌『明六雑誌』によって各方面にわたって敬蒙活動をさかんにおこなった。

明治十年（一八七七）前後から西周、中江兆民らによって英仏の実証哲学が輸入され、また外山正一らは英米の進化論哲学を普及させた。これらの西洋思想は、純然たる哲学思想としてわが国に移入されたのではなく、実用的な政治思想として紹介され、宣言され、伝播されたものである。すなわち、政治との連関でわが国に輸入された。<sup>(31)</sup>

明治十年前後、国会（民撰議院）設立運動が盛んであり、功利主義的な英米思想に加えて、フランス流の自由思想が板垣退助らの主唱によって政界に宣伝された。<sup>(32)</sup> 第一期にわが国に輸入された英仏の哲学者は、――

- (英) ジョン・スチュアート・ミル（一八〇三〜七六、ベンサムの功利主義思想の大成者）
- (英) ジェレミー・ベンサム（一七四八〜一八三二、功利主義の提唱者）
- (英) ハーバート・スペンサー（一八二〇〜一九〇三、進化論の概念を諸分野に適用）
- (英) ヘンリー・トマス・バックル（一八二一〜六二、文明史家）
- (仏) ジャン・ジャック・ルソー（一七一二〜七八、人民主権にもとづく共和制を主張）
- (仏) シャルル・ド・スコンダ・モンテスキュー（一六八九〜一七五五、啓蒙思想家）
- (仏) フランソワ・ピエール・ギローム・ギゾー（一七八七〜一八七四、政治家・歴史家）

などである。このうちミルやスペンサーの政治論、ルソーの自由民権思想、モンテスキューの法理論などがもっとも適切に受け入れられた。第一期（明治初年〜同二十年代）に刊行された思想的文献をかかげると、つぎのようになる。

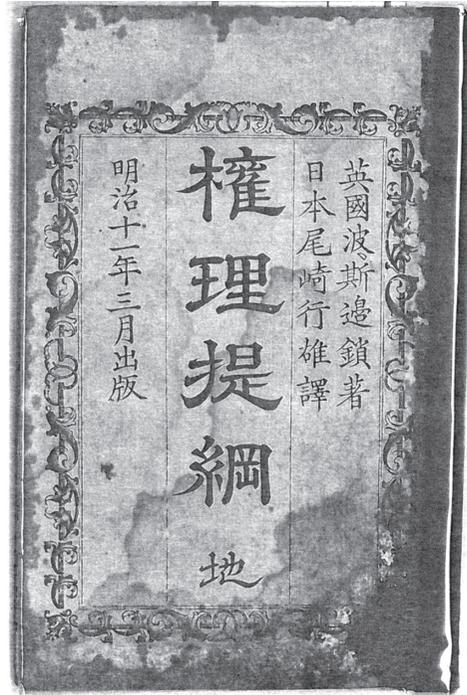
- |                     |                             |       |
|---------------------|-----------------------------|-------|
| 英国 彌爾<br>中村敬太郎訳     | 『自由之理』 静岡木平謙一郎版             | 明治四年  |
| 英国 ミル著<br>中村正直訳     | 『改 自由之理』 木平讓出版              | 明治四年  |
| 仏国 ギゾー氏著<br>永峰秀樹訳   | 『欧羅巴文明史』 奎章閣蔵版              | 明治七年  |
| 英国 彌留氏原著<br>大日本西周訳述 | 『利学』 物翠樓蔵版 出版人<br>発兌書肆 嶋村利助 | 明治十年  |
| 戎雅屈蘆著<br>服部徳訳       | 『民約論』 有村壯一蔵版                | 明治十年  |
| 英国 波斯邊鎖著<br>尾崎行雄訳   | 『権利提綱』 慶応義塾出版社              | 明治十年  |
| 片岡綱紀編               | 『内外大家論説集』 出版人 山中市兵衛         | 明治十三年 |

(注) ギゾー（欧羅巴文明史）、スマイルズ（自助論）、モンテスキュー（方法精理）などの翻訳をふくむ。





末広重恭著『二十三年本来記』(明治19・7)  
〔筆者蔵〕



スペンサー著『権理提綱 地』  
尾崎行雄訳  
(明治11・3)〔筆者蔵〕

独ウエンツケ原書  
今井恒郎訳補

『哲学階梯』群英閣蔵版

明治二十年

西洋哲学を教えた機関——東京大学、哲学館、伝通院、護国寺。

明治初年に西洋哲学が日本に移入されてからまだ日も浅く、またそれを教える教育機関もすくなかった。第一期において東京府下において哲学を教えるところは、

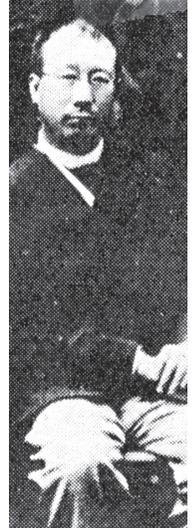
東京大学……明治十年「一八七七」開成学校と東京医学校とを統合して創立。

哲学館……明治二十年「一八八七」創立の私学。東洋大学の前身。

伝通院……大永二十二年「一五二二」創立の寿経寺(浄土宗)にはじまり、慶長七年「一六〇二」家康の母伝通院を葬ったとき、いまの名に改称。

の三ヶ所のみであった(時文評論「哲学の近況」『早稲田文学』第三号所収、明治二十四年十一月)。

井上哲次郎(一八五五〜一九四四、明治・大正期の哲学者。ドイツ観念論哲学の輸入につくした)は、『明治十年に東京大学が創設さるゝに当つて、哲学の学科も出来、幾くもなく、欧米より専門学者を招聘することになった』と語っている(井上哲次郎座談「明治の哲学回想録」『哲学講座 第壹』所収、近代社、大正十五年七月)。



外山正一

創設当時の東京大学の文学部は、文学・史学・哲学のほか政治・経済学などを包括したものであり、一見後年の法文学部に似たところがあった。開設当時、二学科とした。すなわち――、

- 第一科……………史学、哲学および政治学科
- 第二科……………和漢文学科

その後、本学部の学科組織は、毎年のごとく少なからず改正をくり返すのである。

“哲学”という科目は、“道義学”とも称せられたが、この中には西洋哲学・西洋哲学史・心理学などを含んでいた。明治十四年（一八八一）九月――（西洋）哲学科が独立し、このなかにインドおよび支那哲学、世態学（社会学）・審美学（美学）などを加えるにいたった。翌十五年（一八八二）九月、“哲学”とある科目は、“西洋哲学”と改められた（『東京帝国大学五十年史 上冊』昭和七年十一月）。

日本の大学で、哲学という科目を置いて学生を教育したのは外山正一まさかず（一八四八～一九〇〇、幕臣の子。明治期の教育者、のち東京帝大総長）が最初であった。東京大学となってからは、外山は哲学科を開いた元祖であった（井上哲次郎君談「日本の哲学教師」『太陽』第九卷第十三号所収、明治三十六年十一月）。

哲学科が開設されてからの教師の陣容と変遷は、左記のとおりである。

- 明治十年（一八七七）
  - 史学および道義学（哲学）……………教授 エドワルド・W・サイル
  - 心理学およびイギリス語……………“ 外山正一
- 明治十一年（一八七八）
  - 哲学史……………教授 アーネスト・F・フェノロサ

注・同人は退官する明治十九年（一八八六）まで八カ年、哲学史・論理学・社会学・審美学などを講じた。



島田重礼

哲学科

第一年

哲学概論(第一期) 西洋哲学史(第二、第三期) 史学 国文学 漢文学 理学(動物学もしく

明治十二年(一八七九)

哲学史……………教授 アーネスト・F・フェノロサ

注・この年、サイル満期解囑となる。

明治十四年(一八八二)、同十五年(一八八二)

哲学 史学 イギリス語……………教授 外山正一

哲学 論理学 理財学……………教授 アーネスト・F・フェノロサ

支那哲学……………島田重礼

インド哲学……………原坦山

……………吉谷覚壽

明治十九年(一八八六)三月、東京大学は帝国大学となり、従来の文学部は“文科大学”<sup>(33)</sup>となった。また文科大学(大正八年「二九一九」)ふたたび文学部に改称)においては、たびたび学科の変更や増設がおこなわれた。哲学科においては――、

哲学 哲学史 論理学 心理学 東洋哲学 社会学 審美学 倫理学

その他の科目が講ぜられ、講座制の確立をみた<sup>(34)</sup>

明治二十六年(一八九三)九月における哲学科の科目は、左記の通りである。

は地質学) ラテン語 英語 ドイツ語

第二年

西洋哲学史 論理学および知識論 社会学 比較宗教および東洋哲学 支那哲学 インド哲学 生理学 心理学 倫理学 ラテン語(隨意) ドイツ語

第三年

(従前のとおり)

哲学科においては、他の諸学科とおなじように外国人教師を迎えた。サイル、フェノロサについてはすでに述べたが、この二人以外に、相ついで左記の教師が招へいされた。

哲学……………イギリス人教師 チャールズ・ジェイムズ・クーパー(明治12・4〜同14・7まで在任)  
哲学 審美学……………アメリカ人教師 ジョージ・ウィリアム・ノックス(明治19・9〜同12まで在任)  
倫理学・美学・論理学・哲学概論……………ドイツ人教師 ルートヴィッヒ・ブッセ(明治20・1〜同25・12まで在任)  
哲学概論・哲学史・ドイツ哲学・古代哲学……………ロシア人教師 ラファエル・フォン・ケーベル(明治26・6〜大正3・7まで在任)

東京大学において最も早くから哲学を講じたのは、エドワルド・W・サイルであり、ついで外山やフェノロサであった。外山はスペンサーの信奉者であり、フェノロサもスペンサーのほかヘーゲルの学説を祖述し、のちにカントの哲学についても学生に紹介した。外山の講義の特徴は、じつにその鋭敏な批評的精神にあった。フェノロサは、来日したとき二十台の青年であり、学殖はどののいどのものであったかわからぬが、教えながら自らも学ぶやり方を前進させ、知識をたくわえたものか。いづれにせよ東京大学で西洋哲学を講じていた者は、諸家の説を足場とし、その議論を請け売りして、ひとり最高の智識を誇っていた(山路愛山「日本思想界に於ける帝国大学」『太陽』第十五卷第六号所収、明治四十二年五月)。



井上円了

哲学科の講義科目として、のちにインド哲学が加えられたが、その教授法は旧風であり、仏教に関する本を是信（ぜしん、正しいものと）し、一定の旧説をくり返すだけのものであり、新しく発達させようとする考えから出たものではなかった（『哲学の近況』『早稲田文学』第三号所収、明治二十四年十一月）。

哲学館は、井上円了（えんりょう、一八五八〜一九一九、明治期の仏教哲学者）によって、「哲学専修の一館」として創設された私学である。時の文部大臣・井上馨（かおる、一八三五〜一九一五、幕末から大正期にかけての政治家）は、井上円了の『仏教活論序論』（明治二十年）を読んで円了を帝国大学の教授に任命しようとしたが、かれは肯じなかつた。円了の目的は、執筆と学校経営にあつたからである（村上專精「東洋大学今昔の感」、『東洋哲学』第九編第二号所収、明治三十五年二月）。明治哲学の創業時代——東京大学を除くと、哲学を専門的に学習できる学校はなかつた。井上が哲学の専門家と謀つて哲学館を新たに設立しようとした趣意は、つぎのようなものであつた。

——帝国大学の課程のように長期間通学するための資力をもたぬ者、原書に通じられるだけの時間的余裕のない者のために一年ないし三カ年の速習コースを設け、論理学・倫理学・心理学・審美学・社会学・宗教学・教育学・政理および法理学・純正哲学・東洋諸学およびこれらと直接の關係を有する諸科を研修するための便利な道を開くにある（『哲学館開設旨趣』明治二十年六月）。

要するに本館を開設しようとしたのは、第一に晩学にして速習をもとめる者、第二に貧困であるために大学に入れない者、第三に原書に通ぜず、外国語を理解できない者のために哲学とそれに関連した科目を教えるためであつた（『開館旨趣』——哲学館開場式の演説筆記）。

井上は哲学をどのように理解していたのであろうか。かれによると、哲学とは「学問世界ノ中央政府ニシテ、万学ヲ統轄スルノ学」（『哲学館開設旨趣』明治二十年六月）に外ならなかつた。西洋諸学の關係を知り、その価値を知るには哲学を修めるのがいちばんだと主張した。

哲学館は学科課程を普通科と高等科（上級、下級）にわけた。普通科の修学年数は一年、高等科は二カ年間とした。

○普通科（第一学年—二期、二期）

論理学・心理学・社会学・倫理学・教育学・純正哲学

注・毎週の授業時間は二十四時間。

○高等科下級（第一学年—二期、二期）

物理および化学、天文および地質学、動物および植物学の各大意、生理学・人類学・言語哲学・歴史哲学・経済哲学・東洋哲学史・ギリシャ哲学史

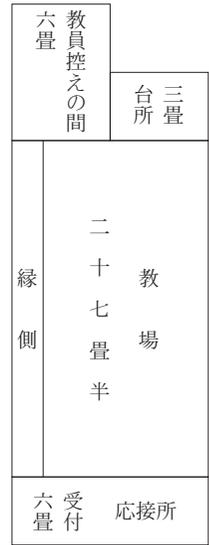
○高等科上級（第二学年—二期、二期）

論理学・東洋哲学史・近世哲学史・心理学・審美学・倫理学・政理および法理学・宗教哲学・設題論文<sup>(35)</sup>

注・毎週の授業時間は、下級・上級ともに二十四時間。

哲学館は、明治二十年（一八八七）九月から、本郷区竜岡町三十一番地の麟祥院内に仮教場を設け授業をはじめた。初年度の入学生定員は五〇名としたが、予想外に入学志願者が多く、新聞広告を出して謝絶するほどであった。

入学者は高等小学校卒業の者もしくはこれに準ずる学力を有する者とし、年齢は定限を設けず、男子満十六歳以上のものとした。入学金は一円五〇銭。月謝は一円とした。授業は午後一時から同五時までおこない、毎学期のおわりに試験をし、一科目六〇点以上とったものを合格者とした。専任教員は四人であるが、当分は二名（井上円了と徳永〔清沢〕満之<sup>まんし</sup>）がこれにあたった。麟祥院内の教場の見取り図は、左記のようなものである。



かくして哲学館における授業ははじまるのだが、以後そこで教鞭をとった講師の大半は、東京大学の出身者であり、いずれも当代一流の教師たちであった。

論理学……………清野 勉（一八五三～一九〇四、独学で哲学を研究し、のち哲学館の教授となる）

坂倉銀之助

井上円了

心理学……………沢柳政太郎（一八六五～一九二七、明治・大正期の教育家、のち東北帝大初代総長）

元良勇次郎（一八五八～一九一二、明治期の心理学者、東京帝大教授）

社会学……………辰己小次郎（一八五九～？、明治・大正期の教育家、のち専修学校「現・専修大学」で社会学、政治学などを講じた）

倫理学……………棚橋一郎（一八六三～一九四二、漢学者、倫理学者）

加納治五郎（一八六〇～一九三八、明治期の教育家）

教育学……………国府寺新作

純正哲学……………井上哲次郎（一八五五～一九四四、明治・大正期の哲学者）

坂倉銀之助（一八六三～九一、明治期の哲学者、のち鹿児島高等学校造士館教授）

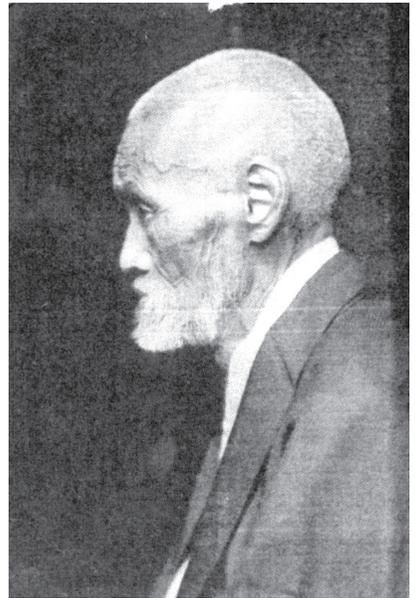
物理学……………森山益夫

化学……………志賀重昂

地質学……………志賀重昂（一八六三～一九二七、明治・大正期の地理学者）



井上哲次郎



加藤弘之

- 動物学……………白井光太郎 (二八六一～一九三二、明治から昭和期にかけての動物学者)
- 植物学……………斎田功太郎 (二八五九～一九二四、明治・大正期の植物学者)
- 生理学……………吳秀三 (二八六五～一九三二、明治から昭和期にかけての精神病学者)
- 瀨脇寿雄
- 人類学……………坪井正五郎 (二八六三～一九一三、明治・大正期の人類学者)
- 論理学……………清野勉
- 東洋哲学史……………島田重礼 (二八三八～九八、明治期の漢学者、東京帝大教授)
- 審美学……………内田周平 (二八五四～一九四四、明治から昭和期の中国哲学者)
- 近世哲学史……………三宅雄二郎〔雪嶺〕 (二八六〇～一九四五、明治から昭和期の評論家)

他に各科目を担当したのは、左記のような講師であった。

生物進化論……………石井千代松

- 経済学……………浜田健次郎 (二八六〇～一九一八、明治期の実業家)
- 西洋史学史……………下山寛一郎 (二八六三～九二、明治期の教育家・陸軍幼年学校、東京法学院をへて哲学館教授)
- 神道哲学
  - 神道史……………松本愛重 (二八五七～一九三五、明治から昭和期にかけての歴史家、のち国学院大学教授)
- 西洋倫理史……………棚橋一郎 (二八六三～一九四二、明治から昭和期の教育家、のち郁文館を創立)
- 法理学……………穂積陳重 (二八五六～一九二六、明治・大正期の法学者)
- 講義「強者の権利」……………加藤弘之 (二八三六～一九一六、明治期の敬蒙的官僚学者)
- 漢学
  - 岡本監輔 (二八三九～一九〇四、幕末、明治期の漢学者)
  - 内田周平 (二八五四～一九四四、中国哲学者、のち哲学館教授、学習院講師)
- 美学
  - 内田周平 (二八六九～一九三一、明治から昭和期にかけての美学者)
  - 大塚保治 (二八五一～一九二九、真宗大谷派の学僧)
- インド哲学……………村上專精 (二八四九～一九二七、明治・大正期のサンスクリット学者)
- 梵語……………南条文雄 (二八二六～一九〇二、明治期の歴史家)
- 仏教大意……………内藤耻叟 (二八二七～一九一〇、幕末・明治期の歴史家・漢学者)
- 儒教論……………重野安繹 (二八二二～九五、幕末から明治期にかけての国学者、東京帝大教授)
- 令義解……………小中村清矩 (二八二九～一九〇六、幕末・明治期の国学者、美術史家)
- 美術談……………黒川真頼 (二八三二～一九一四、幕末・明治期の実業家・易学家)
- 課外講義……………高島嘉右衛門

講義の中味と評判はどうであったのか。まず館主・井上円了の講義であるが、ソクラテスもカントもすっかりじぶんのものにし、じぶんの言葉で学生に語った。それは翻訳調でない、ひじょうに平易でわかりよい講義であった。それは茶談的でさえあったという。

徳永「清沢」満之(一八六三～一九〇三、明治期の真宗大谷派の僧。清沢氏の養子となる。一高、哲学館の講師をへて真宗大学学長となる)は、東京大学の哲学科でフェノロサの説くヘーゲル哲学の講義を聴き、大学院においては宗教哲学を専攻した。哲学館において、どのような科目を担

当したものが詳らかにしない。が、ルドルフ・ハーマン・ロツェ（一八一七〜八一、ドイツの哲学者）について講義した。

当時は国漢の購読をのぞくと、教科書や参考書がなかったので、学生は講義をみな筆記せざるをえなかった。加藤弘之、井上哲次郎、三宅雄二郎ら大家の講義は、原書を翻訳しながら講義をするため、教師は日本語の適訳に苦しむことがあり、学生からすればさっぱり要領をえぬこともあったようである。加藤はドイツ語の原稿を教場に持ってきて、「強者の権利」を講じた。

三宅は哲学史を講じたが、学生はかれの咄弁的雄弁に敬服感嘆した。学生をよく愛したが、休講が多く、たまに学校に来て、二、三十分はちこくした。けれど学生は四十分以上すぎても解散しなかった。井上は、大風のように、ドイツと哲学をおっかぶせるような講義をし、カントやショーペンハウアーなどを講じた。宗教学の名のもとにおこなった講義では、キリスト教を罵倒した。

清野勉の論理学は、多少ベランメー調であった。漢学の岡本監輔は志士の面影のある教師であり、酒気をおびて講義し、内田周平は漢学のほか、ハルトマンの美学を訳してきて、学生に筆記させた。

なんとといっても講師のなかでいちばん異色であったのは、高島嘉右衛門（一八三二〜一九一四、幕末・明治期の実業家、易学家）である。出講日はきまっておらず、ときどき気まぐれに馬車でやってきては、易の<sup>かえもん</sup>大気焰を吐いた。かれは椅子のうえに馬車から持ってきた毛布を敷き、その上にあぐらをかき、悠然と葉巻を取りだすと、それに火をつけた。マッチをすって一服吸い込むと、「どうもタバコを喫まんといけません。皆さんもおやんなさい」といって、大笑一番。それから思いつくまま、講談風の話<sup>36</sup>を二時間も三時間も立てつづけにやった。

井上円了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄二郎らが発起して明治十七年（一八八四）一月に創設されたのが「哲学会」である。これは一般にも門戸を開放して活発な啓蒙運動を開始し、講演などもさかんにやった。この学会には変わったところでは、くだんの高島嘉右衛門や大倉喜八郎（一八三七〜一九二八、明治・大正期の実業家、大倉財閥の創設者）が会員として名を連ねていた。高島は哲学会の講演で易断をやった。その結果、哲学会は加藤弘之のいう「八百屋哲学」（よろず屋）的になったが、のちに兩人が退会してから大学の哲学会となった（<sup>37</sup>斯波義慧「哲学会の想出」『哲学雑誌』第六三卷第七〇〇号所収、白日書院、昭和二十三年九月）。

哲学館が将来の目的としたものは何か。それは東洋哲学、とりわけ仏教を土台として、これに西洋哲学を加えて、日本固有の哲学を起すことにあった。<sup>37</sup>将来、日本主義の大学を設立し、日本学の独立を期すことであった（「哲学館将来の目的」明治二十二年八月）。

伝通院（現・東京都文京区小石川三十四一六）は、いまから約六〇〇年まえの応永二十二年（一四一五）に<sup>38</sup>了誉聖岡上人によって開山した

寺である。正式には、「無量山伝通院壽経寺」という（『伝通院誌』〔非売品〕伝通院、大正八年五月）。いまの伝通院は、火災などにより、むかしの盛観をとどめていない。この寺院は、徳川家の庇護のもと、学僧の修行勉学の間でもあったが、ここで明治期に哲学が講じられたという。が、仏教哲学のことであろうか。資料がないので何ともいえない。

哲学者・桑木敝翼（一八七四～一九四六）は、大学卒業後一年志願兵となった。十二月除隊後、友人にたのまれて護国寺（現・東京都文京区大塚五―四〇―一）内にあった真言宗の大学寮とでもいう所で、

#### 哲学概論

#### 論理学

を講義した。学生は十数名。みな黒染の衣を着ていた。学生は、畳を敷いた一室に、長いベンチ風の机のまえにすわっているのだが、教師は立って講義をした。

学生の注文は、ゆっくり話をしてくれということであった。ここは学校というより講習会という形だったという。おそらく伝通院のばあいも、これと似たような形で講義がおこなわれたのではなからうか。桑木が護国寺で教えたのは、わずかに二、三ヵ月であった。その後大西祝博士の後任として東京専門学校（現・早稲田大学）に出講した（桑木敝翼『哲学四十年』英研社、昭和二十二年十月）。

後年、東京大学、哲学館、伝通院、護国寺以外にも哲学を教授する学校が数多誕生した。

東京専門学校（明治十五年〔一八八二〕創立）においては、大西祝（一八六四～一九〇〇、明治後期の哲学者）が新カント派の哲学を講じ、京都帝国大学（明治三十年〔一八九八〕創立）の文科をはじめ、慶応義塾、東洋大学（哲学館の後身）、真宗本派仏教大学、真宗東派真宗大学、宗教大学、曹洞宗大学などにおいて、仏教哲学や一般哲学などを教えた。<sup>38)</sup>

哲学的思想の研究と伝播の中心は何んといっても東京大学であったが、これ以外に私立の幾多の学舎があって各文化の発展に貢献した。明治初期の“四大学淵”<sup>39)</sup>と呼ばれた四つの学校のうち、官学の東京大学をのぞくと、つぎの三校も思想界に貢献するところが大きかった。

慶応義塾……安政五年（一八五八）福沢諭吉が江戸において開いた洋学塾。

同志社……明治八年（一八七五）新島襄が京都市上京区に開いた英学校。

同人社……明治六年（一八七三）中村敬字が府下小石川江戸川町に開いた洋学塾。

ドイツ哲学の移入。

明治初期は、英仏の哲学思想が輸入された一方、他方においてはドイツ哲学の輸入がはじまった。この思想の輸入には政治が先行した。<sup>(40)</sup>ドイツ哲学が発芽するようになったのは、明治十三年（一八八〇）イギリス人クーパーが東京大学に来てからのようである。クーパーはカントの批評哲学を講じた。<sup>(41)</sup>

幕末・維新时期から明治二十年ごろまで、わが国において支配的<sup>(42)</sup>であったのはおもに十九世紀の英仏系の哲学であった。が、これらの哲学思想は為政者からみれば革命思想の温床、反体制的なものであった。明治政府は、維新後、三職制（総裁・議定・参与）をとり、ついで三大臣（太政大臣、左大臣、右大臣）を中心とする太政官制を採用した。が、明治十六年（一八八三）岩倉具視が病死してからは、ヨーロッパ型の内閣制を導入した。

明治政権の官僚は、イギリス式の憲法政治よりもドイツ式の君権政治―君主の大幅な権力をみとめた絶対主義的政治形態―のほうがわが国にふさわしい<sup>(43)</sup>と考えた。ドイツの政治論や法律論は、英仏哲学を制するための防波堤の役割をはたすものであり、これらとともにドイツ哲学の積極的な導入を勧奨<sup>(44)</sup>した。

明治二十年（一八八七）を境として、それまでわが国の思想界の主流であった英仏系の哲学は、大正の一時期をのぞき、第二次世界大戦が終結するまで、ドイツ哲学にその地位を取って代われ、ふたたび思想界の表面にあらわれることはなかった。<sup>(45)</sup>

自由民権運動は、人民の自由と権利の伸長を鼓吹した下からの民主主義運動であるが、明治十四年（一八八一）、十年後に国会を開設する旨の詔勅が渙発されてからしだいに下火になり、さいごは消滅した。政府の弾圧と各運動団体の切くずしにより、この政治運動はついえ去ったのであるが、民権家の私擬憲法案を無視してなったのが、君主権のつよいプロシア（ドイツ）憲法を範とした「大日本帝国憲法」であった。

絶対主義色の濃い欽定憲法が発布されたことは、天皇制国家の基盤の構築作業が一応完了したことを意味した。多年、フランス風の民約憲法を

望んだ自由主義者は、憲法の意味が、空想していたものどだいぶちがうことに大いに驚いた。たとえば、中江兆民は憲法の全文を一読すると、あざわらっただけで投げすてた。<sup>(46)</sup>

ドイツ的国家学を<sup>ほうしやう</sup>抱合している大日本帝国憲法は、国民の政治思想を統一しようとするものであった。ドイツ哲学受容の社会的背景は、このようなものであった。

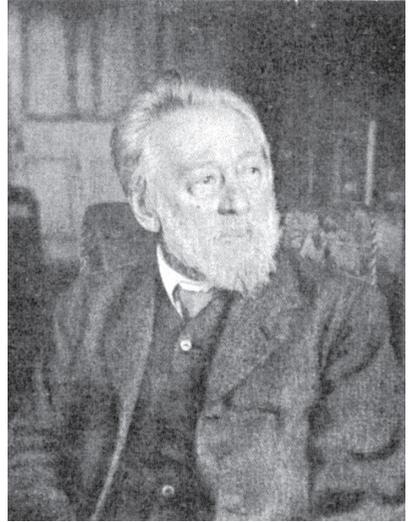
ドイツ哲学の移入は、東京大学がアメリカ人フェノロサ、イギリス人クーパーに代って、ブッセ、ケーベルなどが哲学教師として来日するようになってから逐次わが国に伝わった。

明治十七年（一八八四）東京大学に「哲学会」が創設され、同二十年（二八八七）より機関誌『哲学会雑誌』（のちに『哲学雑誌』と改名）を刊行するようになった。明治十九年（一八八六）にノックスが備われ、ついでルートヴィヒ・ブッセ（一八六二〜一九〇七、ドイツの哲学者、のちハレ大学教授）が来日した。この二人は、ルドルフ・ヘルマン・ロツツェ（一八一七〜八一、ドイツの哲学者。新形而上学を提唱。のちベルリン大学教授）の哲学を祖述した。<sup>(47)</sup>

ブッセの説くところは、ロツツェの学説が中心であり、哲学概論といっても、ロツツェ哲学の梗概にすぎなかった。<sup>(48)</sup> ほかにカントの『純粹理性批判』をテキストに用いた。ブッセは「哲学史的研究が真の哲学の研究方法であること」を教授し、わが国哲学界の学風の形成に貢献した（宮川透「第一節 体制思想としてのドイツ哲学」『近代日本の哲学』〔増補版〕所収、勁草書房、昭和四十六年五月）。

明治二十六年（一八九三）カルル・ロベルト・エドゥアルト・フォン・ハルトマン（一八四二〜一九〇六、ドイツの哲学者）の紹介によって、ブッセの後任としてラファエル・ケーベル（一八四八〜一九二三、ロシアの哲学者）が来日し、大正三年（一九一四）まで二十一年間東大で西洋哲学と西洋古典学を教えた。ケーベルはショーペンハウアーやハルトマンといった哲学の領域だけに限らず、詩学やゲーテやダンテの文学なども教授し、また上野の音楽学校でピアノの教師をつとめた。<sup>(50)</sup> ケーベルは博学にして見識が高かったから、学生を教育するにはもっとも適当の人であったという（井上哲次郎談）。

ケーベルは哲学のお雇い外国人教師として最もながく日本に滞在し、死没した。が、生前、「日本が置いてくれるなら、死ぬまでいる」といっていた。ケーベルは人を愛し、真と美とをたのしみながら生きた。語学は英・独・仏・露のほか、ギリシャ語とラテン語に通じていた。大学における講義は、わかりのよい英語でおこなったが、講義のなかにギリシャ語やラテン語がたくさん這入ってくるので、よくわからないというのが



ラファエル・ケーベル

定評であった。

ケーベルの講義がわからないという学生がいたら、それはその学生の語学力が不足していたのである。かれの担当科目は、哲学概論と哲学であった。哲学概論は哲学史の概要であり、哲学とは哲学史であるといっていた。哲学概論は第一学期で終了し、第二学期から哲学史ということになっていた。ケーベルは試験勉強を、勉強の墮落とよんで排斥した。白紙の答案にたいしても、「哲学はそう簡単にわかるものではない。白紙の答案はよい答案である」といって、八十点をあたえたり、試験を受けなかったものでも、事情により及第点をあたえた（紀平正美「ケーベル先生を介して」『思想ケーベル先生追悼号』所収、岩波書店、大正十二年八月）。

卒論には口述試験が付きものであるが、英語でやり取りせねばならぬから、英会話に自信がない者にとって一大恐怖である。ライプニツ（一六四六〜一七二六、ドイツの哲学者・数学者・政治家）を卒論に取りあげた高橋里美（一八八六〜一九六四、新潟高校教授をへて、のち東北大学教授、同学長）は、ケーベルから「モナド（单子）とは何ぞや」と第一問を発せられたが、その答が容易にできないので、もじもじしていた。すると同席の某教師が見かねて部屋から出て行ってくれたので、妙に気がらくになり、質問にもポツポツ答えられるようになった。

ついで偶因論、アリストテレス哲学のリアリズムの説明をラテン語で説明させられ、*Universalia in re*と答えたら、*concordia*を複数に変化させられ、それができたら大層よろこんだ様子であった。そして *mysticism* の語源を聞かれ、答えられないでいると、「眼を閉じること」だと教えられた（高橋里美「ケーベル先生の思い出」）。

ケーベルは哲学者であり、音楽家でもあった。その日常は読書と執筆と講義と。ピアノの生活であった。なりふりにほとんど構わず——頭髮、ひげの手入れ、衣服などにまったく無頓着であった。が、酒とタバコブレンダー、ビール、ワイン類、葉巻、紙巻きタバコについては、なかなか吟味した。シガレットはエジプトタバコを好んだ。毎日、読書と講義の準備で日を送った。本をよむときは、覚書をつくり、一日として筆を執らずしてすごしたことはなかった（和辻哲郎「ケーベル先生の生涯」）。

ときどき銀座へ買物に出かける。またときには丸善に行ったり、公使館の晩さん会に招かれることもある。ケーベルには人情家の側面もあり、



ラファエル・ケーベルの墓  
(雑司ヶ谷墓地) [筆者撮影]

窮している学生には、しばしば金品をあたえた（長谷川誠也「来朝当時のケーベル先生」）。

ケーベルは、生前、片言の日本語をも覚えようとはせず、女性も近づけず、ふだん「眠るほどらくのことはない」といって横浜のロシア領事館の一室において、大正十二年（一九二三）六月十四日永遠の眠りについた。享年七十四歳であった。なきがらは雑司ヶ谷墓地に葬られた。

\*

第一期の西洋哲学創業時代——明治初年から同二十年ごろまで——、のが国の哲学界の状況はどうであったのか。数多の縉流（しりゅう）（黒衣を着る仏僧）や儒者をのぞき、当時の様相を数字的にしめすとつぎのようになる。明治二十二年（一八八九）の時点で、もっぱら哲学を教えた機関は、

文科大学（東大文学部）……………哲学科学生の総数十四、五名。  
哲学館……………生徒総数百五十名ほど。

などであり、また哲学を考究する学会「哲学会」（明治十七年「二八八四」創設）の会員は、およそ九十名。同会が毎回発売する『哲学雑誌』の発行高は、千数百部であった（『日本哲学の現況』『哲学会雑誌』第三冊第二十七号所収、明治二十二年五月）。

これが当時のわが国の哲学界の状況であった。スペンサーやミルの著述などは、教科書として英学校で教えられることが多かった。有名な学者のなかには、哲学とはどのようなものか語らず、西洋の哲学書の翻訳に手を染めるものがいたが、かれらはじぶんで十分に内容を理解せずにただ字訳しているだけであったから、誤訳でないにしても、文章がむずかしい上に読みにくかった。そのような訳本を読まされる読者の口から出るのはため息ばかりであった（『日本哲学の現況』）。

ドイツ哲学の受容創始期——明治二十年代（一八八七～一八九六）——外国人教



元良勇次郎

師らは本格的な哲学研究法の確立にすくなくならず貢献したのであるが、邦人教師の活躍にも無視できないものがあつた。

井上哲次郎（一八五五〜一九四四、明治・大正期の哲学者）は、東大に三十五年間在職し、その間に哲学・宗教・倫理・教育などに関する研鑽と講義に従事し、とくにドイツの観念論哲学（ショウペンハウアー、ハルトマン）の移入につくした。西洋哲学にたいする東洋哲学の創始者として知られている。

元良勇次郎（一八五八〜一九二二、明治期の心理学者）は、東京帝国大学で心理学講座を担当し、ヴィルヘルム・ヴント（一八三二〜一九二〇、ドイツの心理学者、のちライプチヒ大学哲学科教授）の心理学を紹介した。

中島力造（一八五七〜一九一八、明治・大正期の倫理学者）は、欧米に留学後、東大で心理学・倫理学講座を担当し、新カント派の哲学を紹介した。

大西祝<sup>はじめ</sup>（一八六四〜一九〇〇、明治後期の哲学者）は、ドイツ的「純正哲学」の移植と東西文化の総合を志向し、東京専門学校（のちの早大）や東京高師で教鞭をとった。

西洋哲学移入の第二期は、明治二十年代から同三十年代を指すが、この間のわが国の主流哲学は近代ドイツ哲学であり、ドイツ本国の哲学書をタネとし、その翻案ともいふべき「哲学史概説」「哲学概論」がたくさん刊行された（宮川透『近代日本の哲学』、七四頁）。その主なものをあげると、左記のようになる。

- |          |                       |        |
|----------|-----------------------|--------|
| 青江俊蔵編    | 『批評』 哲学論評』 其中書屋 三浦兼助板 | 明治二十一年 |
| 大僧都蘆原実全著 | 『日本宗教末来記』 船井弘文堂発行     | 明治二十二年 |
| 三宅雄二郎著   | 『哲学涓滴』 文海堂 石塚徳次郎発行    | 明治二十二年 |
| 洪江保編     | 『哲学大意 全』 博文館          | 明治二十七年 |
| 大西祝著     | 『西洋哲学史』 (草稿、早稲田大学貴重書) | 明治二十八年 |
| 井上円了著    | 『西洋哲学史』 哲学書院          | 明治二十八年 |

- 金子馬治著 『哲学綱要』 明治二十八年
- 松本文三郎著 『哲学概論』 明治三十年
- 中島力造著 『新撰 哲学問答 全 第一編』普及会  
百種 明治三十年
- 渡辺国武著 『列伝体西洋哲学小史』富山房 明治三十一年
- キルヒマン著 『禅機ト哲学』鴻盟社 明治三十一年
- 藤井健治郎訳 『哲学汎論』博文館 明治三十二年
- 井上円了講述 『通俗講談 言文一致 哲学早わかり』開発社 明治三十二年
- 蟹江義丸著 『西洋哲学史』博文館 明治三十三年
- 桑木巖翼著 『哲学概論』東京専門学校出版部 明治三十三年
- 波多野精一著 『西洋哲学史要』大日本図書 明治三十四年
- ヴィンデルバンド著 『哲学史要』早稲田大学出版部 明治三十五年
- 桑木巖翼抄訳 『哲学綱要』宝文館 明治三十五年
- 朝永三十郎著 『哲学綱要』宝文館 明治三十五年

わが国は日清戦争（明治二十七年、八年「一八九四〜一八九五」に勝利したことにより、一躍して東洋における最大強国<sup>(52)</sup>になった。この戦争は国命を賭して闘う国家生存上の一大危機であり、また明治思想史の局面を一変する契機となる大事件であった。この戦争は、国民に死活とは何か、興亡とはなにかの意義を教えたばかりか、国民の目は外にむけられ、わが国が世界の一国としてみずからを観察するきっかけをあたえた。

国民の自覚は、それまで十分合理的、組織的でなかった国粹保存主義から一歩進んで哲学的思索的<sup>(53)</sup>になって行った。日清戦争前後において、社会に勢力<sup>(54)</sup>があった思想家はトーマス・カーライル（一七九五〜一八八一、イギリスの歴史家・思想家）やラルフ・ウォルド・エマソン（一八〇三〜八二、アメリカの詩人・思想家）、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（一八四四〜一九〇〇、ドイツの哲学者）である。

その根底において国民道徳を基礎としている日本主義は、当然の結果として倫理や道徳の研究を必要とした。日本主義は、わが国の伝統的思想とヨーロッパの近代哲学思想を折衷し、君民一体・忠君愛国・キリスト教排撃などを主旨とした思想上の立場をいう。新しい人生観に安住しようとする倫理的宗教的傾向<sup>(55)</sup>は、第三期（明治三十年代から明治の末期）の風潮である。

第三期は、ヨーロッパにおいては十九世紀がおわる時代である。ヨーロッパにおいては、哲学的には実証主義（認識を事実的なものだけに限

定)が極まり、二十世紀の新しい理想主義哲学の発生にむかいつつあった時代である。<sup>(56)</sup>

この風潮を代表するのは、左記のひとつである。

高山林次郎 (一八七一～一九〇二、明治期の評論家)

井上哲次郎 (一八五五～一九四四、明治・大正期の哲学者)

元良勇次郎 (一八五八～一九一二、明治期の心理学者)

綱島梁川 (一八七三～一九〇七、明治期の文芸・思想評論家)

桑木巖翼 (一八七四～一九四六、明治から昭和期の哲学者)

姉崎正治 (一八七三～一九四九、明治から昭和期の宗教学者)

高山樗牛は、はじめ日本主義を標榜し、のちにニーチェや日蓮主義をかかげてわが国の思想界を風靡せんとした。<sup>(57)</sup> 井上哲次郎の持論は、東洋哲学研究の道を興すことにあった。井上の哲学の特徴は経験派であり、コントの実証哲学に近かったが、中国哲学を攻究し、日本哲学の新機軸を開くことにあった。<sup>(58)</sup> 明治三十年代以来、日本の思想界の一般的傾向は、じっさいな人生観を追求することであった。倫理学説や宗教論を戦はすことが第三期のおもな傾向であり、同時に当時の哲学のすべてであった。

井上哲次郎、元良勇次郎、綱島梁川、桑木巖翼、姉崎正治なども倫理学説の主張や提唱に傾いた。<sup>(59)</sup>

明治二十年代の後半から同三十年代の中ごろにかけて、哲学史概説や哲学概論などの移植作業がおわると、原典研究(『認識論』、『存在論』)といった専門的な哲学研究の段階がおとずれる。専門的な哲学研究の分野での先駆的な業績としては、カントとヘーゲルのつぎのような著訳書をあげる事ができる。

清野勉著 『標』 韓図純理批判解説 (東京書院、明治二十九年)

紀平正美 小田切良太郎 共訳 「ヘーゲル氏哲学体系」(『哲学雑誌』 第二〇巻・二二八～二二六号所収、明治三十八年)

清野勉（きよのつとむ）（一八五三〜一九〇四、明治期の哲学者。創成期の哲学館で哲学、論理学をおしえた）のカント研究は、直接原典からおこなった研究であり、紀平と小田切によるヘーゲルの翻訳は、苦心を払ってなしとげた先駆的な訳業であった（宮川透『近代日本の哲学』、七七〜七八頁）。

東京帝国大学以外に、哲学を教授する学校として、京都帝国大学文科大学（文学部）が、明治三十九年（一九〇六）六月京都市上京区吉田町に設置された。後年「京都学派」なる学統を育成する京都大学の哲学科は、同年九月から講義を開始するのだが、まだ独立の建物や教室をもたず、旧本館の二階中央に位する化学教室の三室を借りてスタートした。翌四十年（一九〇七）七月にいたって木造建物一棟が竣工し、その東半分を文科大学が用いるようになった（『京都帝国大学史』）。

授業をはじめたときの学生数は、本科十六名、選科（本科に準ずる課程）十七名であった。哲学科が開設されてからの教師の陣容と変遷は、左記のとおりである。

明治三十九年（一九〇六）

哲学概論および西洋哲学史……………	教授	桑木敵翼
倫理学……………	教授	狩野亨吉
インド哲学史……………	教授	松本文三郎
〃……………	講師	熱田壺知
シナ哲学史……………	教授	狩野直喜
心理学……………	教授	松本亦太郎
教育学教授法……………	教授	谷本 富
文学概論……………	助教授	島文次郎
哲学……………	講師	ピエール・オリアンチス
〃……………	講師	エミール・シルレル

宗教学……………講師 シドニー・ギユリック  
 英語……………講師 フランク・ロムバード

明治四十年（一九〇七）

これらの教師に、つぎの面々が新たに加わった。

宗教学（兼任）……………教授 松本文  
 西洋哲学史……………助教授 朝永三十郎  
 シナ哲学史……………助教授 高瀬武次郎  
 社会学……………講師 米田庄太郎  
 宗教学・日本およびシナ仏教史……………講師 園田宗恵  
 美術史……………講師 武田五一  
 精神病学……………講師 今村新吉  
 キリスト教教理史……………講師 シドニー・ギユリック  
 フランス語……………講師 ピエール・オリアンチス  
 ドイツ語……………講師 エミール・シルレル



朝永三十郎

この年の哲学科の入学者数は、本科二十九名、選科十六名であった。ちなみに翌明治四十一年（一九〇八）の哲学科の時間表をしめすと、つぎのようになる。

土			金			木			水			火			月	曜日
I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	学年
		倫理学史 (特) 友枝講師			哲学研究 (特) 松本文教授	哲学概論・西洋哲学史 (普) 朝永助教授	倫理学史 (特) 友枝講師		シナ哲学 (普) 高瀬助教授			哲学概論・西洋哲学史 (普) 朝永助教授	シナ哲学 (特) 狩野直教授			(時間) 8~9
I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	
心理学 (普) 松本亦教授	倫理購読 (副) 友枝講師				哲学研究 (特) 松本文教授	哲学概論・西洋哲学史 (普) 朝永助教授	倫理学講読 (副) 友枝講師		仏教講義 (副) 熱田講師	シナ哲学 (特) 高瀬助教授		倫理学 (普) 友枝講師	宗教学 (特) 熱田講師		美学 (普) 藤代教授	9~10
I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	
教育講義 (副) 谷本教授	インド哲学演習 (演) 松本文教授	シナ哲学 高瀬助教授	仏教講義 (副) 熱田講師		心理学 (特) 松本亦教授	シナ哲学 (普) 高瀬助教授	仏教講義 (副) 熱田講師		倫理学史 (普) 友枝	心理学 (特) 松本亦教授		倫理学史 (普) 友枝講師	宗教学 (特) 熱田講師		インド哲学 (普) 松本文教授	10~11
I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	
欧州近世教育史 (普) 谷本教授	インド哲学演習 松本文教授	シナ哲学史 (普) 高瀬助教授		教育演習 (演) 谷本教授	シナ哲学 (特) 高瀬助教授	心理学 (普) 松本亦教授	心理学演習 (演) 松本亦教授	仏教講義 (副) 熱田講師	美学 (普) 藤代教授	シナ哲学 (特) 狩野教授		心理学 (普) 松本亦教授	宗教学 (特) 熱田講師		インド哲学 (普) 松本文教授	11~12
I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	III	II	I	
	哲学演習 (演) 朝永助教授	精神病学 (副) 今村講師			社会学 (特) 米田講師	欧州近世教育史 (普) 谷本教授	心理学演習 (演) 松本亦教授		社会学 (普) 米田講師	インド哲学 (特) 松本亦教授		シナ哲学 (普) 高瀬助教授	中等教育論 (特) 谷本教授		社会学 (普) 米田講師	1~2



西田幾太郎

その後、さらに田辺元（哲学）、和辻哲郎（倫理学）、天野貞祐（西洋哲学史）、小島祐馬（シナ哲学史）、羽溪了諦（宗教学）、沢村専太郎（東洋美術史）、植田壽蔵（西洋美術史）、岩井勝二郎（心理学）などの助教授・講師らを迎えた。

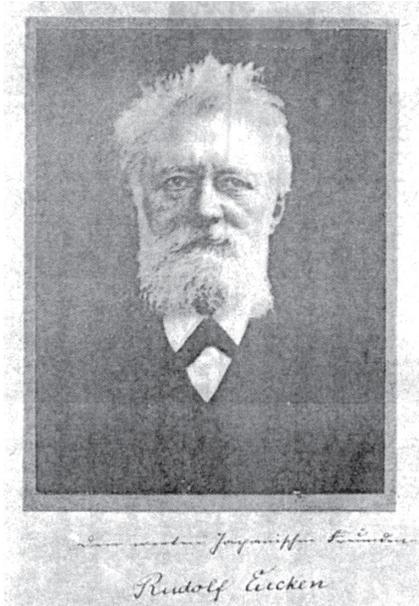
“西田哲学”（この名称は、左右田喜一郎「二八八〜一九二七」明治・大正期の経済学者・哲学者がは

- 哲学・哲学史・宗教学……………教授 西田幾多郎
- 西洋哲学史……………教授 朝永三十郎
- 倫理学……………教授 藤井健治朗
- インド哲学史……………教授 松本文三郎
- シナ哲学史……………教授 高瀬武次郎
- 宗教学……………教授 波多野精一
- 教育学教授法……………教授 小西重直
- 美学・美術史……………教授 深田康算
- 心理学……………教授 野上俊夫
- 社会学……………教授 米田庄太郎

やがて大正時代（一九二二）に入ると、哲学科はさらに充実し、面目を一新した。

注・特）は特殊講義、（普）は普通講義、（副）は副科目、（演）は演習をいみする。この時間表は「京都文科大学哲学科時間表」（明治41・10）を筆者がわかりやすくまとめたもの。『東亜の光』第十号の「彙報」所収。

	II		II		II
III	シナ哲学史（普） 高瀬助教授	III	心理学実験（演） 松本亦教授	III	III



ルドルフ・オイケン

じめて使用した)の名で知られ、また独自の哲学体系をつくることに努めた西田幾太郎(一八七〇〜一九四五、明治から昭和期にかけての哲学者)は、明治四十三年(一九一〇)八月倫理学の助教授として来任し、大正二年(一九一三)教授となり宗教学を担当し、翌三年七月桑木厳翼が東京帝国大学に転任したので、その後任として第一講座を担当することになり、哲学・哲学史などを講じた。

西田は、西洋哲学がわが国に移植されて以来はじめて、日本思想史に独自の発足点<sup>(60)</sup>をあたえ、独創的な日本哲学を確立することに大いなる貢献があった。西田の眼はいつも内にむいていた。キューピーのようにとんがった、いがぐり頭を三十度に傾斜して京の街を歩いた。かれはけっして帽子をかぶらず、そまつな木綿の着物を着たすがたで、影のごとく静かに考えごとをしながら歩いた。あるとき巡查が、この偉大な哲学者を不審者として引っぱった。そして大学に問い合わせた。「もしもし、あなたの学校に、西田という小使がおりますか？」と(大塚虎雄著『学界新風景』天人社、昭和五年四月)。

第四期は、明治四十年前後からその末期を指す時代である。これは、実際主義または実証論的思想が頂点に達した時代であり、大正期への転歩の中間的または媒介的時代であった。<sup>(61)</sup>

ヨーロッパにおいては、極端な実証論的な思想に反対して、ようやく新理想主義精神が急に勢力をえて盛んになりかけた時代である。新理想主義とは、実証主義、自然主義、唯物論的傾向に対抗しようとした新しい理想主義であり、新カント派、新ヘーゲル派などをふくむ思想的傾向をしめす語である。<sup>(62)</sup>

明治後期にわが国の文壇に自然主義(ありのままの現実を描写することを本旨とする)が伝わり、その運動は文学界だけにとどまらず、その精神は思想界にまで波及した。

明治の初年以來、わが国はたえず西洋思想を輸入してきたのであるが、それが真に活きた思想感情として深く人間の内面生活まで影響をおよぼすに至ったのは、この自然主義運動にはじまる。<sup>(63)</sup>しかし自然主義運動は長つづきしなかった。一般の思想界、哲学界は、単純な自然主義思想に満足できなかつた。明治末期から大正の新時代に移るまでの期間をつなぐ仮橋的な役割を果たしたのは、オイケン哲

学とベルグソン哲学の流行であった。

ルドルフ・オイケン（一八四六―一九二六、ドイツの哲学者、イエナ大学教授）は、自然主義哲学（精神現象をふくめ、一切の現象を自然の産物と考え、自然科学の方法で説明しようとする立場）に反対し、道徳的・宗教的人生観のもとに精神生活の実現を説いた。アンリ・ベルグソン（一八五九―一九四一、フランスの哲学者、のちコレージュ・ド・フランス教授）は、「生の哲学」の樹立者である。かれはその理論の根拠を生物学におき、進化論から哲学上の問題の解明につとめた。

スペンサーの進化論の影響をうけて、生の創造的進化を唱えた。

オイケンやベルグソンの哲学が流行した理由は、両者の著書をよめば、新しい人生観がえられるものと考えられ、その述作が続々とわが国に翻訳された<sup>(64)</sup>

オイケンについては、大正三年（一九一四）秋までの間に邦訳されたものは、左記のような著書である。

- |            |                       |      |
|------------|-----------------------|------|
| 安倍能成訳      | 『大思想家之人生観』東亜堂         | 大正元年 |
| 額賀鹿之助訳     | 『吾人は尚ほ基督教徒たり得る乎』警醒社書店 | 大正元年 |
| 波多野精一 共訳   | 『新理想主義の哲学』内田老鶴圃       | 大正二年 |
| 宮本和吉       |                       | 大正二年 |
| オイケン著      | 『精神生活の哲学』弘道館          | 大正二年 |
| 得能文訳       |                       | 大正二年 |
| ルドルフ・オイケン著 | 『現代宗教哲学の主要問題』警醒社      | 大正二年 |
| 加藤直士訳      |                       | 大正二年 |
| ルドルフ・オイケン著 | 『宗教の真諦（上）（下）』大日本文明協会  | 大正三年 |
| 三並良訳       |                       | 大正三年 |

またベルグソン哲学の流行について、桑木敵翼は「序」を寄せているが、「ベルグソンは今の流行である。数年前までは英米でもさほど注意する者がなかったのに比して、何たる変化であらうか（中略）今は日本でも一つの流行となって居る」と語っている（ベルグソン著 錦田義富訳 『直観の哲学 上』（警醒社書店、大正二年三月）。

明治三十年（一八九七）から四十年代にかけて、京都大学の哲学科を中心にドイツのカント研究がようやくわが国にも発達してきたが、この風

潮はやがて大正の新哲学を産みだす端緒をひらいた。桑木敵翼（一八七四〜一九四六、明治から昭和期の哲学者、京大・東大教授、カント哲学の移植と普及に貢献した）は、大正三年（一九一四）七月東京帝国大学に転任するまで、おもにカントの批判哲学を祖述発展させたことに大きな貢献があり、わが国の新カント派哲学の源流は京都大学の哲学科にあった。

わが国においてカントに逸早く着目したのは西周であり、かれはすでにオランダ留学中にカントの“永久平和論”などに関心を寄せていた（森林太郎筆「西周伝」、明治三十一年の「序」、西の「人世三宝説」を参照）。ついでカントの名が紙上に現れたのは、竹越興三郎講述『独逸哲学英華完』（報告堂、明治十七年十二月）であろう。

インマニナルカント  
圓蟻郵留韓図

曾テ聞ク古ヲ是<sup>不題</sup>シテ 今ヲ非スルヲ今マ見ル 今人ノ古人ニ勝ルヲ 蓋シ天ノ構造ハ 時ノ後先ヲ以テ斯民ヲ棄テサルナリ 嗚呼古今何ノ時カ聖人ナカラシム

吾人ハ十八世紀布刺多ノ聖ヲ以テ 之ヲ古ニ誇ラントス 是レ誰ソヤ性ハ韓図 名ハ圓蟻郵留ナルモノ即チ是ナリ…（一頁）

明治二十年代から三十年代にかけて、哲学者としてのカントを本格的に研究し、著書や論文を著わしたのは、つぎの学者らであった。

清野勉 『標註 韓圖純理批判解説』哲学書院 明治二十九年

三宅雄二郎著 『哲学涓滴』文海堂 明治二十二年

清沢満之 『西洋哲学史講義』（京都高倉の真宗大学寮でおこなった講義 明治二十二年十月〜二十七年十月）

中島力造 『「カント」氏批評哲学』（「未完」 明治二十四年三月〜二十五年一月）

蟹江義丸 『韓圖の『道徳純理学の基礎』梗概』（『哲学雑誌』第二〇巻 第二二三号所収、明治三十年五月）

『韓圖の哲学』（『哲学雑誌』第一三巻 第一三七号〜一四〇号所収、明治三十一年七月〜明治三十一年十月）

これらの著述のうち、もっとも深い理解とすると分析をしめたものは、清野勉の『標註 韓圖純理批判解説』（明治二十九年）であるという

論說 韓圖の哲學

蟹江義丸

此書は余が文科大學にありし頃読書に際せんが爲めにしるしにして、叙述、議論、文章共に雄采孔奥の口氣を流せり。固りて大方の教を請ふべきものにあらず。然るに哲學部書記の論文として、斯うに語つて、遂に此處まで、其を著し、こゝはなかつ。讀者に驚を誘ふ。

目録 第一編 德國の哲學の淵源 第一章 哲學史上觀念論の發長 第二章 空想哲學史上德國以前の實在論 第三章 近世哲學史上德國以前の觀念論 第四章 德國の調和的精神 第五章 其精神を第一及第二に就きての學論 第二編 德國の哲學の梗概 第一章 德國の哲學概論 第二章 德國の哲學論 第三章 德國の哲學論

蟹江義丸の「韓圖の哲學」

(船一信「明治哲學史研究」、二七頁)。

蟹江義丸(一八七二〜一九〇四、明治時代の哲學者、真宗大學講師をへ

て、のち東京高師教授)も日本におけるカント研究のパイオニアの一人であることに間違ひはないが、ほかに「韓圖の哲學」と題する論文がある

(『哲學雜誌』第一三卷第一三三三號所収、明治三十一年七月)。この一遍は、文科大學在学ちゆうに試験用に作成した論文が基になっているようで、

- 第一篇 韓圖の哲學の淵源
第二篇 韓圖の哲學の梗概
第三篇 韓圖の哲學の批評

から成っている(五一七〜五三七頁)。

ヘーゲル(一七七〇〜一八三一、ドイツの哲學者、のちベルリン大學教授、ドイツ觀念論哲學を完結した)についていえば、その人と學說を日本人にはじめて伝えたのはフェノロサ(一八五三〜一九〇八、アメリカの哲學者、日本美術研究家。東大で明治十一年「一八七八」八月から同一年「一八八六」七月まで教鞭をとった)であった。かれはスペンサーばかりかドイツ流の哲學をも講じ、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらの學說について講述した(雜録「元大學教授フェノロサ氏逝く」『哲學雜誌』第二六〇號所収、明治四十一年十月)

フェノロサはカントをはじめとするドイツの哲學者の學說の概略を語つたにすぎなかったが、それまでイギリス哲學をききなれた學生にとつて、驚異であり魅力でもあった。フェノロサにおいて、ことにヘーゲルの弁証法(一つの物の考え方。概念の正から反へ、さいごに合にいたる内的法則性による發展をいみする)は、スペンサーの進化論と基本的には違わぬものであった。<sup>(67)</sup>

明治二十年代の半ばになると、カントについての研究が盛んになるようなきざしがみえたが、ヘーゲル研究となるとまだ不活発であった。雜録「日本哲學ノ現況」『哲學雜誌』(第二七號所収、明治二十二年五月)に、左記のような記事がみられる。

ドイツの学風も近頃は、大いに輸入伝来せり。然れども理學上を措き暫くこれを見るときは、是亦政治的なり。(中略)

独逸哲学の得意なる純正哲学は未だ嘗て我国に於て門弟を得ざるなり。但し今文科大學哲学專任教授ブッセ氏はロツチエ派の人にして、兼てカント哲学に通曉せる様なれば、他日独逸哲学勃興の氣運に向うべきか。因に曰く前大學教授米人フェノロサ氏はヘーゲル派の學風を帶べり：(二六四頁)

ヘーゲルについての研究は、明治二十年においてあまり現われず、それが緒につくのは明治三十年代以降のことである。ヘーゲル紹介の初期の文献には、つぎのようなものがある。

中島力造『『ヘーゲル氏』弁証法』(『哲学雑誌』第四冊 第四八号所収、明治二十三年十二月)

園田宗恵『『ヘーゲル』ノ弁証法(Dialektik)ト東洋哲学』(『哲学雑誌』第七冊 第六九号所収、明治二十五年十一月)

中村力造『編年体西洋哲学史 下巻』出版社未詳(『ヘーゲル』の章、明治三十一年六月)

注・これは菊判(A5判よりすこし大きい)で三十二頁もあり、ヘーゲル全体に関する叙述の最初のものでないかという(『ヘーゲル文献』『哲学雑誌』第四六卷第五三八号所収、昭和六年十二月)。未見。

明治期においては、ヘーゲル哲学の立場とか体系はかなり問題にされはしたが、方法や弁証法の理論的研究はひじょうに少くなかった。<sup>(69)</sup>

#### 六 大正時代の哲学—専門的・学術的研究の深化。

わが国において哲学研究がいつそう活発化したのは大正時代(一九一二—一九二六)に入ってからのことである。<sup>(70)</sup> 哲学研究は大學教師らを中心におこなわれ、かれらは研究室や自宅の書齋にこもると、外国から輸入した専門書をよみ、その中味について理解しようとした。しかし、西洋哲学の中味たるやといったに難解であり、現実から遊離したものであった。世間において哲学に関心をよせる者は大學教師や一部の知識人だけであった。

一般人は、「哲学」をどのように考えていたのか。かれらは哲学とはわからないもの、むつかしい理屈をつけるもの程度に考えていた。じっさい日本の哲学は、そのようなものであった（小松撰郎「ドイツ観念論の移植と発展」『別冊 哲学評論』所収、昭和二十四年一月）。

一般大衆によるこのような受け取り方は、むかしもいまも変わらぬであろう。明治時代の「概論」や「概説」から脱皮して、進んで「特殊研究」がすがたをみせるようになるのが大正時代である。またこの時代、高等学校の新設にともない、哲学の専門家、哲学に関心をいだくものも多くなった。<sup>(71)</sup>

哲学書の出版がふえ、哲学会もいくつか成立した。「京都哲学会」は、大正五年（一九一六）に発足した。新しい哲学の移植もおこなわれたが、プラトン、アリストテレス、デカルト、スピノザ、カント、ヘーゲルらを中心とする古典研究も進められた（小松撰郎の前掲論文）。

大正期は「大衆社会」の時代に入り、日本社会も数多のはげしい変動を体験した。日本の資本主義は帝国主義の段階に入り、第一次世界大戦によって金融資本が確立した。大正期も昭和期とおなじように激動の時代、物騒然たる時代であった。おもな出来事としてつぎのようなものがある。

- 第一次護憲運動（憲政擁護・門閥打破を唱えた国民的運動）（大正元年・一九一二）
- 第一次世界大戦への参戦（大正三年・一九一四）
- 対華二十一カ条要求（大正四年・一九一五）
- 大正デモクラシーの風潮（大正五年・一九一六）
- シベリア出兵、米騒動（大正七年・一九一八）
- 第一次大戦の戦後恐慌（大正九年・一九二〇）
- ストライキ、小作争議の多発（大正十年・一九二一）
- 関東大震災（大正十二年・一九二三）
- 治安維持法の公布（大正十四年・一九二五）

哲学も世のうごき、社会状況と無関係ではなかったが、哲学研究はだいたい大学を中心としておこなわれた。明治時代の哲学は、大正哲学のた

めの準備に外ならなかった。

大正時代の哲学は、明らかに明治時代の哲学と異なり、ひじょうにドイツ的な新理想主義的な特徴を採って発達した<sup>(72)</sup>。このドイツ理想派の哲学は認識論的であり、批判主義的であり、大正初期の風潮となった。こういった風潮のおおもとは、京都大学の哲学科であった。

わが国がドイツ哲学の理想主義的哲学に接したのは明治二十年代であった。それが大学という社会環境に受け入れられはしたが、批評的・歴史的理解にいたらず、概説的・概括的な取りあつかいとどま<sup>(73)</sup>った。西洋哲学が学説研究の域を脱して、“問題”にたいする思想的姿勢が内面化するの、明治の末期であった。原典に忠実かつ綿密な研究を通じて、西洋哲学の理解が深化してきた。

大正時代に入って、ドイツ哲学の研究を中心とする専門的、学術的研究が深まった。わが国の哲学は、歴史的研究と同時に体系的の研究の域に入り<sup>(74)</sup>、さらに進んで西田幾太郎のように、積極的な“自己思索”によって独自の哲学体系を構築するものまで現われた。明治末期から大正の初頭にかけて刊行された代表的な哲学的研究に、左記のようなものがある。

大西 祝 <sup>はじめ</sup> 著	『大西博士全集』 全七巻、博文館、	明治三十三年、昭和二年
波多野精一著	『基督教の起源』 警醒社書店	明治四十一年
〃	『スピノザ研究』 警醒社書店	明治四十三年
藤井健治朗著	『主観道德要旨』 弘学館	明治四十三年
西田幾太郎著	『善の研究』 弘道館	明治四十四年
田中玉堂著	『哲人主義』 廣文堂書店	大正元年
西田幾太郎著	『思索と体験』 千章館	大正四年
西 普一郎著	『倫理哲学講話』 育英書院	大正四年
朝永三十郎著	『近代に於ける我の自覚史』 宝文館	大正五年
紀平正美著	『哲学概論』 岩波書店	大正五年
桑木敵翼著	『カントと現代の哲学』 岩波書店	大正六年
西田幾太郎著	『自覚に於ける直観と反省』 岩波書店	大正六年

左右田喜一郎著 『経済哲学の諸問題』 佐藤出版部

田辺元著 『科学概論』 岩波書店

大正六年  
大正七年

大西祝（一八六四～一九〇〇、明治後期の哲学者）は、岡山のひとつである。同志社英学校、東京帝国大学予備門をへて、明治二十四年（一八九九）東京専門学校に勤め、論理学・倫理学・西洋哲学史などを講じた。かれは明治二十年代に世代の先駆をなして活躍した。明治三十一年（一九〇六）ドイツに留学したが、翌年病をえて帰国。同三十三年（一九〇八）郷里において亡くなった。享年三十九歳。穎才にめぐまれながら、不幸にして夭折した。全集七巻が遺書となった。

波多野精一（一八七七～一九五〇、明治から昭和期の哲学者）は、東京専門学校講師をへて、後年京大教授になるのだが、哲学史および宗教哲学を専門とした。藤井健治郎（一八七二～一九三一、明治・大正期の倫理学者）は、早大教授をへて、大正二年（一九一三）以後、京大教授となり、倫理学を講じた。のち観念論的立場からマルクス主義を批判した。

西田幾太郎（一八七〇～一九四五、明治期から昭和期にかけての哲学者）は、石川県のひとである。第四高等中学（のちの四高）に入学するが、のち同校を退学した。その後、東京帝大の哲学科選科に入学し、同校を卒業した。能登尋常中学校七尾分校の教師、山口高等学校、第四高等学校教授、学習院教授をへて、明治四十三年（一九一〇）京都大学に倫理学の助教授として来任し、大正二年（一九一三）教授に任じられ、翌年桑木厳翼教授の後任として本講座（哲学・哲学史第一講座）を担当した。<sup>75</sup>

西田はギリシャ・スコラ哲学、ベルグソン、ドイツ新理想主義哲学、新カント派の哲学（ウィンデルバント、リックカート、コーヘンなど）なども自主的に取り込み、独自の哲学体系を確立した。西田の哲学思索の方法は——「どこまでも直接な、もっとも根本的な立場から物を見、物を考える、どこまでも徹底的に考へよう」といったものであった。<sup>76</sup>

西田の処女作『善の研究』（弘道館、明治四十四年）は、金沢の第四高等学校の教師時代の著述であるが、その中心思想は純粹経験といったこ

とばに集約されているという。

桑木厳翼（一八七四〜一九四六、明治から昭和期の哲学者）は、六人の仲間と京都大学の哲学科の創設に参画したひとりだが、八年後東京大学に転任した。桑木は西田のような体系家というより、哲学史家の傾向がたよく、認識論的合理主義のたしばをとり、カントの批判哲学を祖述発展させ、幾多の業績を発表した。代表作としては、『カントと現代の哲学』（岩波書店、大正六年）、『哲学及哲学史研究』（岩波書店、昭和十一年）、『倫理学の根本問題』（理想社、昭和十一年）などがある。

田辺元（二八八五〜一九六二、大正・昭和期の哲学者）は、東北大学講師をへて、大正八年（一九一九）八月助教として京都大学に赴任し、昭和二年（一九二七）十一月教授に任じられた。田辺が意図したものは、現実の倫理と実践の倫理とを総合する哲学の樹立であった。<sup>(77)</sup> 主なる著述に、『科学概論』（大正七年）、『ヘーゲル哲学と弁証法』（昭和七年）、『哲学通論』（昭和八年）、『哲学入門』（全四巻、昭和二十四年〜同二十七年）などがある。

大正時代のわが国の哲学は、前半期と後半期に二分できそうに見えるが、前者の特徴は、ひじょうに新カント学派的であり、後者のそれは各種の新理想主義の哲学の研究の途にのぼったことである。たとえば現象学（経験されない物自体と区別される経験された現象をあつかう学問。意識の発展段階を研究する学問。純粹意識の体験である現象の本質を研究する学問）、新实在論哲学、ディルタイ学派の精神科学派の<sup>(78)</sup> 新研究などが、ますます勢力をもってきた。



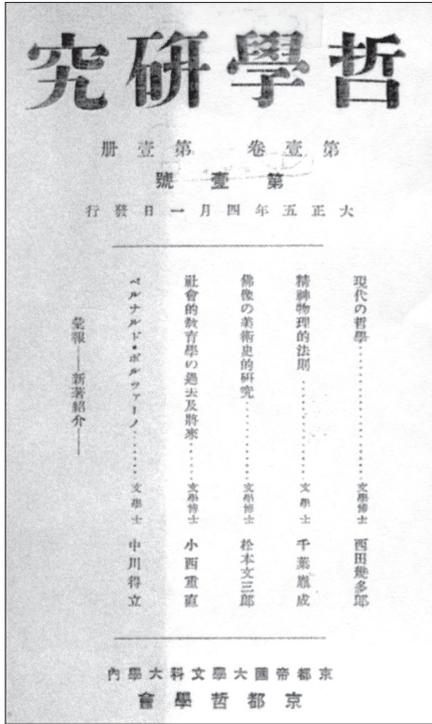
桑木厳翼とその筆跡

桑木  
厳翼

一方、一般の思想界に目をむけると、第一次世界大戦ちゅうから大戦後にかけて国内を風靡していたのは民主主義<sup>デモクラシー</sup>の思想であり、もう一つはマルクス主義（唯物史観的思想）であった。この思想が流行する原因となったのは、労働者と労働組合が激増したこと、不況により失業者がふえ、就職や生活が困難になったこと、政治の腐敗や財閥が強大化したことによる。<sup>(79)</sup>

マルクス主義は、天皇制のもとでは、反国家的性格をもつものであり、国体を変革し、労働階級によって共産主義社会をつくろうとするものであった。

大正期、多数の官立・私立大学や高等師範学校等において、おおぜいの学徒がまじめに哲学の研究に取り組んでいる観があったが、マルクス主義者からみれば、新理想主義の哲学は過去



『哲学研究』創刊号

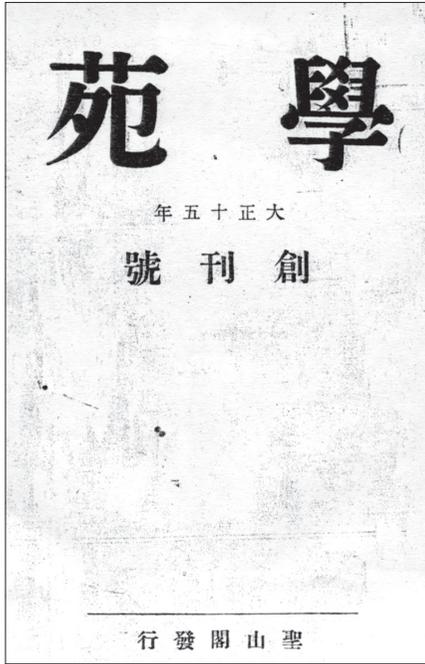
の亡霊、資本家階級の文化的遺物にすぎなかった。また各大学の哲学科は、過去の遺物を夢みているにすぎなかった。<sup>(80)</sup> マルクス・レーニンの社会主義思想は、労働者階級、知識階級（学生や教師ら）によって信奉されたのであるが、かれらは必ずしもマルクス主義理論をじゅうぶん深く理解せず、ただ流行の波に流され、わけもわからず信じ込んでいくにすぎなかった。とくに社会主義思想に関心をもつ全国の大学・高等学校・専門学校・専門学校などの学生らは、実践的運動（過激思想取締法案や軍事教練にたいする反対運動、同調者<sup>シンパ</sup>の組織、労働闘争、小作争議の煽動、党勢の拡張、主義の宣伝、メーデーの暴動化など）に加わったり、さまざまな研究団体を結成した。

- 新人会……………東京帝国大学（大正七年十二月）
- 建設者同盟……………早稲田大学（大正八年九月）
- 社会思想研究会……………第一高等学校（大正八年？月）
- 暁民会<sup>ぎょうみん</sup>……………早稲田大学（大正九年五月）
- 学生連合会……………全国の大学・高等・専門学校二十六校の連合（大正十一年十一月）

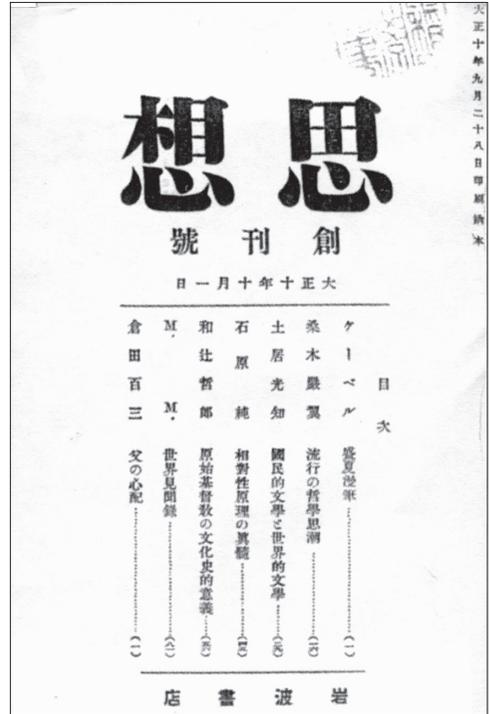
「学生連合会」は、のち「全国軍事教育反対同盟」（大正十二年）「社会科学連合会」（大正十三年）「全日本学生社会科学連合会」（大正十四年）と改称。

他方において社会主義者の団体「日本社会主義同盟」が大正九年（一九二〇）に結成され、同十一年（一九二二）には「日本共産党」が成立し、活発な運動を展開したが、いずれも当局によって弾圧された。

大正期のはじめごろより、「社会問題」が顕著になってきたが、それを哲学の立場から問題にされることはなかった。<sup>(81)</sup> しかしながら、社会問



『学苑』創刊号



『思想』創刊号

題は、大正末期から昭和にかけてマルクス主義として先鋭化していった。大正以降、日本の哲学界は、各地の大学を中心として純粹に学問的になってきたが、そこを覆っていたのはドイツ哲学であり、またドイツの学界の動向を反映していた。哲学が一般の知識人に普及する機縁となったものは、大正四年（一九一五）にはじまった「哲学叢書」（岩波書店）であるが、若干の例をのぞくと、内容のほとんどはドイツ人の論文を反訳したものであり、日本人としての獨創性がみられなかった。しかし、同叢書の刊行は異常な反響をよび、<sup>(32)</sup> 何度も版をかさねた。要するにこの叢書は、「哲学」というものの普及化に貢献したということである。その他、哲学を広めるのに寄与したものは、専門誌である。従来、哲学研究の主要な発表誌として、『哲学会雑誌』（明治二十年二月に創刊）があったが、大正から昭和初頭にかけて、つぎのような雑誌が創刊された。

- 『哲学研究』（大正五年四月創刊、京都帝国大学哲学会の機関誌）
- 『思想』（大正十年十月創刊）
- 『講座』（大正十二年一月創刊）
- 『学苑』（大正十五年七月創刊）
- 『理想』（昭和二年四月創刊）

大正初期以後、これらの雑誌にのせられた大多数の論文は、新カント

学派の哲学を紹介したり、批判したり、あるいは考察したりしたものである。<sup>83)</sup>

新カント学派の哲学の移植と関連して、カント哲学の研究が盛んになり、大正元年（一九一二年）以降、桑木敝翼その他の東京帝大哲学会の会員を中心に「カントの夕べ」が催され、カント哲学の普及につとめた。大正十三年（一九二四年）はカントが生まれて二百年にあたることから、『哲学会雑誌』『思想』『講座』などは記念号を出し、カントおよび新カント派の研究が学界の流行となった。

大正末期から昭和にかけて、わが国の哲学界はカント主義からヘーゲル主義へとむかった。わが国のヘーゲル研究は、大正十三年（一九二四年）以後、紀平正美を中心とする研究会が開かれていたが、ヘーゲル哲学復興のきざしが現われるようになったのは、「ヘーゲル百年記念」がおこなわれる数年前からである。<sup>84)</sup>

### 七 昭和期（戦前・戦中）の哲学。

昭和期の哲学を前半期（戦前）と後半期（戦後）にわけて叙述したほうがよさそうである。昭和期においても、わが国の哲学のすう勢はドイツ哲学であった。が、哲学界の情勢は単純ではなく、こみいっていた。それは当時の社会情勢とからみあっていた。

わが国のファシズムは、ますます強力になり、国内においては権力によって反対勢力を押さえ、外国にたいしては侵略政策をとるようになった。太平洋（大東亜）戦争勃発までのおもな出来事は、左記のとおりである。

- 三・一五事件 ..... 昭和三年（一九二八年）  
（共産党の大検挙）や思想犯弾圧の強化
- 四・一六事件（共産党の大検挙） ..... 昭和四年（一九二九年）  
満州事変（軍部の進出が決定的となり、  
侵略戦争に突入した） ..... 昭和六年（一九三一年）
- 五・一五事件 ..... 昭和七年（一九三二年）  
（海軍青年将校によるクーデター）
- 滝川事件（思想弾圧） ..... 昭和六年（一九三三年）
- 天皇機関説問題 ..... 昭和十年（一九三五年）

二・二六事件 (皇道派青年将校によるクーデター)	昭和十一年(一九三六)
日中戦争おこる	昭和十二年(一九三七)
大政翼賛会の成立	昭和十五年(一九四〇)
南部仏印進駐の開始	昭和十六年(一九四一)
太平洋戦争の開始	昭和十六年(一九四一)

わが国の思想界も複雑な形勢にあり、左翼的な思想や運動に対抗して国家主義的の運動がおこった。とくに左翼の史的唯物論に対決することが哲学界の中心問題となった。<sup>(85)</sup>

終戦まで観念論(世界の根源を精神的なもの、非物質的なものとして捉えたとき、物質的なものを第二次的とする見解)と弁証法的唯物論(マルクス主義哲学)との対抗があり、昭和十五年(一九四〇)には、唯物論の徹底的弾圧がおこなわれた。<sup>(86)</sup>昭和六年(一九三一)の満州事変以来、国家意識や国家主義思想(日本精神哲学)が興起し、それがはびこった。

大正の末期から昭和初期にかけて、経済理論を基礎にした弁証法的唯物論が宣伝され、民衆の要求もこれによって満たされると一般に信じられた。新カント学徒も、この弁証法的唯物論に好意をしめすといった奇妙な状態が生じた。各大学の哲学教授や研究室から敢然としてこの弁証法的唯物論者と論戦できる者はひとりもいなかった(大島豊「新日本の哲学の指針」『理想』第二二〇号所収、昭和十六年五月)。

昭和期に入っても、わが国の哲学界はドイツ哲学から強い影響をうけ、その羈絆きはんから脱することができなかった。日本の哲学界のうごきは、ドイツ本国の思想動向と連動していて、かの地の思潮の発展は、すぐ日本の哲学界に影響をあたえた。たとえば、ドイツ哲学がカントからヘーゲルへ——ヘーゲルからディルタイへ——ディルタイからフッサールへ——フッサールからハイデッガーへ——ハイデッガーからヤスパースへと発展して行くのに対応して、わが国の哲学学徒がそれらの研究へと移って行った。日本の哲学学徒は、なるべく新しいドイツ哲学について研究さえしておれば歓迎された。カント、ヘーゲル、フッサールについていえば、著述の翻訳紹介の域を脱し、原典の文献的研究へ進み、さらにそこから一歩進んで解釈的研究へとむかい、独自の批評をするようになった。この三人に関する代表的特殊研究には、つぎのようなものがある。

「カント」

左右田喜一郎著

『文化価値と極限概念』岩波書店

大正十一年

〃

「テレオロギー考察」(『思想』一六号所収)

大正十二年

大西克礼著

『カント判断力批判の研究』岩波書店

昭和六年

天野貞祐著

『カント純粹理性批判』岩波書店

昭和十年

和辻哲郎著

『カント実践理性批判』岩波書店

昭和十年

高坂正顕著

『カント』弘文堂書房昭和十四年

昭和十四年

〃

『カント解釈の問題』弘文堂書房

昭和十四年

〃

『カント学派』弘文堂書房昭和十五年

「ヘーゲル」

三木清著

『史的観念論の諸問題』岩波書店

昭和六年

〃

『観念形態論』鐵塔書院

昭和六年

田辺元著

『ヘーゲル哲学と弁証法』岩波書店

昭和七年

三木清著

『歴史哲学』岩波書店

昭和七年

務台理作著

『ヘーゲル研究』弘文堂書房

昭和十年

高橋里美著

『体験と存在』岩波書店

昭和十一年

高坂正顕著

『歴史的世界』岩波書店

昭和十二年

高山岩男著

『哲学的人間学』岩波書店

昭和十三年

〃

『歴史と弁証法』岩波書店

昭和十四年

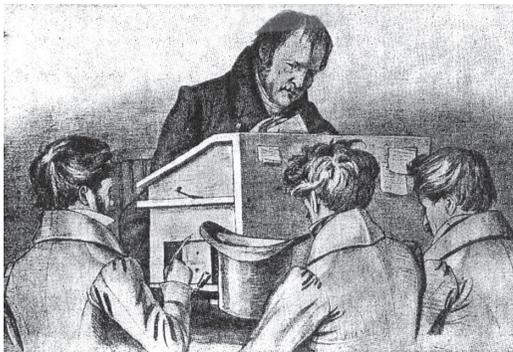
西谷啓治著

『根源的主体性の哲学』弘文堂

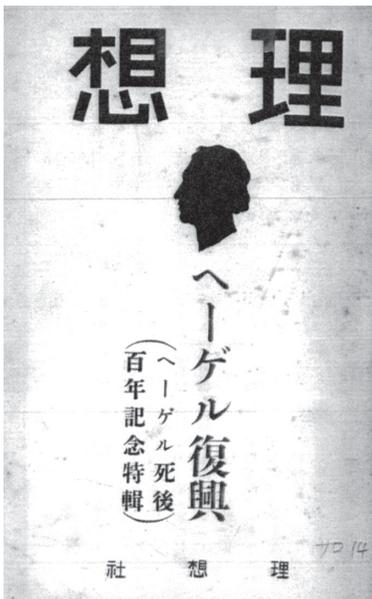
昭和十五年



イマヌエル・カント



フランツ・クグラールが描いた学生に講義するヘーゲル。



『理想』（ヘーゲル死後百年記念特輯）

高山岩男著

『世界史の哲学』岩波書店

〃

『包弁証法』理想社

〃

『場所の論理学』弘文堂書房

金子武蔵著

『ヘーゲルの国家観』岩波書店

〃

『種の論理と弁証法』秋田屋

「フッサールの現象学または現象学的傾向をもつ研究」

三木清著

『唯物史観と現代の意識』岩波書店

山内得立著

『現象学叙説』岩波書店

〃

『存在の現象形態』岩波書店

昭和十七年

昭和十七年

昭和十九年

昭和十九年

昭和二十二年

昭和三年

昭和四年

昭和五年

九鬼周造著 『いきの構造』 岩波書店

昭和五年

高橋里美著 『全体の立場』 岩波書店

昭和七年

和辻哲郎著 『風土』 岩波書店

昭和十年

〃 『偶然性の問題』 岩波書店

昭和十年

〃 『倫理学』 岩波書店

昭和十二年

九鬼周造著 『人間と実存』 岩波書店

昭和十四年

務台理作著 『表現と論理』 弘文堂書房

昭和十五年

〃 『現象学研究』 弘文堂書房

昭和十五年

わが国におけるカント哲学の翻訳紹介がはじまったのは明治時代であり、その精緻な研究は大正期に入っておこなわれるようになるが、当時哲学学徒なら、いちどはカントをかじるのが一般的であった。<sup>(87)</sup> そのころカント研究の先駆的な論著といえは、桑木厳翼の『カントと現代の哲学』(大正六年)であった。大正末から昭和にかけて、わが国の哲学界はカント主義的からヘーゲル主義的へとむかい、ヘーゲル哲学的思惟方法が支配的になってゆく。<sup>(88)</sup>

ヘーゲル哲学の移植に努めた主な哲学者は、三木清、田辺元、高橋里美、小山鞆絵<sup>ともえ</sup>、三枝博音などである。ことに雑誌『思想』と『理想』は、大正四年(一九一五)と六年(一九一七)にヘーゲル特輯号を出し、また昭和四年(一九二九)以降、三枝博音編『ヘーゲル及弁証法研究』(専門雑誌)が刊行された。<sup>(89)</sup>

昭和の初頭から哲学の方面において、マルクス主義を紹介したのは三木清であり、わが国の哲学界に及ぼせるその影響力はすくなくなかった。フッセルの移入に貢献した者は、第一次世界大戦後、ヨーロッパに留学した学徒であり、かれらはフッセルの門をたたき、そこからさらに同じ現象学徒に属するハイデッカーの研究にむかった。<sup>(90)</sup>

日本哲学(皇道哲学)の勃興。

わが国は昭和六年(一九三一)に満州事変がおこるや、非常時に入った。昭和初期以来、日本の資本主義は行きづまり、危機に瀕していたが、

それを打開する方法として選んだのは満州への進出であり、現地の軍部（関東軍）は鉄道爆破により満州事変をひきおこした。わが国の軍国主義は段階的に拡大し、上海事変（昭和七年）、日中戦争（昭和十二年）へと進み、ついに太平洋戦争（昭和十六年）に突入した。

わが国の哲学界は、ほとんど社会状況の変化に左右されることはなかったが、日本が太平洋戦争の緒戦において目覚ましい戦果をあげ、大東亜共栄圏の輪郭が定まってくるにつれて、日本人の精神生活や哲学思想がその影響をうけ、特異の相貌をしめすようになった。すなわち、それまでの外国依存一点ばりの傾向を清算して、日本精神を発揚した哲学、新しい日本独自の哲学を生みだそうとする国民的自覚が芽生えてきた。

わが国の哲学界は、満州事変以後、思索のなかに日本および東洋にたいする反省を加えるようになり、それまでの伝統的傾向をはなれて現実哲学・歴史哲学的な性格を帯びてきた。とくに昭和十七年（一九四二）になると、日本を世界の指導者とする国民的感情から、――

#### 日本精神の回顧

#### 日本的世界観の確立

#### 日本哲学（皇道哲学）の樹立

などの傾向が顕著になり、神道思想、尊皇精神、国体に関する論文や著述がたくさん生まれた。この種の業績は、必ずしも神道や国学系の人がとが創りだしたのではなく、かつて西洋哲学畑であった者が急に方向転換した結果の産物であった。

太平洋戦争がはじまる前後から、日本の哲学者のなから、“国家哲学”への新たな基礎づけを試みたり、“日本哲学”の建設に取りくむ者も出てきた。日本哲学とは、日本の本質すなわち国体を明らかにしようとする哲学であり、日本のための哲学——皇国の道を実現するのに役にたつ哲学の意である。<sup>(92)</sup> 日本哲学が日本のための哲学であるかぎり、歴史的社会的現実をテーマとするのは当然であり、——わが国の歴史・文化・社会・国家・皇道などについての研究がはなばなしく行なわれた。<sup>(93)</sup>

こういった独善的な国粹主義のたちばからの研究は、皇室・日本精神・古典文学・神道に関するものが大半であった。列強を相手とする太平洋戦争は、わが国にとって総力戦であり、かつ古今みぞうの大戦争であったが、戦況は日がたつにつれて劣勢へとむかい、開戦以来三年八カ月経過した昭和二十年（一九四五）八月十五日――、ついに連合国側に無条件降伏し終結した。明治以来、世界の強国のあいだに、じぶんの位置を見い

だそうとした<sup>(94)</sup>帝國主義國家日本の敗北であった。

#### 京都学派の戦争賛美。

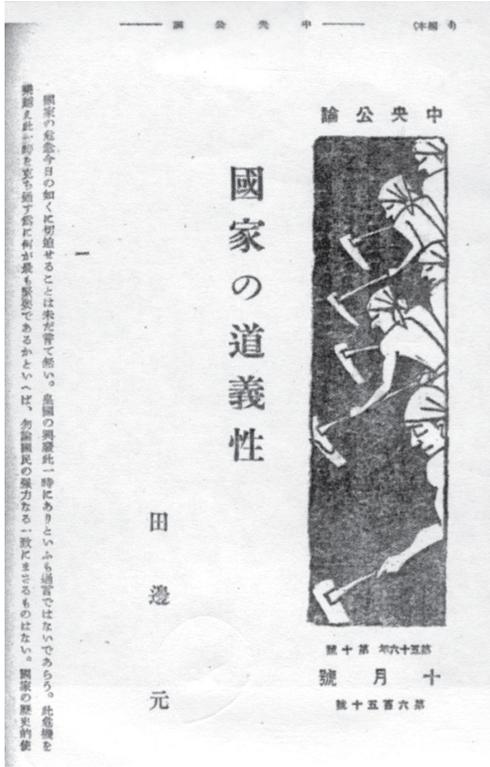
戦争ちゅう雨後の竹の子のようにむらがり生えた日本哲学（皇道哲学）も、終戦と同時に火の消えたように、ひそまってしまった（務台理作「日本今後の哲学」『展望一月号』所収、筑摩書房、昭和二十一年一月）。かつて「日本精神」とか「日本哲学」をさかんに唱えた者のほとんどは、一部の狂信者をのぞくと、時局便乗者であった。かれらは天皇の終戦の玉音放送を聴いたとたん、呆然としてかつての主張を放りだした。

時局に迎合したのは、こういった国粹的傾向をもつ皇道哲学者だけではなかった。じつはアカデミズム哲学の本山にも、侵略戦争の目的を合理化するためのしごとに片棒をかついだ者がいた。かれらこそ京都学派の一部の人びとであった。かれらは人間観や世界観を民族や国家との連関でとらえようとした。

西田幾太郎、田辺元、三木清らの哲学者にしても、軍国主義の台頭とともに国策に迎合し、あたかも超国家主義や侵略戦争の世界史的意義を唱導するかのような論文を、太平洋戦争開始まえ、もしくは戦争ちゅうに雑誌に発表した。西田は「国家理由の問題」（岩波講座『倫理学』の第八冊所収、昭和十六年九月）において、国家哲学の新たな基礎づけを試みている<sup>(95)</sup>。西田によると、こんにちの時代（昭和十六年当時）は、歴史的世  
界自覚の時代なのである。そしてこんにちの国家主義は、世界の自覚だという。西田は歴史的世界創造ということが国体の本義（根本）である、  
といい、このような国体を基礎に、世界形成に乗りだすのが日本国民の使命であらねばならぬ、と語っている。ここで西田がいつている「世界形  
成」とは、海外進出のスローガンとなった八紘一宇（全世界を一つの家のように統一して支配する）の思想——いい換えると、「東亜新秩序建  
設」のことであろう。

田辺元は太平洋戦争がおこるまえの切迫した状況下に、「国家の道義性」（『中央公論』昭和十六年十月）と「思想報国の道」（『改造』昭和十六年十月）の論文を二つ同時期に発表し、時局にたいする考えを明らかにした。

前者において、田辺はこんにちほど国家の危急（危難）が切迫していることはないという。この危機を乗り越えるためには国民の強力なる一致  
団結が緊要だという。「道義」とは、人がおこなう正しい道、道徳の筋道の意であるが、田辺によると、国策のおおもとである肇国<sup>ちやうこく</sup>の理想は、道  
義の内容にほかならないのである。国家の道義性は、国民の道徳的自覚を媒介として成立しているという。国家とは絶対的存在であるのだが、そ



田辺元「国家の道義性」



田辺元

の絶対の現成（あるがまま）に身をゆだね、信ずるところに従って行動するのが、国民のつとめだというのであろう。

「思想報国の道」は、前論文の続編もしくは補足のようなものである。田辺の考えを要約すると、つぎのようになる。わが国は国難に直面し、国民の緊張も極度に達している。このときにあたり、思想に携わるものも、その立場において、国のために尽すことはもとより当然のことである。思想家も国民として進んで国家に貢献する覚悟が必要である。否、国策に順応して、報国の実践にまで進んでいなければならない。

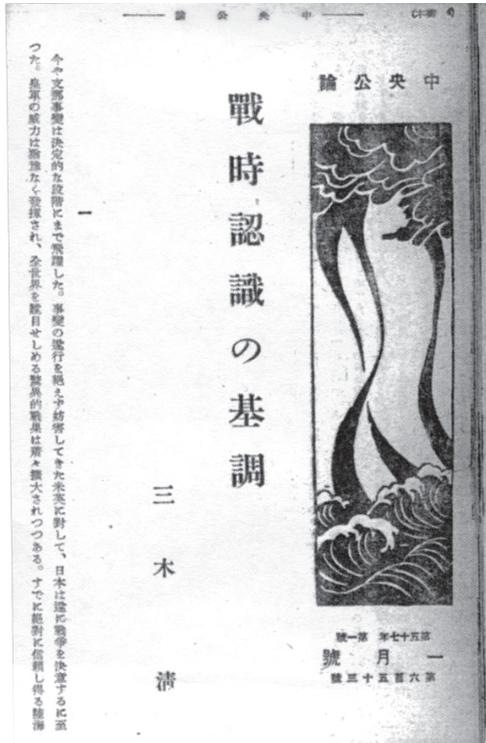
あくまで国家と自己とを分離せず、相互の疎外をしりぞけて、内的協和すなわち自主自立の道により、国恩に報じなければならない。

要するに田辺の主張は、国難にさいして、国民全体が一つになって国策に協力し、八紘一字の理想の実現——すなわち東亜の民族開放と新秩序の創建につくさねばならぬというのであろう。それはまた国恩に報いることでもあった。

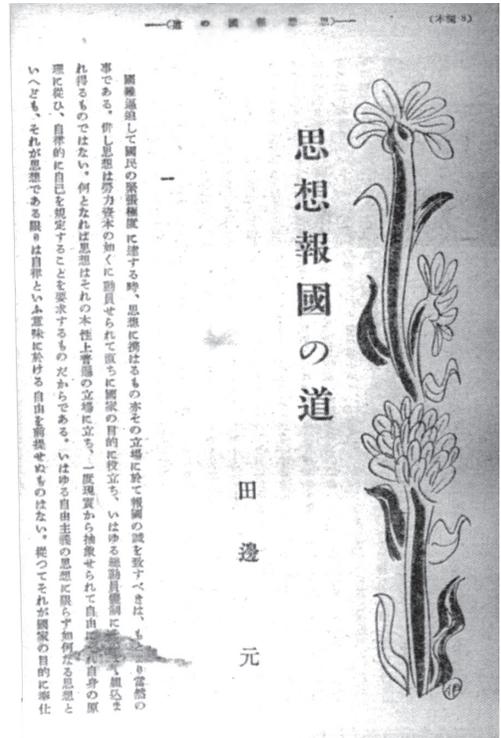
皇紀は、日本の紀元を日本書紀にあるように、神武天皇即位の年（西暦紀元前六六〇年）を元年として起算したものが、皇紀二六〇一年——昭和十六年（一九四二）十二月八日——ついにわが国は米英を敵として戦争状態に入った（太平洋戦争の勃発）。

翌昭和十七年（一九四二）一月、マルクス主義哲学者として哲学ジャーナリズムの世界でもはやされた三木清（一八九七—一九四五、大正・昭和期の哲学者、のち法政大学教授、終戦の年獄死）は、「戦時認識の基調」『中央公論』昭和十七年一月」という論文において、太平洋戦争を肯定し、戦争への協力を唱導している。三木はかたる。

——米英にたいして、日本はついに戦争を決意するに至った、と。皇軍（天皇が統率する軍隊）の威力は発揮され、全世界が目を見はるほどの驚異的戦果をあげている。絶対に信頼しうる陸海軍を有するこ



三木清「戦時認識の基調」



田辺元「思想報國の道」

とを誇りとする国民は、不敗必勝の信念をかため、国内の諸般の整備の感性に邁進し、皇軍のめざましい活躍に呼応しなければならぬと。

三木によれば、東亜新秩序建設のための戦争は、道義戦争なのである。東亜新秩序の建設は、世界史的意義をもっており、われわれはあらゆるものをこれとの関連で、世界史的なことから考える必要があるという。戦時下の生活でいちばん大切なものは秩序であり、また警戒を要するものは、流言だという。新秩序戦はその性質上、長期化することを覚悟し、国民の任務にさいごまで忠実であれば勝利がえられる、と説いている。

このように太平洋戦争の前後に、西田や田辺や三木といった京都学派の人びとは、何らかの形で国家哲学に染まり、戦争を称揚したり、戦争を合理化するために、筆を曲げてまで、その世界史的意義を説いたりした(寺沢恒信「哲学界の回顧と展望」『青年文化』三月(二月合併)号所収、創生社、昭二十二年三月)。

戦時下における各大学の哲学講義題目・講義評判記。

日本政府は、対米・英との戦争が避けがたいと判断し、昭和十六年(一九四一)十二月初旬を期して、開戦を準備した。日本政府はアメリカ側から強硬な「ハル・ノート」をしめされたことによって、ついに開戦にふみ切った。日本軍は、翌十七年(一九四二)一月のマニラ

占領、二月のシンガポール占領あたりまで、連戦連勝をつづけ、国民もそのニュースに酔った。が、日本海軍は同年六月五日から七日にかけてのミッドウェーの海戦に大敗を喫し、空母四、重巡洋艦一、航飛機三三二、兵員三五〇〇人をいちどに失った。九月にはガダルカナル島から敗退し、その後はわが軍の敗北がつづいた。

大東亜共栄圏の構想実現は、だんだん怪しくなってきた。

昭和十六年十二月八日に、対英米宣戦の詔勅が発せられてから各大学において、戦争目的の遂行に協力するために、総長・学長を先頭に決戦態勢の覚悟が表明され、また戦時下における学生のあり方が決定した。学生は独善に陥り、いたずらに空論をもてあそぶことなく、無窮の皇恩にこたえねばならぬというものであった。

国民は、日本の運命をじぶんの生命いのちとして捉え、思想的自覚をもつことが求められた。戦況の悪化にともない、各大学における哲学教育と研究は円滑にいかなくなるのだが、以下に記すものは、戦時下——昭和十六年（一九四一）と同十七年（一九四二）の各官立・私立大学における哲学講義の題目についてである。これによりだれがどのようなテーマでどんな講義や演習をやっていたかわかるが、その内容までは不明である。

昭和十六年（一九四一）度講義一覧

「大学名および講義題目」		「担当者」	
東北帝国大学			
哲学概論		高橋里美	
哲学特殊講義（現実性の構成）		同	中世哲学史概説（連続講義）
哲学演習 用書 M. Heidegger: <i>Sein und Zeit.</i>	同	同	近世哲学史概説
哲学講読 用書 Hegel: <i>Philosophie der Weltgeschichte.</i>	鈴木権三郎	倫理学概論	近世哲学史特殊講義
古代哲学史概説	久保 勉	倫理学演習 用書 Hegel: <i>Grundlinien der Philosophie des Rechts.</i>	近世哲学史演習 用書 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes.</i>
古代哲学史演習 用書 Platon: <i>Menon; phaidon.</i>		倫理学史	
		同	石原 謙
		同	小山 鞆絵
		高橋 讓	

東京帝国大学

哲学概論	伊藤吉之助
現実と現存	同
哲学演習 Hegel: <i>Wissenschaft der Logik.</i>	同
西洋哲学史概説(第一部)	出隆
同(第二部)	池上鎌三
コスモポリテスの哲学	出隆
哲学演習 Aristoteles: <i>De Anima.</i>	池上鎌三
知識構造論	同
哲学演習 Kant: <i>kritik der reinen Vernunft.</i>	桂 壽一
デカルト哲学の発展	石原 謙
アウグスティヌスと其の思想	
注・支那哲学、印度哲学は省略する。	
東京文理科大学	
哲学概論	務台理作
歴史哲学の諸問題	同
演習 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft.</i>	同
哲学概論	坂崎 侃 <small>か</small>
論理学及び認識論	同
演習 Hegel: <i>Vernunft in der Geschichte.</i>	
西洋哲学史	下村寅太郎
講義 Leibnitz: <i>Hauptschriften zur Grundlegung der</i>	同

Philosophie II.

全体主義の基礎的考察	由良哲次
西洋古代哲学	田中美知太郎
講読 Descartes: <i>Meditationes.</i>	同
美学概論	大西克礼
支那仏教史	宇井伯壽
京都帝国大学	
「普通」哲学概論	田辺 元
「特殊」実在の超越性と内在性	同
「ク」歴史主義の問題と世界史	高山岩男
演習 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes. Die Religion.</i>	田辺 元
(前学年のつづき)	
西洋哲学史	
「普通」西洋古代哲学史	山内得立
「ク」西洋近世哲学史	九鬼周造
「特殊」テオポリスの哲学	山内得立
「ク」独逸の新カント学派と仏蘭西の科学の哲学	九鬼周造
演習 Platon: <i>Charmides.</i>	山内得立
演習 Bergson: <i>L'Evolution Créatrice.</i> (第四章)	九鬼周造
倫理学概論	天野貞祐
演習 Hegel: <i>Grundlinien der Philosophie des Rechts.</i>	同
副科目	
西洋哲学史講義 Augustinus: <i>Solitiquia. Bonaventura:</i>	服部英次郎

<i>Itinerarium mentis in Deum.</i>	野田又夫	演習 (アリストテレス形而上学)	用書	Aristoteles:	同
Decartes: <i>Meditationen über die Grundlagen der Philosophie.</i>		<i>Metaphysica.</i>	西洋近世哲学史概説 (第一部)		中島慎一
広島文理科大学		同 (第二部)			同
哲学概論	勝部謙造	倫理学概論 (倫理学の主要問題)			四宮兼之
実存哲学の主要問題	同	倫理学演習			新開長英
カント以後現代に至る西洋哲学	同	西洋近世倫理学史 (フイヒテ以後)			同
西洋近世哲学史	河瀬憲次	倫理学演習 用書 Kant: <i>Kritik der praktischen Vernunft.</i>			四宮兼之
哲学史演習	同	倫理学演習 (アリストテレス、ニコマコスの倫理学)			中島慎一
論理学の根本問題	同	フランス哲学思潮に於ける意志学説			矢田辺達郎
古代中世哲学史	高田三郎	京城帝国大学			
ギリシヤ哲学に於ける正義論	同	哲学概論			宮本和吉
哲学史講読	同	論理学			田辺重三
支那哲学史演習	加藤常賢	哲学特殊講義 (独逸観念論の哲学——カントよりヘーゲルまで)			宮本和吉
支那哲学史概説	手塚良道	哲学特殊講義 (アウグスティヌスの哲学)			田辺重三
日本思想史 (元禄享保間の思想界)	清原貞雄	演習 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft.</i> (前学年のつづき)			宮本和吉
日本思想史演習	白井成允	演習 Brentano: <i>Versuch über der Erkenntnis.</i>			田辺重三
九州帝国大学		西洋倫理学史概説			小島軍造
哲学概論	四宮兼之	倫理学特殊講義 (共同体倫理の問題)			同
演習 用書 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft.</i>	同	日本道徳史			宮島克一
生の哲学	田中昇				
ギリシヤ語初歩	同				

倫理学演習	同	宋元哲学	李戲魚
同 Kant: <i>Kritik der praktischen Vernunft</i> . (前学年のつづき)	小島軍造	明清哲学	錢乘雄
台北帝国大学		儒家哲学	齋新化
東洋哲学史概説 (岩波全書本 支那思想史)	今村完道	印度哲学	中野道照
東洋哲学講読及び演習 (老子 莊子 文求堂発行)	同	水戸学派哲学	張則貴
東洋哲学特殊講義 (宋代の哲学―後藤俊瑞著『朱子の実践哲学』)	後藤俊瑞	道教史	小和田武紀
東洋哲学講読及び演習 (論語註疏)	同	東洋仏教史	劉桂
哲学概論	岡野留次郎	東洋美術史	魏善忱
西洋哲学特殊講義 (行為現象学)	同	哲学概論	薛民生
西洋哲学演習 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft</i> .	同	西洋哲学史	温公頤
西洋哲学史概説 (西洋近世哲学史)	浅野安太郎	認識論	兒玉達童
西洋哲学講読 Hegel: <i>Die Vernunft in der Geschichte</i> .	同	宗教哲学	洪耀勳
倫理学概論	世良壽男	慶応義塾大学	同
東洋倫理学概論	同	哲学概論	彭鑑
倫理学講読及び演習 Kant: <i>Grundlegung zur Metaphysik der Sitten</i> .	同	西洋哲学史 (古代及び中世)	船田三郎
倫理学史 (カント以後の実践哲学)	柳田謙十郎	西洋哲学史 (近世)	同
国立北京大学		西洋哲学演習 Lotze: <i>Metaphysik</i> .	橋本学
中国哲学思想概要	許宝騫	同 Husserl: <i>Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie</i> .	船田三郎
中国哲学史	温公頤		橋本学

現象学研究	同	東洋哲学専攻演習	福井康順
論理学（弁証法の発展）	川合貞一	西洋哲学史（ヴィンデルバンド）	岩崎 勉
近世歴史哲学概説	船田三郎	ギリシャ哲学（アリストテレス）	仁戸田六三郎
支那哲学（周易）	高田真治	西洋近代哲学	桑木殿翼
印度哲学（三国仏教文化の概説）	常盤大定	宗教学	帆足理一郎
同（印度思想に於ける存在感）	山本快龍	基督教研究（アウグスチヌス研究）	仁戸田六三郎
論理学概説	川合貞一	論理学及び認識論	岩崎 勉
論理学演習 Kant: <i>Kritik der Urteilskraft.</i>	同	西洋哲学研究（クリーク研究）	大江清一
近世論理学説の発展（カント以後現代まで）	橋本 孝	同（ホワイトヘッド研究）	今田竹千代
東洋倫理思想史	高田真治	同（ヘーゲル研究）	佐藤慶二
早稲田大学	同	西洋哲学専攻演習	岩崎 勉
哲学概論	桑木殿翼	論理学研究（ニイチェ研究）	同
哲学原論	大江清一	法政大学	
東洋哲学	福井康順	哲学概論	谷川徹三
日本思想史	同	文化政策	同
支那思想史	桑田直躬	哲学史	田中美知太郎
回教文化	大久保幸次	現代哲学	佐藤信衛
印度哲学史	坂井尚夫	日本思想史	同
梵語及び梵文学（印度文化の様相）	同	支那哲学	高田慎治
東洋哲学研究（クリアル研究）	出石誠彦	印度哲学	宮本正尊
同（荘子研究）	栗田直躬	日本思想史	富成喜馬平
同（書経研究）	相良克明	東洋倫理	石川 謙
仏典研究	碓 <sup>すきま</sup> 慈 <sup>じゆう</sup> 弘	西洋倫理	林 達夫

日本大学			形而上学		菅 円吉
哲学概論		松原 寛	哲学演習 N. Berjajev: <i>The End of our Time. E.</i>		同
哲学演習 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes.</i>		同	Brunner: <i>Der Mensch im Widerspruch.</i>		出 隆
Spranger: <i>Probleme der Kulturmorphologie.</i>		同	西洋哲学史 (古代・中世)		山本光雄
同 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft.</i>		宮津栄太郎	同 (近世)		鬼頭英一
哲学特殊講義 (プロチン)		武田信一	西洋哲学史演習 Heidegger: <i>Sein und Zeit.</i>		宇野哲人
西洋哲学史		斎藤 响 <small>しやう</small>	東洋哲学史 (支那哲学史)		山本快龍
認識論		同	同 (印度哲学史)		飯田饒一
倫理学		佐々木英夫	同 (日本哲学史)		同
美学		藤平武雄	東洋哲学史演習 (古事記)		川田龍太郎
文学概論		松原 寛	倫理学概論		飯田饒一
社会学		円谷 弘	東洋倫理学史		山本 饒 <small>ゆたか</small>
宗教哲学		石橋智信	西洋倫理学史		辻 莊一
東洋倫理		佐々木英夫	美学概論		小沢淳男
日本倫理学		巨里章三郎	倫理学		菅 円吉
西洋倫理		吉田静致	宗教哲学		
支那哲学		野村岳陽	上智大学		
印度哲学		長井真琴	道德哲学の根本問題		吉満義彦
日本思想史		高須芳次郎	演習		同
立教大学			性格学		ジームス
哲学概論		鬼頭英一	西洋哲学史		同
認識論		沢井正治	倫理学		ヘルフォーク

国学院大学	哲学概論 H. Bergson: <i>Einführung in die Metaphysik.</i> M. Scheler: <i>Mensch und Geschichte.</i>	松永 材	印度哲学 印度哲学研究	山本快龍 木村海淨
倫理学	同	同	哲学概論 西洋哲学史	樺 俊雄 斯波義慧 <small>しばぎえい</small>
哲学演習 Kant: <i>Kritik der praktische Vernunft.</i>	同	同	近世哲学 (カント演習)	波多野通敏
西洋哲学史 (古代—中世)	波多野通敏	波多野通敏	哲学研究 (歴史哲学)	樺 俊雄
同 (近世—現代)	伊藤謹一郎	伊藤謹一郎	論理学	波多野通敏
東洋哲学 (易経)	飯島忠夫	飯島忠夫	西洋倫理学史 (古代及び中世)	同
東洋哲学史 (日本仏教史)	花山信勝	花山信勝	西洋倫理学史 (古代及び中世)	太田悌蔵
倫理学概論	藤井 章	藤井 章	大正大学	
西洋倫理学史 Kant: <i>Kritik der praktischen Vernunft.</i>	同	同	宗教哲学概論	佐藤賢順
日本倫理学史	田中義能	田中義能	支那哲学史	福井康順
東洋倫理学史	藤原 鄰 <small>となり</small>	藤原 鄰	哲学概論	永野芳夫
国体学	大串兎代夫	大串兎代夫	西洋哲学史	伊藤吉之助
立正大学			スピノザの哲学	武田信一
宗教学概説	浜田本悠	浜田本悠	倫理学概説	葉上照澄
宗教学演習 (英語)	同	同	東洋大学	
宗教哲学序説 (現代宗教哲学)	守屋貫教	守屋貫教	哲学概論	務台理作
宗教哲学演習 (ヘーゲル)	同	同	東洋哲学史 第一部 (印度)	西 義雄
日本哲学	宮地直一	宮地直一	西洋哲学史 第一部 (古代・中世)	出 隆
支那哲学史	後藤基己	後藤基己	根源学の問題 (カントに於ける)	橋高倫一
印度哲学史 (後期)	木村日記	木村日記	演習 Bergson: <i>Introduction to Metaphysics.</i>	鬼頭英一

倫理学論	馬場文翁		
同志社大学		龍谷大学	
哲学概論	浜田与助	倫理学概論	宮城敏夫
哲学特講 Heidegger: <i>Fundamental Ontologie</i> .	同	江戸時代後期の思想	室田泰一
哲学演習 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft</i> .	同	Thomas Hobbes: <i>Leviathan</i> (part II of <i>common wealth</i> ).	宮城敏夫
講読 Kant: <i>Prolegomena</i> .	同	Kant: <i>Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft</i> .	川村喜久治
宗教哲学	同	西洋古代中世哲学史	山内得立
西洋古代中世哲学史	高坂正顕	西洋近世哲学史	観山雪洲
西洋近世哲学史	今井仙一	宗教哲学	長沢信壽
哲学特講 哲学の人間学	同	Hegel: <i>Begriff der Religion</i> .	同
講読 <i>Deux essais de Philosophie contemporaine</i> .	同	Max Scheler: <i>Vom Ewigen in Menschen</i> .	青地正長
哲学特講 現実と形而性と形而上性	土井虎賀壽 <small>とらかず</small>	大谷大学	
倫理学概論	大塚節治	西洋近世哲学史	朝永三十郎
基督教倫理	同	現実存の哲学	鈴木弘
倫理学演習 Kant: <i>Kritik der Praktischen Vernunft</i> .	同	認識論	同
西洋古代中世倫理学史	高田武二郎	講読 Kant: <i>Kritik der Urteilskraft</i> .	大谷芳雄
倫理学特講 アベラードの倫理思想	同	演習 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes</i> .	鈴木弘
西洋近世倫理学史	加藤謙爾	倫理学概論	立花勝
日本倫理思想史	柳田謙兵衛	講読 Henri Bergson: <i>Morality and the two Sources of Religion</i> .	同
印度哲学	羽溪了諦	Kant: <i>Kritik der praktischen Vernunft</i> .	同
支那哲学史	佐藤広治	N. Hartmann: <i>Das Problem der Willensfreiheit</i> .	同

高野山大学

- 哲学概論
- 西洋哲学史概説(後期)
- フイヒテ 淨福なる生への指教
- 西洋哲学史概説(前期)
- 実践哲学としての西田哲学

昭和十七年(一九四二)度講義一覽

〔大学名および講義題目〕

東北帝国大学

- 哲学概論
- 哲学演習 Heidegger: *Sein und Zeit.*
- 倫理学及認識論(カント以後の認識論)
- ドイツ観念論に於ける人間存在の把握
- 歴史哲学の問題
- 古代哲学史特殊講義
- 古代哲学史概説
- 古代哲学史演習 プラトン對話篇
- 同 Aristotleles: *Metaphysica.*
- 中世哲学史(連続講義)
- 近世哲学史概説

内海虎之介

同

同

園田義道

柳田謙十郎

〔担当者〕

高橋里美

同

三宅鋼一

同

武市健人

久保 勉

同

同

石原 謙

小山鞆絵

近世哲学史特殊講義

近世哲学史演習 Hegel: *Phänomenologie des Geistes.*

倫理学概論

西洋倫理学史

倫理学特殊講義 正義と愛との問題

倫理学演習 Hegel: *Grundlinien des Philosophie des Rechts.*

*Rechts.*

東京帝国大学

- 哲学概論
- 現実と現存
- 哲学演習(ヘーゲル関係文献)
- 同 Hegel: *Phänomenologie des Geistes.*
- 西洋哲学史概説(第一部)
- 同 (第二部)
- コスモポリテスの哲学
- アリストテレス研究
- 哲学演習 Platonis *Respublica*
- 知識構造論
- 知識的超越
- 哲学演習(カント解釈諸論文)
- 同 Kant: *Kritik der reinen Vernunft.*
- マールブランシュの哲学
- アウグスティヌスの哲学

同

同

高橋 稜

同

同

同

同

伊藤吉之助

同

同

同

出 隆

池上鎌三

出 隆

同

同

池上鎌三

同

同

同

桂 壽一

石原 謙

トマス・アキナス研究	武田信一	演習 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes. Die Religion.</i> (前学年のつぎ)	田辺元
東京文理科大学		哲学諸問題討議	同
哲学概論	務台理作	〔普通〕西洋中世哲学史	山内得立
歴史哲学の問題	同	同 西洋古代哲学史	同
上代人の論理	同	同 西洋近世哲学史	高坂正顕
演習 Kant: <i>Kritik d.r. Vernunft.</i>	同	〔特殊〕イデアと国家	山内得文
環境の問題	坂崎侃 <sup>ぶ</sup>	同 Aristotelesに於ける個体的なるもの	同
論理学及認識論	同	同 カント批判前期の研究	高坂正顕
講読 Hegel: <i>Philosophie d.Rechts.</i>	同	演習 Cicero: <i>De finibus bonorum et malorum.</i>	同
西洋近世哲学史	下村寅太郎	<i>Bergson: Les deux sources de la moral et la religion.</i>	
Mathesis universalisの理念とその歴史	同	広島文理科大学	
演習 Nicolaus Cusanus: <i>Vom Wissen des Nichtwissens.</i>	同	哲学概論	勝部謙造
西洋古代哲学史	田中美知太郎	実存哲学の主要問題	同
講読 プラトン主要著作解説	同	カント以後現代に至る西洋哲学	同
講読 Spinoza: <i>Ethica.</i>	同	古代中世哲学史	高田三郎
生の哲学と歴史哲学	宮島肇	アリストテレスに於ける正義論	同
京都帝国大学		ブシユケ論の展開	同
〔普通〕哲学概論	田辺元	哲学史講読	同
〔特殊〕世界の論理的構造	同	西洋近世哲学史	河瀬憲次
同 絶対知	同	哲学史演習 カント「判断力批判」	同
同 歴史と実存	高山岩男	論理学の根本問題(とくに具体的思惟の問題を中止として)	同
同 理性と実存との関係	同		

論理の基礎	同	近世哲学史(独逸観念論の哲学)	宮本和吉
支那哲学史概説	手塚良道	哲学概論	同
支那哲学史演習 荀子集解 <small>じゆんし</small>	加藤常賢	中世哲学史	田辺重三
日本思想史	清原貞雄	論理学史	同
日本精神史	白井成充	哲学演習	同
哲学講読	山田正司	同	宮本和吉
プラトン研究	皇至道	西洋倫理学史概説	小島軍造
九州帝国大学		倫理学概説	同
哲学概論		倫理学演習	小島軍造
哲学演習 Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft</i> .	四宮兼之	同	同
同 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes</i> .	同	台北帝国大学	
同 アリストテレス 形而上学	田中 晃	東洋哲学史概説(武内義雄著『支那思想史』)	後藤俊瑞
ギリシャ哲学特講(プラトンとアリストテレス)	同	東洋哲学特殊講義	今村完道
アリストテレス研究	同	同 性理学の倫理思想	後藤俊瑞
独逸唯心論派の哲学	中島慎一	哲学概論	岡野留次郎
西洋哲学史演習	同	西洋哲学演習 Hume: <i>Treatise of Human Nature</i> .	同
西洋近世哲学史	四宮兼之	西洋哲学特殊講義	同
西洋倫理学史	新開長英	西洋哲学史	同
倫理学演習	同	西洋哲学講読 Hegel: <i>Vernunft in der Geschichte</i> .	同
同 Kant: <i>Kritik der praktischen Vernunft</i> .	四宮兼之	倫理学概論	世良壽男
倫理学特講 実践の構造(法と道徳)	田中 晃	東洋倫理学概論	同
同		倫理学講読 Kant: <i>Kritik der Urteilskraft</i> .	同
京城帝国大学		西洋倫理学史	田中 晃

滿州国立建国大学

新制後期 第一学年 第一学期

国家概論

国防概論

哲学概論

文教概論

現代思潮

旧制後期 第一学年 第一学期

民族学

国民心理学

社会学

諸教概説

西方文教史

宗教論

滿蒙文化 I

同 II

西方文化 I

新旧合併 後期 第一学年 第二学期

作田

原

前田

小糸

松山

大山

千葉

中野

伊藤

金子

西元

松井

山本

高橋

安藤

儒教

建国精神

西方哲学

芸術論

日本文化

支那文化

東方哲学

文教地理

経学

同

第二学年 第一学期

神道

民族共和論

諸教概説

文教史

西方哲学

東方哲学

文教心理学

西方文化

芸術論

民族学演習

第二学年 第二学期

基礎学科

I

I

I

I

I

I

I

II

専門科目

基礎科目

専門科目

小糸

作田

前田

金原

重松

宮川

佐藤

岩間

今泉

水野

大間知

福島

河野

小糸

安倍

森下

金厚

大同知

地人論	諸教概説	基礎科目
學問論	皇學	
東方哲學 II	西方哲學 II	
思想國防	日本文化	
教育行政論	專門科目	
同		
教育方法論		
教科政策論		
特殊講義		
現代印度文化		
滿蒙文化		
哲學 I (東方)		
教育学		
支那文化		
同 第三学年		
公務論		
哲學概論		
国家原論		
文教原論		
	基礎科目	

小牧	作田	鈴木	森	河野	筒井	小野	一条	同	西元	福島	登張	高橋	福島	協和会政府大臣	森	作田	福島
----	----	----	---	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	---------	---	----	----

東方哲學 I	皇學	教化事業論 I	同 II	道德論	宗教論	日本文化	心理学	満州国立師道大学 (男子部)	實踐倫理	倫理学	國民道德	公民生活概説	社会学	哲学概論	心理学	教育学	論理学	教育法	教育行政
						演習科目				東洋 倫理学史	西洋				日本 教育史				

小系 森 和田 永井 松井 重松 安倍

一 教育実習

(女子部)

わが国民道徳の本質と其実践

(建国の必然性 詔書謹解 臣民の道)

日満関係 大東亜共栄圏の意義

国民道徳

倫理学概説

現代思想批判

満州建国の文化史的意義

我が国民道徳の普遍性

国民道徳と国家の経営

女子の任務

心理学概説

教育

教育学原論

教授法

学校学級の経営法

教育史大意

中華民国新民学院

訓育

(共通)

日本文化概説

(同)

日支文化交流史 (行政科専攻)

東亜新秩序論

(共通)

社会学

(行政科専攻)

哲学概論

(同)

思想政策

(共通)

教育行政

(行政科専攻)

法律哲学

(司法科専攻)

慶応義塾大学

哲学概論

西洋哲学史 (古代・中世)

西洋哲学史 (近世)

歴史哲学 (歴史的存在)

同 (近代歴史哲学)

西洋哲学演習 Fichte: Die Bestimmung des Menschen.

同 Fichte: Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.

Kant: Prolegomena zu einer jeden künftigen

Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können.

Kant: Kritik der reinen Vernunft.

カント哲学研究

認識論 (ヘーゲルに於ける対象と概念)

論理学概論

論理学演習 Kant: Kritik der Urteilskraft.

同 精神的存在の問題 (Nicolaï Hartmann: Das

Problem des geistigen Seinsを中心として)

同 Kant: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.

古代ギリシヤの倫理学

船田三郎

同

橋本学

船田三郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

伊藤吉之助

同

松本正夫

川合貞一

同

同

橋本学

同

近代西洋倫理思想の発達	同	高田真治	〔演習〕カント純粹理性批判	宮津栄太郎
東洋倫理			立教大学	
早稲田大学			哲学概論	鬼頭英一
哲学概論	桑木敏翼		認識論	沢井正治
西洋近代哲学	同		形而上学	菅 円吉
哲学原論	大江清一		宗教哲学概論	同
西洋哲学研究	同		宗教史概説	石橋智信
西洋哲学史	岩崎 務		科学概論	曾 <small>そね</small> 禰 武
倫理学及認識論	同		社会学概論	小山栄三
西洋哲学専攻演習	同		文化政策	松本潤一郎
ギリシヤ哲学	仁戸田六三郎		支那哲学史	宇野哲人
基督教研究	同		印度哲学史	山本快龍
宗教学	帆足理一郎		古事記（日本哲学演習）	飯田堯一
西洋哲学研究	今田竹千代		美学概論	辻 莊一
同	佐藤慶二		上智大学	
東洋哲学	福井康順		哲学概論	ヘルマン・デモリン
日本思想史	同		西洋哲学史（トマス・アクィナスの哲学入門及社会学）	同
日本大学			西洋哲学史	マックス・クレーンカイン
哲学概論	松原 寛		形而上学	ヨハネス・ジーマス
西洋哲学史概説	斎藤 <small>しよ</small> 响		認識論	ペトロ・コップ
日本の世界観	同		ヘーゲル哲学の根本問題	吉満義彦
〔演習〕プラトンの国家論	松原 寛		演習（カント純粹理性批判）	同



倫理学概説	伊藤智源	哲学概論	伊藤吉之助
西洋倫理学	同	西洋哲学史	同
日本倫理学	椎尾弁匡 <small>しいおべんきょう</small>	哲学演習	山口等樹
宗教学概論	同	東洋哲学	大谷湖峰
宗教哲学（独逸観念論を中心として）	佐藤賢順	支那哲学史	泰 <small>はた</small> 慧玉 <small>えいぎよく</small>
東洋大学		同志社大学	
哲学概論	務台理作	哲学概論	浜田与助
カント根源学	橋高倫一 <small>きょうたかろんいち</small>	哲学演習	同
演習 Bergson: c.	鬼頭英一	同 Kant: <i>Prolegomena</i> .	同
同 Nicolai Hartmann: <i>Geschichts philosophische Einleitung.</i>	同	哲学特講 Heidegger に於ける超越	同
東洋哲学史（印度）	西 義雄	同 人間学について	今井仙一
印度哲学	同	同 近世自然学の性格	沢瀉久敬
西洋哲学史（古代）	出 隆	倫理学概論	大塚節治
同	井上哲次郎	倫理学特講 基督教倫理	同
西洋倫理学史	馬場文翁	同 アペラールの倫理学	高田武四郎
倫理学概論	同	西洋哲学史	同
日本倫理学	井上哲次郎	同	今井仙一
倫理学演習	橋高倫一	東洋哲学史	佐藤広治
宗教学概論	宇野円空	支那哲学	同
神道史	田中義能	印度哲学	羽溪了諦
駒沢大学		日本精神史	魚木忠一
		倫理学演習	和田琳熊 <small>りんぐま</small>

龍谷大学

哲学概論	観山雪洲	哲学概論	鈴木 弘
西洋哲学史 (古代及中世)	山内得立	西洋近世哲学史	朝永三十郎
同 (近世)	観山雪洲	自覚に於ける往還の方向	鈴木 弘
哲学方法論	同	演習 Hegel: <i>Phänomenologie des Geistes</i> .	同
エチカとポリチカ	国分敬治	Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft</i> .	朝永三十郎
テオリア——学と生との関連	多賀瑞治	Kant: <i>Kritik der Urteilsraft</i> .	大友芳雄
講読 Aristotle: <i>De Anima</i> .	同	Kant: <i>Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft</i> .	同
同 Aristotle: <i>Ethica Nicomachea</i> .	国分敬治	倫理学概論	立花 勝
同 Hegel: <i>Logik (Encyclopädie)</i>	観山雪洲	アリストテレスに於ける徳論の構成	同
倫理学概論	宮城敏夫	講読 H. Sidgwick: <i>Outline of the History of Ethics</i> .	多賀瑞心
倫理学史	川村喜久治	演習 Max Scheler: <i>Der Formalismus in der Ethik, die materiale Wertethik</i> .	立花 勝
国民倫理学序説	柳田謙十郎	同 Kant: <i>Grundlegung zur Metaphysik der Sitten</i> .	同
東洋の倫理	宮城敏夫	高野山大学	
尊王精神史	室田泰一	哲学概論	内海虎之介
講読 Thomas Hobbes: <i>Leviathan</i> .	宮城敏夫	十九世紀哲学思想史	同
講読 I. Kant: <i>Die innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft</i> .	川村喜久治	西洋哲学演習	同
同 Hegel: <i>Grundlinien der Philosophie des Rechts</i> .	同	西洋哲学史概説	園田義道
支那哲学史	本田成之	実践哲学としての西田哲学	柳田謙十郎
印度哲学史	明石恵達	宗教学概論	赤松智城
大谷大学		美学概論	河本敏夫

関西大学

哲学概論	武内省三
哲学特殊問題研究	同
哲学演習(第一部)	同
同(第二部)	大小島真二
認識論	同
同	菅守常
論理学	同
論理・認識論特殊問題研究	同
哲学書講読	同
哲学特殊問題研究	同
西洋哲学史(古代・中世)	宮崎幸三
西洋哲学思想史(近代・現代)	下程勇吉
哲学史特殊問題研究	同
日本思想史	新町徳之
日本精神史	同
日本及支那哲学思想史特殊問題	同
東洋哲学史(支那)	同
同(印度)	高島寛成
印度哲学及仏教史	同
倫理学	武内省三
西洋倫理学	同
倫理学演習	同

神宮皇学館大学

道徳原論	新開長英
東洋倫理学史	同
同	新美寛
同	釘宮武雄 <small>くぎみや</small>
演習 K.Heim: <i>Glaube und Denken.</i>	菅 円吉
同 Pascal: <i>Pensée.</i>	同
倫理学概論	川田熊太郎
倫理学史(東洋)	内田道夫
同(西洋)	富田義彦
論理学	小沢淳男
古代及中世哲学史	出 隆
近世哲学史	山本光雄
現代哲学史	鬼頭英一
ニコライ・ハルトマン『歴史哲学序説』	同
支那哲学史	宇野哲人
印度哲学史	山本快龍
古事記(日本哲学演習)	飯田堯一 <small>いひだ</small>
美学概論	辻 荘一

注・この一覧表は、『哲学年鑑』(第一輯、第二輯、靖文社、昭和18〜19年)よりまとめたもの。

国立北京大学、満州国立建国大学、満州国立師道大学、中華民国新民学院などは、日本帝国主義の占領地や植民地に創設した日本の高等教育機関であり、日本の敗戦とともに消滅した。これらの学校が設けられたのは、皇道精神を宣揚し、日満・日華文化を融合するためであったのである。

このうち満州国立建国大学（建国大学）について少し説明しておこう。この大学の創設は日中戦争さいちゅうの昭和十三年（一九三八）であり、昭和二十年（一九四五）八月の終戦をもって消えてなくなった。この学校は、満州国建国の立役者・石原莞爾（二八八九〜一九四九、昭和期の陸軍軍人）の“アジア大学”の構想からはじまったものようだ。

学生定員は一五〇名。その半数は日系人（朝鮮人、台湾人をふくむ）、三分の一は漢族（満族、回族、その他の少数民族）、残り六分の一が蒙古人、白系ロシア人であった。建国大学は、日本の“帝国大学”にも相当する最高学府と喧伝され、そこを出れば将来高級官僚になれる途が保証されていた。学費は不要のうえ、毎月五円の小づかいがもらえたから、学費に窮する貧しい家庭の優秀な生徒が受験を勧められた。

入学者は“塾”（寮のこと）に収容され、六年間ここで過ごすことになっていた。午前中は一般教科をまなび、午後は訓練教育（軍事、武道、農事訓練）などがあった。漢族学生のあいだで関心があったのはマルクス主義の文献であった。たとえば、

艾思奇 『大衆哲学』（読書出版社、昭和十三年）

『哲学と生活』（読書出版社、昭和十四年）

マルクス・エンゲルス 『共産党宣言』

『空想より科学へ社会主義の発展』〔改造文庫〕（希望閣、昭和六年）

猪俣津南雄 『唯物史観』

永田広志 『史的唯物論』（共立社、昭和七年）

山川均 『社会主義とは何か』

河上肇 『政治学大綱』（改造社、昭和三年）

『政治経済学批判』（改造社、昭和六年）



出 隆

などは、よく秘密裡に読まれた。これらの禁書は、長春の日本人街にある書店や日本の古書店から入手した。また「研究院図書館」（社会科学関係の書物をよくそろえていた）で手に入れた（山根幸夫著『建国大学の研究——日本帝国主義の一断面』汲古書院、平成十五年五月）。

また中華民国新民学院（「新民学院」）は、昭和十三年（一九三八）北京西城国会街に開校した臨時政府の官吏養成機関であった。修業期間一カ年。全寮制。定員六〇名。第一期の入学者は、中華民国大学卒七名、清華大学卒三名、北京師範大学卒三名、東北大学卒二名、北京・朝陽・中国各大学卒五名であった。

学生隊長・陸軍少佐茂川秀和（参謀部第二課——情報・謀略担当、のち「茂川機関長」となる）が、寮内で学生と起臥をともし、学生指導をした（藤井昇三編『一九三〇年代中国の研究』アジア経済研究所、昭和五十年十一月）。なおわたしは茂川少佐の長男を識っていた。父君についてのエピソードをいろいろ耳にした。東京外国語学校に派遣され、中国語を学んだという。謀報活動についてもおもしろい話をきいた。半世紀ほどまえのことである。

#### 戦時下の哲学教師

東北帝大には、リッケルトやフッサールについて学んで帰国したのち、同大学の教授に就任した高橋里美（一八八六～一九六四、昭和期の哲学者）をはじめ、久保勉、小山朝絵、高橋譲らが教授陣を構成していた。また三宅剛一、石原謙などが講師としており、その陣容からいって、京都帝大に比肩しうる水準にたつものという。西洋哲学者では、ヘーゲルが教育研究の主要対象になっている点でも仙台は京都に似ていた。

日本におけるヘーゲル研究は、東北帝大と京都帝大で分けあっている観があった。小山教授のヘーゲル論文は、その博識と洞察において人を啓発させるものである。が、同人はあまり物を書かないため、その学殖が日本哲学界の共有財になっていないという（田間義一著『現代哲学者論』育英書院、昭和十八年一月）。

日本の哲学界の教祖的存在ともいえる桑本厳翼が去ったあとの東京帝大の哲学科の中心的な教授は、伊藤吉之助（一八八五～一九六一、昭和期の哲学者、敗戦後北大、中央大学の各文学部部長を歴任）と出隆（一八九二～一九八〇、昭和期の哲学者、のち青山学院大、東洋大の各教授を歴任）である。伊藤教授は『哲学

小辞典増訂版』（岩波書店、昭和五年三月）を編さんしたのち、「鳴かず飛ばす」（活躍することなく、人から忘れられている）といった状態であった。出教授は、戦時ちゅう自由主義的たちばをとり、戦後日本共産党に入党した人物であるが、古代ギリシャとりわけアリストテレス研究の第一人者であった。恩師桑木教授にならって随筆集『英国の曲線』（理想社出版部、昭和十四年六月）などを執筆したが、伊藤・出教授とも、どんな哲学を考えているのか<sup>(96)</sup>、余人にはわからなかった。学生の期待は、助教授・池上鎌三（一九〇〇～五六、昭和期の哲学者）により多くかけられた。

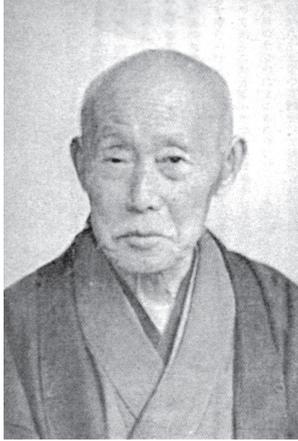
東京文理科大学には、西田幾太郎の門下で昭和七年（一九三三）台北帝大より教授として着任した務台理作（一九〇〇～一九七四、大正・昭和期の哲学者）がいるほか、数理哲学の研究者・下村寅太郎（一九〇二～九五、昭和期の哲学者）や非常勤講師として田中美知太郎（一九〇二～八五、昭和期の哲学者、のち京大教授）や宇井伯壽<sup>はくじゅ</sup>（一八八二～一九六三、大正・昭和期のインド哲学者、仏教学者）、大西克礼<sup>よしのり</sup>（一八八八～一九五九、大正・昭和期の美学者）などが出講した。

務台理作は西田哲学の逸材のひとりであり、現象学などを学んだ。戦時中は中立的態度をとり、戦後マルクス主義に接近したり、平和運動にも関心をよせた。すくなくならず手堅い論著をあらわしたが、どれもなんとなく魅力に乏しいとされた<sup>(97)</sup>。務台は昭和二十六年（一九五一）春の最終講義を「わたしの文理大における講義は、ハイデッガーに始まり、ハイデッガーに終わった」といってしめくくって停年退官した（『東京教育大学百年史』日本図書文化協会、昭和五十三年七月）。下村寅太郎は自著『自然哲学』や『科学史の哲学』で学界の推賞をえた。田中美知太郎はギリシヤ哲学を専門とし、とくにプラトンの研究で知られ、宇井伯壽はインド思想の大家であった。東京帝大に比肩しうる哲学者の温床は、東京文理科大学であった。

文理大の哲学教室は、太平洋戦争に突入すると、研究活動は一時低調化した<sup>(98)</sup>が、敗戦後早々に立ちなおりをみせた。

池上は論理学や認識論を専門とし、フッサール哲学の日本への紹介者のひとりであった。京都学派の中心をなす京都帝大には、田辺元を中心に高山岩男、山内得立、九鬼周造、野田又夫などが講壇を占めていた。わが国の哲学界の双壁をなすものは西田幾太郎と田辺元である。西田が去ったあとのその哲学の継承発展者は、田辺元であった。高山教授は、民族とか世界史に興味をもち、『世界史の哲学』（岩波書店、昭和十七年九月）によって、歴史哲学の領域を開拓したが、学風において西田幾太郎につらなう人であったとされる<sup>(98)</sup>。

山内得立<sup>やまのちとせりゅう</sup>（一八九〇～一九八二、大正・昭和期の哲学者。東京商大をへて京大、龍谷大教授を歴任）は、現象学・実存哲学・ギリシヤ哲学な



川合貞一



山内得立

どの研究につとめ、『現象学序説』（岩波書店、昭和四年）『存在の現象形態』（岩波書店、昭和五年）『体系と展相』（昭和十二年）『人間のポリス的形成』（昭和十四年）『ギリシャの哲学』（昭和二十二年）『実存の哲学』（昭和二十三年）などの論著を発表した。

九鬼周造（一八八八〜一九四一、大正・昭和期の哲学者）は、実存哲学的なちばから時間論や偶然論を論じ、「日本のハイデッガーともいえる現象学派の哲学者」であった。大正十一年（一九二二）から昭和四年（一九二九）まで長期にわたりフランス・ドイツに留学し、のち京大に招かれた。当初、大衆性を欠いていたため、世間（<sup>100</sup>）にあまり知られなかったが、その語学力、その博識、その天才的な頭脳からいっても、日本哲学の鬼才であった。が、若死にした。

野田又夫（一九一〇〜二〇〇四、昭和から平成期の哲学者。のち京大教授）は、当時大阪高校教授であり、哲学科へは非常勤講師として出講した。デカルトの翻訳者・紹介者として知られた。当時日本の大学に多かったとされる、人物も出来ていなければ、学殖もない痴呆教授にくらべると、野田講師の学識はじゅうぶん評価されるとい（<sup>101</sup>）。

ほかに京都の講壇で忘れてはならぬ人物に天野貞祐（一八八四〜一九八〇、大正・昭和期の哲学者）がいる。京大で桑木敵翼のもとでカント哲学を学んだ。七高、学習院教授をへて、昭和六年（一九三一）京大教授となった。天野といえはカントの純粹理性批判の翻訳でその名を知られているが、『道理の感覚』（昭和十二年）は、自由主義の由をもって絶版になった。

その他の官立大学にも数多の語るべき学者がいるが、いまはそれにふれず、こんどは私立大学の教師について語ってみたい。

慶応は当時あまり哲学が盛んとはいえなかったが、かつて唯物論反対に大童の活躍をした川合貞一が有力教授として（<sup>102</sup>）いる。川合貞一（一八七〇〜一九五五、明治から昭和期にかけての哲学者、慶応義塾大学教授）は、岐阜県大垣市のひとである。慶応義塾大学部文学科を卒業後、新潟師範学校に奉職し、一年有半つとめたのち、母校に就職した。明治三十二年（一八九九）夏、義塾第一回留学生として渡欧し、ドイツに四ヶ年滞在した。この間イエナ大学でオイケンやリープマンに哲学を、ライプツヒ大学においてはフォルケルトやヴントについて、哲学や心理学を学んだ



金子馬治

『哲学』第三二号、三田哲学会、昭和三十一年三月。

明治三十六年（一八九九）春に帰国するや、哲学・心理学・教育学・美学・社会学・ドイツ文学など、多岐にわたって講じた。

早稲田には特有の哲学的伝統があり、金子馬治（一八七〇～一九三七、明治から昭和期の哲学者、文芸評論家）や田中玉堂（一八六七～一九三二、明治・大正期の哲学者、評論家）の遺した自由創造の文化主義的学風がある。<sup>(103)</sup> 早稲田における哲学の講義は、大西祝にはじまる。明治二十四年（一八九一）九月から、大西は東京専門学校において、哲学概論・哲学史・倫理学・美学・心理学等を講じはじめた。この大西のもので哲学を学んだのが、金子馬治である。

また早稲田に哲学科が設けられたのは明治三十二年（一八九九）である。

金子の号は筑水<sup>ちくすい</sup>。信濃上田のひとである。明治二十三年（一八九〇）東京専門学校文学科を抜群の成績をもって卒業した（『理想』第七五号、理想社出版部、昭和十二年七月）。かれは卒業と同時に講師となり、明治三十三年（一九〇〇）より三カ年ドイツに留学し、ヴィルヘルム・ヴント（一八三二～一九二〇、ドイツの心理学者、のちライプチヒ大学哲学教授）に師事し、帰国後早大教授となった。早稲田の哲学科の育ての親とすべき人であった。欧米の新思想（ベルグソン、ニーチェなど）の紹介と評論活動をおこなった。ちなみに、社会運動家・佐野学は、金子の長女・照子と結婚した。「仁戸田の六さん」こと仁戸田六三郎は、昼間から酒のにおいがプンプンするような教師であり、<sup>(104)</sup> 漫談調の講義（宗教学）をしたことで有名だが、書いたものは人にまじめな印象をあたえた。ほかにデューイら英米の哲学の紹介に努めた帆足理一郎（一八八一～一九六三、大正・昭和期の哲学者）がいる。かれは帝国大学におけるドイツ流の哲学を専制政治に奉仕するものとして批判した。非常勤講師としては、東大の桑木巖翼がながく教鞭をとった。

法政や日大や立教その他の大学にもすぐれた教師がいるが、東洋大学のように個有の哲学の伝統はない。法政大学には谷川徹三（一八九五～一九八九、昭和期の哲学者、のち同大学総長）のように評論家として一家をなした京都学派につらなる教授やギリシャ哲学の田中美知太郎、ベルグソンの「笑」の訳者で評論家・林達夫（一八九六～一九八四）などがおり、のちに戸坂潤や三木清など、その才能や発想力から他大学の教師と比べてけっして遜色がない、優秀な教師が教授陣に加わった。

日大には松原寛教授（一八九二〜一九五〇、戦後公職追放）が同大学の哲学科の総帥としていたし、<sup>(105)</sup>他に社会学者の円谷弘とともにユニークな学風をつくっていた。立教には鬼頭英一（一九〇八〜一九六九、のち九大教授）をはじめとし、宇野哲人（一八七五〜一九七四、大正・昭和期の中国哲学者、東大教授）などが特有の哲学壇を形成していたが、いまひとつ迫力がない。

立正大学の哲学科にもすぐれた人材が多くいた。この時期の哲学科の構成は、

#### 西洋哲学

#### インド哲学

#### 宗教学

から成っていたが、制度として規定されたものではなく、三つの専門領域とそれを担当する教授がいたということである。<sup>(106)</sup>

浜田本悠教授（一八九一〜一九七一、宗教学者）は、若き日に宗門よりドイツに留学し、帰国後は予科でドイツ語を担当した。本場仕込みのドイツ語であったから発音もよく、また訳積もすぐれていた。この時代、「宗教学」は、仏教学者から正体不明のものとしてひどく冷遇されていたが、浜田はそれを講じた。守屋貫教授も第一次大戦後に留学したが、ヨーロッパにおいて珍本のルター全集を購入し図書館に収めた。守屋は宗門出身の温厚篤実な教授であったという。

木村日記（一八八二〜一九六五、インド哲学者、カルカッタ梵語大学にまなぶ）は浜田本悠とならんで立正の名物教授であった。木村は堂々たる風さいをし、インドのカルカッタ大学で教授を務めるといった珍しい経歴の持主であった。サンスクリットでインドの学者と会話ができれば本物でない、というのが持論であった。京都学派の樺俊雄は、当時新進の哲学者であり、哲学概論・論理学・哲学史などを教えたが、講義は明快であった。三木清も戦中の一時期に講師として来校したという。

波多野通敏教授は、昭和七年（一九三二）左翼系の哲学者・三枝博音が辞職に迫いやられたとき、後任として就任した。斯波義慧は東大教授であり、立正へは非常勤講師として出講した（『立正大学の二二〇年』学校法人立正大学学園、平成四年十月）。

同志社大学には浜田与助教授がおり、同人が退職後の哲学専攻の最古参教授は、中世哲学の高田武四郎教授だけとなった。高田は昭和六年（一

九三一)に哲学科を出ると、直ちにミュンヘン大学に三カ年留学し、中世哲学を専攻した。帰国後は、西洋倫理学史や中世哲学史を講じ、数多の論文を発表した。地味な学者肌の人であったという(『同志社九十年小史』学校法人同志社、昭和四十年十一月)。

太平洋戦争が勃発するや、社会の各方面においても大きな変革がもたらされた。哲学界にとってもまさに受難の時期であった。戦時下の各大学における哲学講義の評判はどうであったのか。この点になると、なかなか情報は十分とはいえない。国家が戦時体制に入り、列強相手の総力戦ともなれば、ゆう長に構えるわけにはゆかず、学校の講義や授業の内容はどうであれ、大して問題ではない。

開戦の翌年——昭和十七年(一九四二)になると、社会とか国家とか国体というものがこれまでになく重要なものとして考えられるようになった。近世国学に関する研究が盛んになった。文学方面では万葉集の研究がさかんとり、また日本精神の哲学や日本的世界観の論述が顕著となった。<sup>(107)</sup>

大学における哲学講義の評判については、東京文理科大学(所在地—東京市小石川区大塚窪町)のケースがつかえられている。学生のあいだでもっとも人気が高いのは、務台理作教授の哲学概論と綿貫哲雄の社会学概論であった。務台は熱意のこもった学究的講義で好感がもたれ、綿貫はユーモアをまじえた話術でもって学生を魅了したようだ。共通科目では、東北帝大の村岡典嗣<sup>つねつぐ</sup>教授の国体論が、時局講座としてかなり期待をもたれた(昭和十七年版『帝国大学年鑑』帝国大学新聞社、昭和十六年十二月)。

昭和十七年(一九四二)になると、文部当局が共栄圏内の思想・文化の指導機関として機能を発揮するようになった。同年十二月、内閣情報局の指導にもとづき「大日本言論報国会」が設立され、戦争に協力的な文化人・知識人ら約一〇〇〇人が参加した。昭和十八年(一九四三)八月になると、学徒勤労奉仕が本格化した。大学における研究目的は、閣議により戦争遂行のためになるものに限定された。同年十月二十一日——文部省の主催による、「出陣学徒壮行会」が、明治神宮外苑陸上競技場(現・国立競技場)において雨のなか挙行された。

東京とその近県七十七校からあつまった出陣学徒は、東条英機首相、岡部長景文相らの閲兵をうけ、市中を行進し、宮城前広場で解散した。昭和二十年(一九四五)になると、学徒勤労報国隊が結成され、学徒は工場・鉱山・農村などへ勤労奉仕にかりたてられ、学校での授業はじょじょに姿を消していった。

戦時中、思想や言論の統制がきびしくなるにつれて、いわゆる「京都学派」の哲学者らも積極的に戦争に協力していった。昭和十七年(一九四二)『中央公論』新年号は、座談会記事「世界的立場と日本」(四三頁)をのせたが、出席らは左記の哲学者らであった。

**↓ 総力戦の哲学 ↑**

**座談會**

高坂正顯 鈴木成高 高山岩男  
西谷啓治

昭和十七年十一月十四日  
於東京帝國山本館

— 54 —

- ★ 總力戦の歴史的背景
- ★ 總力戦の概念
- ★ 總力戦と全陸軍
- ★ 總力戦における平時戦時
- ★ 思想戦の意義
- ★ 思想戦における指導と納得
- ★ アメリカと總力戦體制
- ★ 前家の指図
- ★ 總力戦の軍事的特徴
- ★ 總力戦と宣傳
- ★ 共産圏と總力戦

- ★ 東亞圏と東亞の管理
- ★ 東亞の理念と歴史
- ★ 米英の意向と矛盾
- ★ 共産圏と東亞の統一
- ★ 國防國家の世界史的根據
- ★ 共産圏の歴史的發展
- ★ 日本の主權と指導性
- ★ 主權と指導性
- ★ 總力と總力
- ★ 總力と總力
- ★ 總力と總力
- ★ 總力の集中

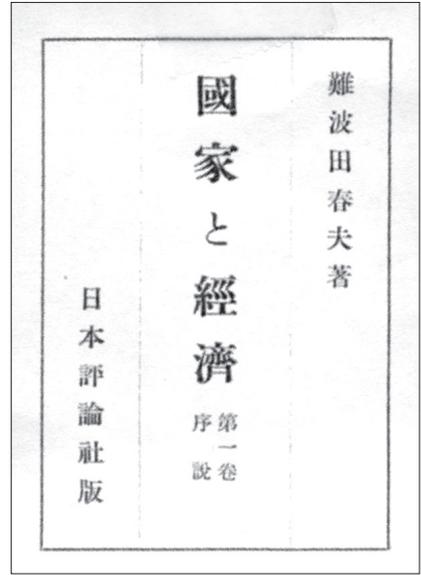
總力戦の歴史的背景

座談會記事「總力戦の哲学」  
『中央公論』昭和18・1。

- 高坂正顯 (一九〇〇〜六九、大正・昭和期の哲學者。昭和十五年(一九四〇) 京大教授。敗戦後、公職追放)
- 鈴木成高 (一九〇七〜?)、昭和期の哲學者。京大助教授
- 高山岩男 (一九〇五〜九三、大正・昭和期の哲學者。昭和十三年(一九三八) 京大助教授。敗戦後、公職追放)
- 西谷啓治 (一九〇〇〜九〇、昭和期の哲學者。昭和十年(一九三五) 京大助教授。敗戦後、公職追放)

この四人は歴史哲学上の問題について議論した。東亞共栄圏といった新しい世界にたいして、日本はどういう意味をもたされているか。日本はどのような意味を実現せねばならぬか、といった問題が提起された(高坂)。世界史の哲学が要求されているのがいまの日本であり、哲学が歴史的要因に變動するものにしたいては方向をあたえる学問となっている、といった発言があった(高坂)。また国史を世界史的観点から見るとの意見もあった(高山)。かれらは、その後も二度ばかり座談會に駆りだされ、「東亞共栄圏の倫理性と歴史性」(『中央公論』四月号、昭和十七年四月)「總力戦の哲学」(『中央公論』一月号、昭和十八年一月)などの論説において、侵略戦争を正当化し、戦争賛美と国家主義を鼓吹した。ことに高山岩男は、「總力戦と思想戦」と題する論文を執筆し、『中央公論』(三月号、昭和十八年三月)に発表した(二一〜二八頁)。著者のいう「總力戦」とは、武力戦・經濟戦・政治外交戦・思想戦などから成り、その目標は、統一的な總力における究極の勝利をうることになるという。大東亞戦争は、東亞共栄圏の建設といった事業にむすびついており、米英両国を相手とする總力戦は、東亞共栄圏を綜合主体とするものに進まねばならぬ、という。

おなじ京都学派のひとり樺俊雄(一九〇四〜一九八〇、立正大学教授)も「大東亞戦争の世界史的意義」と題する小論を『中央公論』(三月号、昭和十七年一月)に発表し、大東亞戦争とアジアにおける新秩序建設の意義をあきらかにした。樺によると、大東亞戦争の根本的要因は、英米の帝國主義的勢力であり、それを



難波田春夫著『国家と経済第一卷序説』  
(昭和13・2)。

アジアから駆逐することが戦争の目的だという。大東亜戦争の世界史的意義とは、  
さいごの勝利を得るまでこの戦争を完遂することだという。  
樺はいった。——新しい世界の秩序の樹立は、英米によって維持された旧世界  
の秩序を打倒することによってのみ可能だと。樺もまた積極的に戦争遂行に協力  
したひとりであった。戦争に協力したのは京都学派にかぎらず、東大の学者のな  
かにも時局便乗者がいた。

難波田春夫（一九〇六～一九一、昭和期の経済学者）

平泉 澄（一八九五～一九八五、大正・昭和期の歴史学者）

東大経済学部の難波田助教は、国家主義的経済学に傾斜し、ナチスの哲学と経済学の知識とにより、産業報国運動の理論的指導者となった。<sup>(108)</sup>  
かれが執筆した『国家と経済』（日本評論社、昭和十三年二月）は、戦争ちゅうベスト・セラーになった。大内兵衛は同人を評して、「難波田君  
も東大が生んだ秀才であった。（中略）とくにドイツのヒトラー御用哲学を十分に研究し、それを広範な経済学的知識と混ぜ合せて軍国日本の食  
膳にささげたのが、かの『国家と経済』であった」とのべている（大内兵衛『経済学五十年 下』東京大学出版会、昭和三十四年六月）。

平泉澄は、戦前の皇国史観の中心人物であった。昭和十年（一九三五）東大教授となり、日本中世史を講じた。国粹主義に傾き、皇国史観をも  
ち信奉者をひろげるため、「朱紅会」（右翼思想団体）を学内につくった。戦争政策の遂行にすくなく影響をあたえた。が、終戦の年の十月、  
辞表を大学に提出した。

このように戦時ちゅう積極的に国策に協力した者がいた反面、石川三四郎（一八七六～一九五六、明治から昭和期の社会運動家、無政府主義  
者）のように農作をいとむ者、服部之総（一九〇一～五六、昭和期の歴史家、戦後日本共産党に入党、法政大学社会学部教授）のように、昭和  
十三年（一九三八）花王石けんに入社し、上海にわたり嵐の時代を耐えた者もいる（『図説 昭和の歴史 ⑧』集英社、昭和五十五年五月）。

戦時下の学生らのくらしぶり。

学生は官立・私学を問わず、約七〇パーセントが、親のすねをかじる階級であったようだ。しかもこの階級の台所事情は、物価の昂騰により、くるしくなっていた。東大がある本郷通りで多くみかける光景は——ゲートル(きゃはん)（脚絆）をまき、教練服にカバンをかかえた学生らである。かれらは時に広場や運動場で銃剣術の猛訓練をうけさせられ、「エイー」とか「ヤァー」といった奇声を発していた。

書物のふるさと——本郷の本屋街はどうか。戦争になっても売れる本は、大して変らない。学生は授業や勤労奉仕のあい間に本屋をひやかすのだが、哲学書は売れる傾向があった。西田幾太郎門下の京都学派のものが圧倒的人気があったようだ。

勤労学徒のあいだでいちばん読まれたのは文学書であり、ついで政治経済の本がよまれ、歴史書がこれにつづき、つぎに哲学書・日本精神書、宗教、道徳、戦争といった順であった。哲学書や日本精神の書をよむものは、読書水準の高い学生であった。かれらは労働に従事した疲労のなかに、ほんのわずかの公休日が訪れたときのほっとした思いの中に、職場の片隅やせまい宿舍の暗い電灯の下で、断片的な時間を惜しみながら本をひろげて読んだのである（早稲田第二高等学院教授・植田清次「勤労学徒の読書傾向」〔言論報国〕第三卷第一号所収、昭和二十年一月）。

京大はむかしもいまも静かな学園である。ここで約六千名の学生が学んでいた。大学における教育と研究は、原則として戦争の遂行にかなうものに限られていたから、経済学部の講義表をみても、東亜共栄圏建設や新秩序の樹立をうたう経済論がずらりと並んでいた。

大東亜共栄圏の金融主軸としての 我國の地位	小島教授
東亜社会政策	石川教授
東亜経済政策原論	谷口教授
東亜資源の問題	蛭川教授
東亜金融論	松岡教授
東亜経済思想史	穂積助教授

（昭和十九年度版『帝国大学年鑑』帝国大学新聞社、昭和十八年九月）

学生はすべて「京大報国団」に加入していた。かれらは防空や勤労奉仕に駆りだされるのだが、最近では京都府の防空貯水池(109)の工事に率先して

出ていた。戦時中、街のレストランから一膳メシ屋、喫茶店、飲み屋にしても、ろくなものが出ない。学生の大半は、下宿やアパートの住人であるから、食を戸外でとる必要があった。その苦勞はたいへんなものであった。学生食堂はどんなものを出したのか。そこで出される飯は、豆かすまじりの高粱（モロコシ）飯と汁だけであった。<sup>10)</sup>

その学生食堂のそばに黒板がかかっていて、不用になった本の売り買いをあっ旋していた。買いたいもの——『日本哲学史』『善の研究』<sup>11)</sup>等々。大東亜戦争が進行するなかで、象げの塔のなかの大方の哲学者は何をしていたのであろうか。かれらは時勢に迎合したものの、世の動きにまったくむとんじゃくであり、戦争賛歌の行列に加わらず、ただ書齋や研究室で研究に沈潜していた者に二分されえようが、公然と戦争を否定する言を発した者がほとんどいなかったことは事実である。暗く沈うつな世の中ではあったが、「哲学会」の例会や公開講演会はと切れることなく開かれた。「カントの夕」は、昭和十九年（一九四四）四月二十二日（土）午後六時半より、東大の山上会議所で開催されたが、晩さん会は取りやめた。

演題 トマス・トマス（Thomas）の「Transcendentalismus」……武田信一。

やがてわが国は、二発の原子爆弾により連合国側に完全に打ちのめされ、無条件降伏することにより終戦を迎えた。が、その代償はあまりにも大きかった。

終戦とともに昨日までの天皇制絶対主義の国家は崩壊し、面目を新たに民主主義的な文化国家として再出発することになった。

#### 八 戦後日本の哲学界。

終戦後のわが国の哲学界は混乱と虚脱の時代をむかえた。<sup>12)</sup> 右翼的な「日本哲学者」は、舞台から姿を消した。戦前戦後を通じて権力になびかず、志操を守り、節義を変えなかった者は、ほんのひとにぎりの人間だけだった。戦争は終そくしたが、学生層において哲学が流行した。<sup>13)</sup> 戦前の国策推進派や時局便乗主義者のなから、とくに京都学派の学者らのなから、敗戦を機に、哲学的反省にたち、改めて国家理念や平和・文化国家、政体や天皇制、民主主義などに関して新たな論陣を張るものが出てきた。かれらは幾多の新たに誕生した啓蒙的雑誌に論文を発表した。たとえば

- 鈴木成高 「民主主義と世界史」(『民望』昭和二十一年三月)  
 柳田謙十郎 「文化国家への道」(『人間』昭和二十一年二月)  
 高坂正顕 「政治概念の検討」(『民望』昭和二十一年五月六月)  
 西谷啓治 「近代精神の課題」(『人間』昭和二十一年十二月)  
 同 「日本の精神的伝統」(『新人』昭和二十一年九月)  
 金子武蔵 「大戦の人倫的反省」(『民望』昭和二十一年二月)  
 同 「日本人の使命について」(『世界』昭和二十一年五月)  
 同 「家族国家論」(『世界週報』二十六卷、三一、三二号)  
 和辻哲郎 「歴史的自覚の問題」(『展望』昭和二十一年七月)  
 同 「世界的視圈の成立過程」(『展望』昭和二十二年三月以後連載)<sup>(14)</sup>

府立高校教授・寺沢恒信によると、京都学派の人びとの欠陥のひとつは、批判的精神が欠けていたことだという。かれらはそのときそのときの政治的スローガンを鵜呑みにし、これにもっともらしい理屈をつけることを自己の使命と心得ているという。この事大主義的(定見なく、強いに従う)な迎合性によって、かれらはかつて「聖戦」というスローガンに、世界的な意義や形而上学的意義をあたえた。

敗戦後のかれらの態度はどうか。敗戦後に「文化国家の建設」といったスローガンが現れると、たちまち無批判にこれに便乗した。かれらは文化国家というスローガンのお先棒をかつぎ、民主主義的な国家の本質をあいまいにし、民衆のあいまい化に一役かっている、という(寺沢恒信「哲学界の回顧と展望」(『青年文化』三月(二月合併)号所収、創生社、昭和二十二年三月)。

京都学派——京都歴史哲学学派の人びとは、戦時ちゅうジャーナリズム界で華々しく活躍したのであるが、独善的自己陶醉からさめたのち、戦争を反省しつつ、終戦後ふたたびジャーナリズムに起用されるに至った。かれらの活動は、学問的というより啓蒙運動にむけられた。<sup>(15)</sup>

終戦後のわが国の思想界における顕著な現象は、国民が言論の抑圧から解放されるや、左翼思想(マルクス主義)が復活したことである。<sup>(16)</sup>そして「唯物論研究会」や「社会科学研究会」が再び組織され活動をはじめ、また左翼系の刊行物が日の目をみたことである。つい昨日まで全体主義





昭和二十四年（一九四九）度講義一覽

〔大学名および講義題目〕

東京大学 哲学科

西洋哲学史概説（第一部―ブシケ―の研究）  
 哲学演習 プラトンの「国家」  
 哲学概論 個体認識（前学期のつづき）

〔担当者〕

教授 出 隆

哲学演習	Kant: <i>Kritik der reinen Vernunft</i> .	教授	池上謙三
西洋哲学史概説（第二部―カントの理論哲学）		助教授	岩崎武雄
哲学演習	Hegel: <i>Enzyklopädie (Logik)</i>	同	同
市民社会の論理		講師	山崎正一
哲学演習	Hume: <i>A Treatise of Human Nature, Vol. 1: of the Understanding.</i>	同	同
哲学演習	Spinoza: <i>Ethica.</i>	講師	桂壽一

むすび

日本において西洋哲学（キリスト教哲学）がポルトガル人の神学生のためにはじめて講じられたのは、いまから約四二〇年前の天文十二年（一五八四）のことであった。場所は府内（大分）の学院においてであった。ついで日本人がはじめて神学や哲学の講義をうけたのは文禄三年（一五九四）のことであり、天草の河浦にあった学院においてであった。

純然たる西洋哲学に日本人がはじめて接したのは文久二年（一八六二）ごろであり、著書調所に勤務していた西周が英書によって英文の哲学書について学び、その講義案の作成にとりかかっていた。いまから一五〇年ほど前の話である。したがってわが国の西洋哲学の歴史といっても、せいぜい一世紀半ほどの歴史しかなく、まだ短い。

日本においてふつう「哲学」というと、「西洋哲学」のことを指すのである。インド哲学や中国哲学は、別にそれぞれ一枚看板をかかげているからである。<sup>119)</sup> 明治以後、わが国の哲学界は西洋哲学の流入がはじまると、さまざまな外国思想の移植と消化に忙しく、日本的な性格をもつ独創的な研究を生みだすには至らなかった。時代の推移とともに日本の哲学者は世界のあらゆる哲学にふれると、その移植につとめた。かれらは外国の主要な哲学や哲学者についてはほぼ何でも知っていたから、百科全書家のようなふうでもあった。戦前のことだが、ある有力大学の哲学科の主任教授は、日曜日ごとに日本橋の丸善を訪れると、新刊書の買入れに努めた。が、かれは購入した哲学書のうち、もっとも貧弱な書物に匹敵するほどの本を書くこともなかった。<sup>120)</sup>

これは西洋人の跡ばかり追っているうちに、ついにじぶんの方向と独創する力を見失い、百科全書的存在になりさがった例である。由来、外国文学、経済学、法学、政治学、哲学、言語学、社会学、歴史学にせよ、およそ外国から海をこえて渡ってきた学問のすべてを料理し、消化吸収していたのがアカデミー学者であった。

中にはわが国の西洋哲学のことを評して、「紹介哲学」とか「トランク哲学」と呼ぶ者もいた。<sup>(12)</sup>洋行して持ち帰る大きなトランクの中の種本から、新渡の哲学が生れてゆくからである。ともかく日本の学者は、西欧的材料を日本的方法でもしくは我流でそれをうまく調理すると、一品料理に仕上げるのが得意であった。

西洋哲学をただ輸入し、それ吸収消化するだけでは、「生吞活剥」(他人のものをこっそり使う、生のままのみ込む)にすぎないのである。明治初期からこんにちまで哲学にかかわる数多の人びとが輩出したが、かれらの多くは幾多の学説を紹介し、祖述した。かれらの生産物の多くは、紹介や祖述——すなわち、翻訳的な思想上の直輸入にとどまり、そこに何らの独創のひらめきはみられなかった。

日本の一世紀半にわたる哲学思想界において、真の哲学者といえる者は、西田幾太郎を以て一人もいなかった(金子白夢「西田哲学に就て」『理想』所収、昭和四年七月)。日本の哲学に欠けていたものは、自主性であった。日本の哲学者は、長期間ドイツ哲学に年奉公してきた。哲学の論文といえは、何か高尚なものに聞えるが、その中味たるやドイツの哲学書からの引用で充たされ、日本人が書いたものからの引用はなかった。日本人——同胞が書いたものは引証に値しないとの考えから出ているようだった(小松撰「『東洋的無』への袂別」『学生評論』第三卷第二号所収、学生書房、昭和二十一年十一月)。

受け売りのな啓蒙的西洋哲学の模倣から脱却して、日本精神のたちばから哲学する——思索の方針を開拓する——日本的な哲学をめざす——うごきが盛んになったのは、大東亜(太平洋)戦争が勃発して翌年の昭和十七年(一九四二)あたりからである。戦争により、欧米からの哲学書の輸入が跡絶えたこともあずかって力があった。大東亜建設のための思想的基礎をもとめるという要請とが哲学界をムチ打った(鬼頭英一「哲学」、『帝国大学年鑑』所収、昭和十九年度版)。

日本主義や日本精神を鼓吹する声にに応じて現われたのが、従来のわが国の哲学のあり方にたいする反省である。日本に固有の哲学がそれまであったにせよ、貧弱なものであった、といった見解をとる者は多かった。日本の哲学には、学問的、体系的なものが無いというのが常識的であり、とても西洋のものにたち打ちできぬものであった(斎藤响「日本哲学者の取扱ひ方に就て」『思想と文学』所収、昭和十五年二月)。

こんにち日本の知識層は、西洋哲学の「毒酒に沈酔して」いる、といい、その西洋哲学の垣根から出ることを絶対条件としたのは、西田長男（一九〇九〜八一、国学院大学講師、のち名誉教授）であった（『西洋哲学の繫縛』<sup>けいばく</sup>『公論』八号所収、第一公論社、昭和十八年八月）。また日本の哲学者は、自我を追求する西洋哲学の思潮に毒され、その思想は国家と遊離している、といい、じぶんの本然の思想を築くことを唱導したのは藤田徳太郎（一九〇一〜四五、大正・昭和期の国文学者）である（『篤胤と須多因』<sup>スライ</sup>前掲誌所収、昭和十七年六月）。

わが国の西洋哲学の特徴は、何よりもそれが外国哲学を紹介したり、模倣したり、自家棄ろう中のものにしたものであり、日本の性格をもたぬものであった。明治初年の文明開化の幕あげと同時に、さまざまな新旧の西洋思想がかなりのスピードでつぎつぎとわが国に入ってきた。明治・大正・昭和の各時代の哲学界には、つねに一定の主潮なり流行があった。概してそれはドイツ哲学に依存しての流行であった。<sup>(12)</sup>

わが国は西洋哲学の後進国であったが、西田幾太郎や田辺元は、この流行を超えて日本人の哲学形成のためにまい進し、日本を代表する哲学の樹立に貢献した。

敗戦後の哲学界は、まことに多事多難であったという。敗戦といった傷は、国家ばかりか思想界も切りさいた。わが国では、占領軍であるアメリカの主導のもとに民主主義革命が進行した。敗戦後の哲学の政治的性格はいっそう鮮明になり、哲学者らは観念論と唯物論の二つの陣営に分裂した。終戦直後のわが国の哲学界における顕著な現象は、えせ理論家、えせ哲学者らが厚顔無恥にもジャーナリズム界でふたたび活躍をはじめたことである。かれらは研究室や自宅に閉じこもって沈黙を守るどころか、デモクラシーに便乗して、言論活動を再開した。

こういった無節操のインチキ学者らは、戦前戦時を通じて日本の軍事ファシズムの侵略戦争遂行を直接もしくは積極的に支持し、促進した。かれらは文化的戦争責任者たる自覚がない人間であり、すくなくとも思想家や哲学者の呼称をうけるに値しない、と指弾したのは一高教授・真下信一であった（『今年の思想界に望む』『朝日新聞』昭和二十二年一月六日付）。

昭和期の歴史家・羽仁五郎（一九〇一〜八三）は、敗戦の翌年（昭和二十一年）「日本イデオロギイ論」〔『思潮』第一卷第一号所収、昭森社、昭和二十一年三月）において、為政者の悪しき意図を知りながら、それに迎合するような行動をとった人びと（学者、思想家、評論家ら）をやり玉にあげた。これらの連中は、昨日までわれわれ民衆にむかって、どんなことを説いていたか、思い出すべきだという。もしかかれらが反省をし、自己批判しないとしたら、われわれ人民大衆がそれをするしかないという。

この種の無節操の手合いは、戦争時代に売った名をいまの平和民主主義の時代に、売りなおそうとしているという。かれらはこんにちラジオや新

聞や雑誌や講演会などにおいて、『民主主義』を説いているが、戦争中どんなことをいっていたのか……。

変節者集団といえば、京都学派の一部哲学者を想いだすが、かれらの支柱となっているのは西田・田辺哲学（日本の観念論哲学）という。古田光によると、京都学派の時局便乗者らは、あの難解な表現やひとを煙にまくような複雑な論理の技巧をたくみに利用して、座談会において、戦争犯罪への道、破滅への道を説いたのである（羽仁五郎）。

戦時中、中立的自由主義のたちばをとった人びとには——務台理作、下村寅太郎、金子武蔵、野田又夫、下程勇吉らがあり、かれらは現実から目をそらしていた。また変節組となると、枚挙にいとまがないが、羽仁が例挙しているのは、左記の人びとである。

- |   |  |
|---|--|
| 平野義太郎 <small>（一八九八〜一九八〇、昭和期の法学者）</small>    | 加田哲二 <small>（二八九五〜一九六四、昭和期の経済・社会学者）</small>            |
| 永田清 <small>（一九〇三〜五七、昭和期の経済学者、経営者）</small>   | 新明正道 <small>（二八九八〜一九八四、大正・昭和期の社会学者）</small>            |
| 矢部貞治 <small>（一九〇二〜六七、昭和期の政治学者）</small>      | 平貞蔵 <small>（二八九四〜一九七八、大正・昭和期の社会思想家）</small>            |
| 新居格 <small>（二八八八〜一九五一、昭和期の評論家）</small>      | 白柳秀湖 <small>（二八八四〜一九五〇、明治期から昭和期にかけての小説家、社会評論家）</small> |
| 板沢武雄 <small>（二八九五〜一九六二、大正・昭和期の歴史学者）</small> | 城戸幡太郎 <small>（二八九三〜一九八五、昭和期の教育心理学者、教育者）</small>        |
| 石川達三 <small>（一九〇五〜八五、昭和期の小説家）</small>       | 武者小路実篤 <small>（二八八五〜一九七六、明治から昭和期の小説家）</small>          |
| 河上徹太郎 <small>（一九〇二〜八〇、昭和期の評論家）</small>      | 宮本三郎 <small>（一九〇五〜七四、昭和期の洋画家）</small>                  |
| 藤田嗣治 <small>（二八八六〜一九六八、大正・昭和期の洋画家）</small>  | 谷川徹三 <small>（二八九五〜一九八九、昭和期の哲学者）</small>                |

じぶんの哲学が人民の幸福に役立たないとしたら、じぶんのすべての業績は無価値である、といったのはカントであった。羽仁五郎によると、これこそが本物の哲学であって、京都学派の哲学はイカサマだという（一〇頁）。

山形高校教授・小松撰郎によると、京都学派の一部の哲学者らは、敗戦後いち早く衣装がえし、民主主義の仮面をかぶり、ジャーナリズムに登場した。（かれらは）侵略戦争の合理化から民主主義へ、なんらの自己批判もなく、水鳥のごとく手軽に移って行くのだが、それがなぜ可能なのか疑問だという（学界時評「哲学」、季刊『大学』第一号所収、帝国大学出版部、昭和二十二年四月）。

終戦後、哲学は一種のブームであった。終戦直後のいわゆる「哲学時代」<sup>(23)</sup>は、昭和二十三年（一九四八）ごろまでつづいたようである。日本史

上かつて見られぬほどの流行をしめた。岩波書店が西田幾太郎の『善の研究』を再刊したとき、売り始めの午前八時の予告にたいして、前日の夕方から顧客が書店のまえに長い行列をつくった。そして予定の三千部をたちまち売りつくした。また中部のある地方の国民学校の教師たちは、前年にでた雑誌『思想』の「西田哲学特輯号」の謄写版ずりを何十部か何百部かをつくり、同好の人びとのあいだに配ったという（真下信一「哲学を求める心」、『朝日評論』第四卷第五号所収、昭和二十二年五月）。

なぜこのように哲学が求められたのか。そのわけはどうも終戦後の日本社会が「敗戦」といった決定的な出来ごとを通して、革命的な価値転倒に出会ったからである。日本人はこの新事態と遭遇して、古い通念を根本的に批判し、新事態に適合するような新しい観念の形成を意図したからである。さらに当時の「民主革命」が哲学を要求したからであろう（崎山謙「人間革命の視野」、『思潮』第十号所収、昭森社、昭和二十三年六月）。戦後まもない日本社会において、文科系と理科系とを問わず、学生は焼け残った神田の書店街をさまよった。かれらは生活のみじめさや暗さの中で、生きる張りを哲学にもとめようとして、何かに憑かれたかのように書店街をさまよひ、一冊の哲学書を買った。たとえそこに書かれていることが理解できなくても、わからないということが哲学であった。

わが国の哲学は、職業哲学者とそれにつらなる哲学青年（学徒）の愛好物にすぎなかった。<sup>(24)</sup>敗戦後、三度の食事も満足に摂れず惨たんたる情況にあるとき、国民は「哲学的」になった。国民にとっていちばん関心があったのは、これからの生き方をもとめての哲学であったのであろう。

哲学は手軽に真理を教えてくれるし、しかも思索（秩序立てて考えを進める）の機会をあたえてくれるものだった。ひとは敗戦後の窮乏生活——売食いのタケノコ生活のなかでも哲学に何か慰しや解決策を、何かの答をもとめようとしたものであろう。ともあれ戦後ほどなく哲学の人氣が急上昇したようで、矢内原伊作（一九一八〜八九、昭和期の哲学者、評論家、法政大学教授）は、「現代の学生は、哲学がたいへん好きである」と、のべている（『思潮』第七号所収、昭森社、昭和二十三年二月）。

戦前までのわが国の哲学は、ヨーロッパ哲学から逸脱することなく、その忠実な使徒となり、先賢の学説を直訳的に翻訳紹介したり、種本としてもを書いておればよい段階であった。が、いまや西洋哲学の輸入に吸々とする時代はとうにおわり、これを同化し、日本人としての新しい哲学を創造する時期にきている。

日本の哲学はどうあるべきか。そのあり方をめぐって、わが国の哲学者は明治期以来さまざまの考えをのべている。

加藤弘之（一八三六～一九一六、東京帝大総長）……………東洋古来の哲学を西洋人にも知らせる必要がある。またわれわれも

西洋のたえまなく進歩する哲学を吸収し、比較対照、取長補短の方法によって哲学の進歩を図る必要がある（『東洋哲学』第一編第一号、明治二十七年三月）。

西村茂樹（一八二八～一九〇二、華族女学校校長）……………『東洋哲学』というものは、西洋の哲学を採用したり、東洋的材料

をあつめたりして建設した一大学科の意である（同右）。

井上哲次郎（一八五五～一九四四、東京帝大教授）……………もとより西洋哲学を研究する必要があるが、東洋哲学もまた軽視す

べきではない。西洋人がこれを研究することは容易でないから、東洋人がこれをおこなって学界に幾分の光彩をそえるべきである（同右）。東西洋哲学は、まったく違った系統のものであるから、区別しなければならぬ。東西洋の区別を超越して、日本人であるからには、日本精神のちからから哲学する外はない。新たなる思索の方針を開拓すべきであると思う（『井上哲次郎選集』潮文閣、昭和十七年十一月）。要するに井上は、東西思想を統合することによって独自の考えを構築しようとしたという（桑木敏翼談<sup>125</sup>）。換言すれば、東西思想に結託してじぶんの立脚地をもつということである。

有馬祐政<sup>すけまさ</sup>（一八七三～一九三一、日本思想史家）……………西洋哲学を輸入し、それをうのみにするだけではだめである。日本

の哲学を生み出すには、日本古来の哲学と舶来の哲学とをひとつのかたまりにすべきである（有馬祐政著『日本哲学要論 全三』（光融館蔵の「序」、明治三十五年四月）。

遠藤隆吉<sup>りゅうきち</sup>（一八七四～一九四六、社会学者）……………だいたいにおいて哲学思想は、日本化せねばならぬと思う。西洋や

インドの思想をそのまま解することはひじょうにむずかしい。日本化ということは、われわれ日本人の人情に適し、したがってわれわれの生活に適するということになる。水をじぶんの腹に適せぬほど

飲むと、腹をこわすのと同じ理屈で、哲学思想も、人情に適し、生活に適してはじめて価値あるものとなる。

均しく哲学を学ぶにしても、ただ西洋哲学のカントやフィヒテの説をそのまま繰り返したのでは、とうてい腹に落ちぬ。日本人が西洋人の説をそのまま理解しようとしてもわかるはずがない。日本的は自然である（遠藤隆吉「哲学の日本化」、『東洋哲学』第二五篇第六号所収、大正七年六月）。

齋藤响（一八九八〜一九八九、東洋大学、明治大学教授）……………西洋の哲学のような、厳密に学的な体系的なものは日本には発見せられないというのが常識になっている。日本のものは何となく貧弱で、粗笨で、とうてい西洋に匹敵しえないようにみえる。日本の学者が書いたものは、灰色な無味乾燥なもので、どうしても日本文化に同情がもてなくなるようなものが多い。

近來は日本主義や日本精神鼓吹の声に依じて現れてきたものは、どうもヒイキの引倒しという傾向がある。既往の個々の哲学者にたいする理解が浅薄であった。その取りあつかい方が学術的ではなかったから、日本の思想史や哲学史を貧弱なものにした。われわれは先駆者たちを吟味し直してゆかねばならぬ（齋藤响「日本哲学者の取扱ひ方に就て」、『思想と文学』第五卷第三号所収、「思想と文学」発行所、昭和十五年二月）。

小松撰郎（一九〇八〜七五、山形高校教授をへて神戸経済大学、東海短大教授）……………日本の哲学を改革するためには、その封建性を破壊することが第一の条件である。封建性は割拠性・神秘性等として現われる。日本のブルジョア哲学は、西田・田辺哲学においてその終点に達した。二人の哲学にまわりついている封建性を批判することは、哲学改革にとって重要なことである（小松撰郎『東洋的無』への決別『学

務台理作（一八九〇～一九七四、東京文理科大教授をへて慶応義塾大教授）……

生評論』所収、学生書房、昭和二十一年十一月）。

日本における今後の哲学は、道義としての文化の問題を中心として動くであろう。われわれ日本民族は、今後一独立国の国民として、生き抜くことができるかという課題を世界的に解決することになるであろう（務台理作「日本今後の哲学」、『展望』一月号所収、筑摩書房、昭和二十一年一月）。

下村寅太郎（一九〇二～一九五、東京文理科大教授）……

哲学は本来西洋に起源をもつものであっても、それが世界性をもつところにまさに「哲学」なのである。われわれの代表的な哲学者はすでに受容的段階を越えて、積極的、自主的な建設の道についている。それはもはや従来のごとく単に西洋哲学における整合性（理論の内部に矛盾がないこと）を追究することではなく、東洋の体験を世界性に媒介せしめ、真に哲学を主体化せしめるにある。

それはもはや明治時代の外面的な総合―折衷でなく、伝統を通して伝統を越えた真に世界的哲学、世界哲学を意図している。それこそ真の哲学であろう（下村寅太郎「東洋哲学（明治以後の日本哲学）」、『哲学研究入門』所収、魚住書店、昭和三十年六月）。

これらの先学の意見を総合すると、東西の思想の比較研究をしたり、長短を採ったりして世界哲学を創世せよというのであろう。また外来思想を取り込んで、日本人の哲学を豊かにせよというのであろう。

戦後の日本哲学の発展における特徴のひとつは、多様化・多極化という。いま日本哲学の発展を時代的に区分すると、左記のようになる。

第一期……昭和二十年（一九四五）から同三十年代（一九五〇）中ごろまで。学問の自由がえられ、マルクス主義が台頭した。実存主義、实用主義プラグマティズムが日本に入ってきた。

第二期……昭和三十年（一九五〇）中ごろから同四十五年（一九七〇）初頭あたりまで。この間、日本経済は高度成長期をむかえ、社会科学や哲学がさかんになった。マルクス主義、現象学、分析哲学が主導的地位を占めた。出版各社は、思想関係の大型叢書をつぎつぎと刊行した。岩波講座『現代思想』（一七巻）、同『哲学』（一八巻）、『近代日本思想大系』『現代日本思想大系』（筑摩書房）など。

第三期……昭和四十五年（一九七〇）から同六十四年（一九八〇年代）末まで。日本はポスト工業社会にむかい、国際化の宣伝文句のもとに社会学や哲学が発展し、数多くの研究成果が生まれた。中村元<sup>はら</sup>、山崎正一<sup>まさかず</sup>、井筒俊彦らは、東西哲学の境界を越えて、新たに世界哲学の構築につとめた。個人の著作集などが刊行された（大宗道編『戦後日本哲学概論』（農山漁村文化協会、平成十一年十一月）、二八〜二九頁）。

西洋哲学は、その言語、その概念、その思考法にいたるまで東洋のものともまったく性格を異にし、内容的にもけっして理解しやすいものではないが、こんにちに至るまで夜々<sup>し</sup>として学ぶ者はすくなくない。むかしに比べると、西洋哲学の勢いはやや純化しているかも知れないが、苦境の時代、不安な時代にこそ哲学が必要とされる。

終戦後の哲学界には、流れとして観念論や唯物論、実存主義があったが、それらはけっして支配的ではなく、また主導的な思潮ではなかった。戦後六十五年になるが、わが国には西田や田辺の哲学に匹敵するもの——哲学の名に値するもの——がまだ生まれていないようだ。

外国哲学の移植がいちおう完成したいま求められているものは、世界に通用する独創的な哲学研究であろう。解釈学的傾向の研究も間断なくおこなわれているが、今後ともめられるものは、東洋の思惟方法をなおざりにすることなく、純粹哲学の名にふさわしい、日本人としての哲学的思索の成果であろう。

#### 注

- (1) 井上哲次郎座談「明治の哲学回想録」（近代社、大正十五年七月）、一頁。  
香原一勢筆記
- (2) 「日本哲学の現況」（『哲学雑誌』第三冊第二七号所収、明治二十三年二月）、一五九頁。
- (3) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル 全書簡 3』（平凡社、平成六年九月）、一六九頁。
- (4) シリング著 岡本良知訳『日本に於ける耶蘇会の学校制度』（東洋堂、昭和十八年三月）、二二〇頁。

- (5) 注(3)の一七七頁。
- (6) 新村出著『日本吉利支丹文化史』(地人書館、昭和十六年五月)、五九頁。
- (7) 注(4)の二五六頁。
- (8) 松本正夫「中世哲学の移植と発展」(別冊『哲学評論』四卷一号所収、昭和二十四年六月)
- (9) 桑木厳翼著『明治の哲学界』(中央公論社、昭和十八年三月)、八頁。
- (10) 三枝博音  
清水幾太郎編『日本哲学思想全書 第一巻 思想 哲学篇』(平凡社、昭和三十二年六月)、三頁。
- (11) 同右、八頁。
- (12) 注(10)の七頁。
- (13) 注(10)の一八頁。
- (14) 注(12)におなじ。
- (15) 注(10)の九頁。
- (16) 注(9)の一五頁。
- (17) 鳥井博郎著『明治思想史』(三笠書房、昭和二十二年二月)、六八頁。
- (18) *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek, Zesde Deel, A. W. Sijthoff's Uitgevers-Maatschappij, Leiden, 1924, P. 1080-1081*
- (19) 注(9)の一七頁。
- (20) 豊川昇著『哲学者覚書』(鳳文書林、昭和二十二年七月)、二〇七頁。
- (21) 注(17)の六七頁。
- (22) 注(17)の七五頁。
- (23) 「第一編 思想界の変遷」(『太陽』定期増刊 第一五巻第三号 明治史 第七篇「文芸史」所収、明治四十二年五月)
- (24) 同右、一一頁。
- (25) 清原貞雄「明治思想史」(『解放 明治文化の研究』十月特大号所収)、一一八頁。
- (26) 同右、一二二頁。
- (27) 注(25)の一七九頁。
- (28) 注(17)の新版『明治思想史』(河出書房、昭和二十八年十二月)、六七頁。

- (29) 高山林太郎「明治三十年史」(『太陽』臨時増刊 第四卷第一九号所収、明治三十一年四月)
- (30) 金子筑水「明治大正の哲学」(『太陽』創業四十周年記念増刊 明治大正の文化 第三三卷第八号所収、博文館、昭和二年六月)、一九四頁。
- (31) 同右。
- (32) 三角寛著『日本勃興 秘史』(一元社、昭和十年六月)、七四五頁。
- (33) 『東京帝国大学五十年史 上冊』(非売品)(東京帝国大学、昭和七年十一月)、一三二七頁。
- (34) 『東京帝国大学学術大観 総説 文学部』(東京帝国大学、昭和十七年十二月)、三三三頁。
- (35) 『東洋大学百年史 通史編 1』(学校法人 東洋大学、平成五年九月)、八五頁。
- (36) 同右、一三六頁。
- (37) 「哲学の近況」(『早稲田文学』第三号所収、東京専門学校、明治二十四年十一月)
- (38) 注(23)の三七頁。
- (39) 注(23)の一一頁。
- (40) 注(32)の七四六頁。
- (41) 注(23)の三六頁。
- (42) 宮川透著『近代日本の哲学』(増補版) 勁草書房、昭和四十六年五月)、六八頁。
- (43) 注(32)の七四六頁。
- (44) 注(42)の七一頁。
- (45) 注(42)の六五頁。
- (46) 『読める年表・日本史』(自由国民社、平成二年十月)、八六五頁。
- (47) 注(23)の三六頁。
- (48) 井上哲次郎君談「日本の哲学教師」(『太陽』第九卷第一三三号所収、明治三十六年十一月)
- (49) 西田幾太郎「明治二十四年頃の東京文科大学選科」(『西田幾太郎全集 第十二卷』(岩波書店、昭和四十一年一月)
- (50) 和辻哲郎「ケーベル先生」(『思想』「ケーベル先生追悼号」第二三三号所収、岩波書店、大正十二年八月)
- (51) 注(42)の七三頁。
- (52) 注(32)の七四九頁。

- (53) 注(32) におなじ。
- (54) 注(23) の三七頁。
- (55) 注(30) の一九七頁。
- (56) 注(30) の一九六～一九七頁。
- (57) 注(30) の一〇七頁。
- (58) 『早稲田文学』(明治二十四年十一月)
- (59) 注(55) におなじ。
- (60) 『京都帝国大学史』(京都帝国大学、昭和十八年十二月)、六一七頁。
- (61) 注(30) の一九八頁。
- (62) 『国語大辞典』(小学館、昭和五十六年十二月)、一三四三頁。
- (63) 注(30) の一九八頁。
- (64) 注(30) の一九九頁。
- (65) 注(30) の一九九～二〇〇頁。
- (66) 注(60) の六一六頁。
- (67) 宮西一積著『近代思想の日本的展開』(福村書店、昭和三十五年五月)、一五三頁。
- (68) 船山信一著『明治哲学史研究』(ミネルバ書房、昭和三十四年十月)、二七頁。
- (69) 同右、二八頁。
- (70) 注(30) の二〇〇頁。
- (71) 小松撰郎『ドイツ観念論の移植と発展』『別冊 哲学評論 日本における西洋哲学の系譜』民友社、昭和二十四年一月)、五五頁。
- (72) 注(70) におなじ。
- (73) 下村寅太郎編『哲学研究入門』(魚住書店、昭和三十年六月)、三一四頁。  
淡野安太郎
- (74) 同右。
- (75) 注(60) におなじ。
- (76) 注(60) の六一七～六一八頁。

- (77) 注(60)の六一九頁。
- (78) 注(30)の二〇三頁。
- (79) 重松信弘著『日本思想史通論』(理想社、昭和十九年四月)、二六九頁。
- (80) 注(30)の二〇四頁。
- (81) 下村寅太郎「東洋哲学」(日本) (下村寅太郎編『哲学研究入門』所収、魚住書店、昭和三十年六月)、三二〇頁。
- (82) 同右、三一九頁。
- (83) 榑俊雄「日本の哲学」(三木清編『新版現代哲学辞典』所収、日本評論社、昭和十六年三月)、四〇六頁。
- (84) 注(83)の四〇八頁。
- (85) 注(81)におなじ。
- (86) 『別冊 哲学評論 日本における西洋哲学の系譜』V.IV No.1、五七頁。
- (87) 注(83)の四〇七頁。
- (88) 注(83)の四〇八頁。
- (89) 同右。
- (90) 大江精志郎「現代日本哲学界の概見」(『理想』第四二号所収、昭和八年九月)、一九九頁。
- (91) 白井二尚、高坂正顕他編『哲学年鑑』第一輯 昭和十七年版 (靖文社、昭和十八年二月)、一九頁。
- (92) 鬼頭英一「現代日本の哲学」(『理想』第一三二号所収、理想社)、六五頁。
- (93) 同右、六九頁。
- (94) 山崎正一「終戦以後我国哲学界の展望」(『人文 創刊号』所収、文部省人文科学委員会、昭和二十二年三月) 注(91)におなじ。
- (96) 田間義一著『現代哲学者論』(育英書院、昭和十八年一月)、二四頁。
- (97) 注(96)の二三頁。
- (98) 注(96)の一二頁。
- (99) 注(96)の一九頁。
- (100) 同右。

- (101) 注(96)の一八頁。
- (102) 注(96)の三三頁。
- (103) 注(96)の三一頁。
- (104) 『別冊 太陽 早稲田百人』(平凡社、昭和五十四年十一月、一八九頁。
- (105) 注(96)の三三頁。
- (106) 『立正大学の二二〇年』(立正大学学園、平成四年十月)、四八頁。
- (107) 白井二尚、高坂正顕他編『哲学年鑑』第二輯 昭和十八年版(靖文社、昭和十九年一月)、四七頁。
- (108) 『図説 昭和の歴史⑧ 戦争と国民』(集英社、昭和五十五年五月)、一〇五頁。
- (109) 『帝国大学年鑑』昭和十九年度版(帝国大学新聞社、昭和十八年九月)、三六三頁。
- (110) 寺田由永「難波田先生との出会い」(『難波田春夫著作集 月報 II』早稲田大学出版部、昭和五十七年四月)
- (111) 注(109)におなじ。
- (112) 注(86)の七〇〜七一頁。
- (113) 渡辺義晴「現代の哲学的状況」(『学生評論』第三卷第二号所収、学生書房、昭和二十二年十一月)
- (114) 哲学年鑑刊行会編『哲学年鑑 一九四五〜一九四七』(創元社、昭和二十四年四月)、三頁。
- (115) 同右。
- (116) 注(94)の一・二頁。
- (117) 吉田光「日本哲学 3―戦後の動向と課題(1)」『哲学研究大系 4』所収(河出書房新社、昭和五十二年九月)、八五頁。
- (118) 同右の九二頁。
- (119) 大塚虎雄著『学界新風景』(天人社、昭和五年四月)、七頁。
- (120) 井波耕次「哲学とは何であるか」(『哲学評論』Vol. III、民友社、昭和二十三年八月)、二八頁。
- (121) 注(119)におなじ。
- (122) 『哲学年鑑』(創元社、昭和二十五年四月)、一八頁。
- (123) 『講座 戦後日本の思想 第一卷』(思潮社、昭和三十八年一月)、三三三頁。
- (124) 崎山謙「人間革命の視野」(『思潮』第一〇号所収、昭森社、昭和二十三年六月)

(27) G. Kuwaki, Professor of Philosophy, Tokyo Imperial University: *The Philosophical Tendencies in Japan (Die Philosophischen Tendenzen in Japan)*, p. 4  
これは桑木敏翼教授が、大正十五年（一九二六）九月十七日ハーバート大学における「第六回 国際哲学会大会」において講演したときの草稿。